

YAMANOWAKI SITE

山之脇遺跡第2次発掘調査報告書

— 宅地造成工事に伴う発掘調査 —

2021

山之脇遺跡 第2次発掘調査報告書

—宅地造成工事に伴う発掘調査—



令和三年三月

彦根市

令和3年3月

彦根市

例　　言

1. 本書は彦根市山之脇町に所在する山之脇遺跡の第2次発掘調査報告書である。
2. 調査に関する調整、現地調査ならびに整理調査は彦根市が行った。所在地・調査期間等について以下とおりである。

現地調査　　所在地：彦根市山之脇町字九反田44-1 外5筆

調査原因：宅地造成工事

期間：平成30年8月1日～平成30年11月30日

整理調査　　期間：令和2年5月8日～令和3年3月31日

3. 本調査は、彦根市教育委員会文化財部文化財課（令和2年4月1日～彦根市歴史まちづくり部文化財課）が実施した。各年度の調査の体制は下記のとおりである。

【平成30年度】（現地調査）

教育長：善住喜太郎

文化財部長：高田秀樹

文化財課長：松宮智之

課長補佐兼管理係長：北坂崇

文化財係長：三尾次郎

主査：林昭男

主査：田中良輔

副主査：渡邊輝（～平成30年11月）

主任：秋篠功二（平成29年4月1日～文化庁派遣） 技師：船山友祐

主任：西坊仁志（平成30年12月～） 技師：内藤京

臨時職員：沖田陽一

臨時職員：飯島由紀子

文化財部次長：廣瀬清隆

主幹兼歴史民俗資料室長：井伊岳夫

副主幹兼史跡整備係長：北川恭子

主査：深谷覺

主査：戸塚洋輔

主査：小林圭一

主任：斎藤一真

技師：船山友祐

技師：内藤京

臨時職員：樋口杏奈

【令和2年度】（整理調査）

市長：大久保　貴

歴史まちづくり部長：廣瀬清隆

副参事兼文化財課長：松宮智之

主幹兼史跡整備係長：鈴木康弘

副主幹：小川有紀

文化財係長：三尾次郎

主査：林昭男

主査：田中良輔

主任：斎藤一真

主任：西坊仁志

技師：船山友祐

会計年度任用職員：沖田陽一

会計年度任用職員：飯島由紀子

会計年度任用職員：久保亮二

会計年度任用職員：小野直子

歴史まちづくり部次長：久保達彦

主幹兼歴史民俗資料室長：井伊岳夫

主幹：辰巳清

課長補佐兼管理係長：牧田歩

主査：多賀公一

主査：戸塚洋輔

副主査：門西靖子

主任：鈴木達也

主任：北村双葉

技師：内藤京

会計年度任用職員：樋口杏奈

会計年度任用職員：岡田ひとみ

会計年度任用職員：豊村たまき

会計年度任用職員：阿部春香

4. 現地調査と整理調査は林が担当し、以下の諸氏が参加した。

現地調査：伊東幸一 北村隆行 北村富男 小森敏夫 佐々木公子 佐藤龍成

高橋陸夫 忠田俊男 寺村芳和 西村豊和 林竹夫 久木正弘

吉田輝一 渡邊徹（以上、調査作業員）

久保亮二（以上、調査補助員）

整理調査：小野直子 久保亮二 樋口杏奈

5. 本書で使用した遺構実測図は、林、樋口杏奈、久保亮二が作成し、遺物実測図は、林、樋口杏奈、久保亮二、小野直子が作成した。遺構と遺物の写真撮影は、林が行った。

6. 本書の執筆及び編集は、林が行った。

7. 本書で使用した方位は真北に、高さは東京湾平均海面に基づく。

8. 本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市で保管している。

目 次

例言

第1章 序 論

| | |
|-------------------|----|
| 第1節 調査に至る経緯と経過 | 1 |
| (1) 調査に至る経緯 | 1 |
| (2) 発掘調査の経過と方法 | 4 |
| (3) 整理調査の経過と方法 | 5 |
| 第2節 地理的・歴史的環境 | 5 |
| (1) 地理的環境 | 5 |
| (2) 歴史的環境 | 8 |
| (3) 山之脇遺跡の概要と既往調査 | 14 |

第2章 発掘調査の成果

| | |
|-----------------------------|----|
| 第1節 基本土層および検出遺構の概要 | 15 |
| (1) 基本土層 | 15 |
| (2) 検出遺構の概要 | 15 |
| 第2節 上層の遺構・遺物 | 20 |
| (1) 概 要 | 20 |
| (2) 溝 | 20 |
| (3) 井戸 | 28 |
| (4) 土坑 | 33 |
| (5) 小穴 | 34 |
| (6) その他 | 39 |
| 第3節 下層の遺構・遺物 | 39 |
| (1) 概 要 | 39 |
| (2) 盛り土層（Ⅲ層）包含遺物【土器集中範囲1以外】 | 40 |
| (3) 盛り土層（Ⅲ層）包含遺物【土器集中範囲1】 | 43 |
| (4) 自然流路 | 48 |
| (5) 落ち込み | 49 |
| (6) 溝 | 54 |
| (7) 土坑 | 54 |
| (8) 小穴 | 55 |
| 第4節 時期別の遺構の整理 | 56 |
| (1) 弥生時代後期後葉～古墳時代前期 | 56 |
| (2) 平安時代末～中世 | 56 |
| 第3章 総括 | 61 |
| 第1節 弥生時代後期後葉～古墳時代前期の土器の検討 | 61 |
| 第2節 井戸（SE22）の検討 | 62 |
| 第3節 山之脇遺跡第2次調査の成果と今後の課題 | 64 |

図版

報告書抄録

第1章 序論

第1節 調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

本書は、民間開発により実施した山之脇遺跡第2次（彦根市山之脇町字九反田44-1 外5筆）発掘調査の成果をまとめたものである。

山之脇遺跡は、彦根市山之脇町に所在する古墳時代から中世にかけての複合遺跡である。芦川と大上川の中間に位置し、両河川が形成する複合扇状地の先端より下方、標高94～95mの自然堤防上に位置する。調査地周辺一帯は長年水田や畑などの耕作地としての土地利用が広がっていたが、近年では宅地造成や集合住宅などの開発が進んでいる地域である。今回の調査地点も、開発計画以前は水田としての土地利用が行われていた。

今回の記録保存を目的とする発掘調査は、民間開発事業者が計画した宅地造成工事に先立ち提出された文化財保護法第93条の届出（平成30年3月26日付け）及び調査依頼（平成30年3月26日付け）に基づくものである。届出の提出に伴い、開発予定地における遺構・遺物の有無を確認するため、平成30年5月18日に試掘調査を実施した。試掘調査は、開発予定面積約4,235m²を対象として試掘トレチを17箇所（2m×2m）設定してバックホーにて掘削、細部は人力による掘削・検出作業を行い、遺構・遺物の確認を行った。

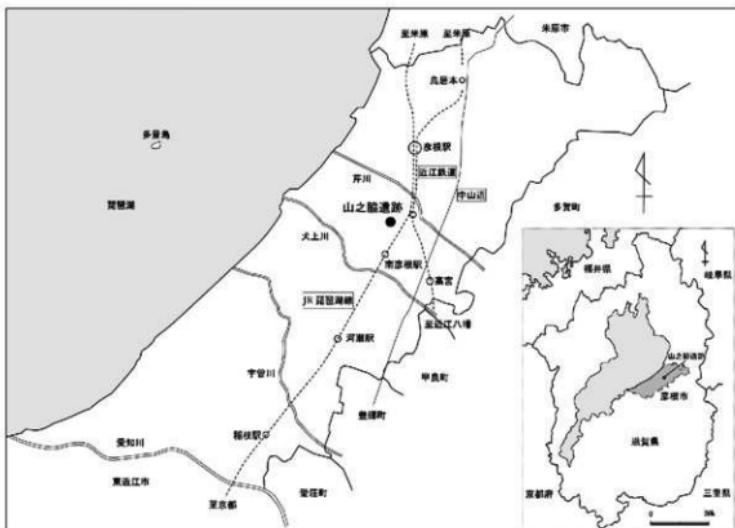


図1 山之脇遺跡の位置図

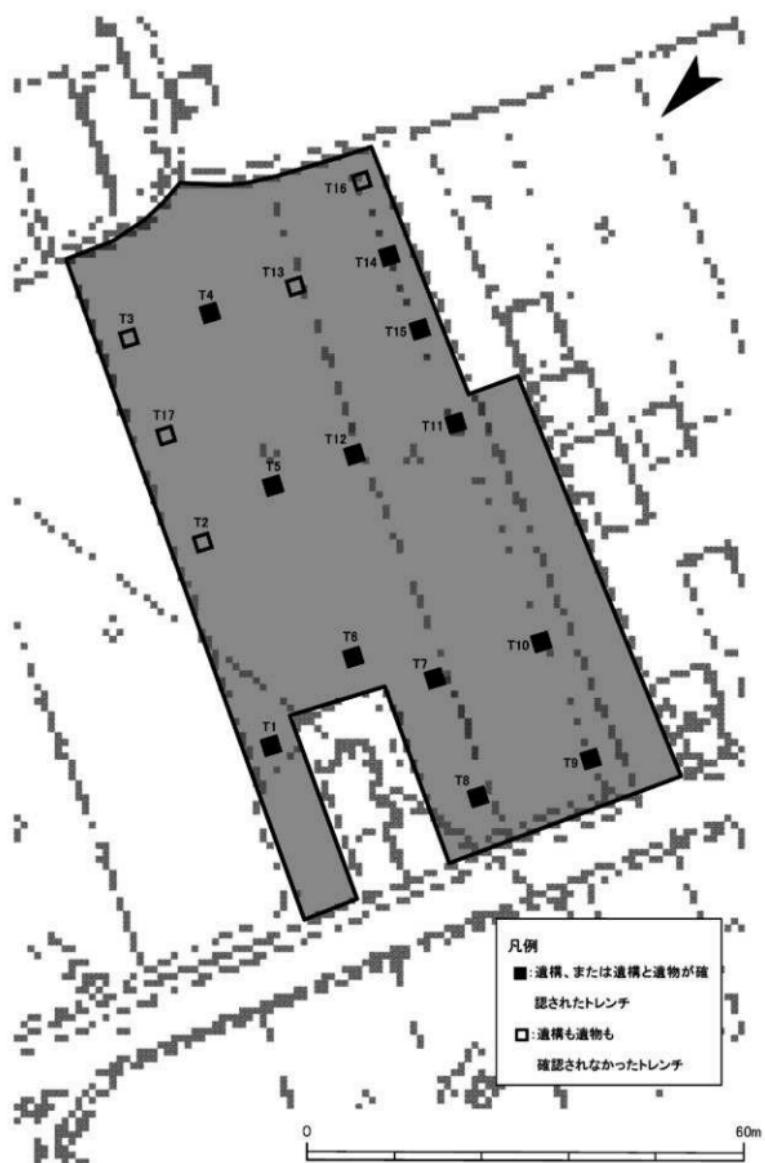


図2 試掘調査のトレンチ位置図

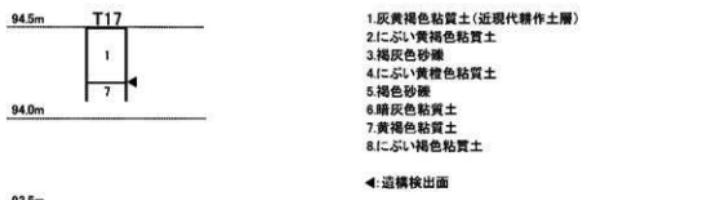
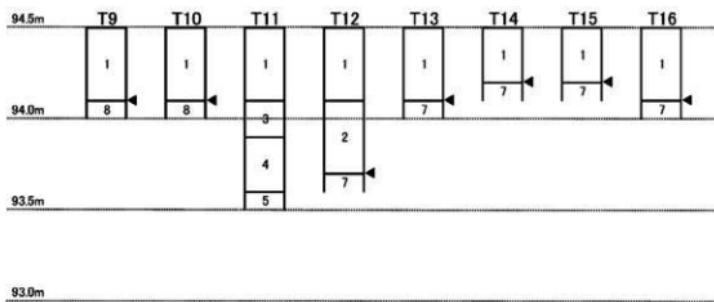
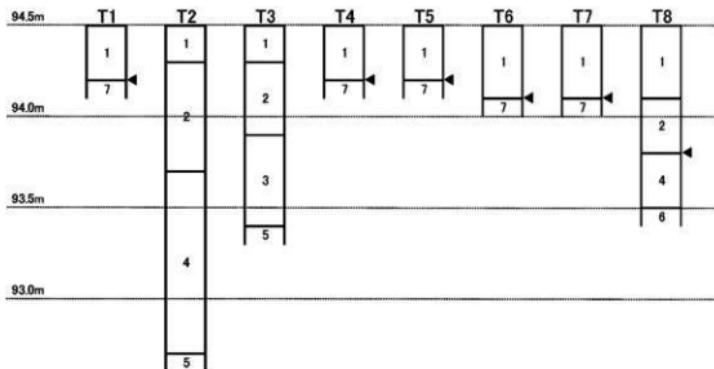


図3 試掘調査土層断面柱状図

試掘調査の結果、1層：灰黄褐色粘質土、2層：にぶい黄褐色粘質土、3層：褐灰色砂礫、4層：にぶい黄橙色粘質土、5層：褐色砂礫、6層：暗灰色粘質土、7層：黄褐色粘質土、8層：にぶい褐色粘質土の8層を確認した。1層は近現代耕作土で耕作土直下の7・8層で遺構・遺物を確認した。その範囲だが、開発予定地全域の試掘トレンドで遺構・遺物が確認されたため、開発業者と対応に関する協議を行った。協議の結果、宅地部分に関しては全域で遺構面に対する保護層が確保されることが確認されたため記録保存調査の対象範囲から除外し、開発予定地の道路部分についてのみ今回の記録保存調査の対象範囲とした。対象面積は約709m²になる。現地の発掘調査は平成30年8月1日に着手し、平成30年11月30日まで実施した。整理調査に関しては、令和2年5月8日～令和3年3月31日まで行い本報告書の刊行となった。

調査にあたっては、開発業者・土地所有者・近隣住民を始めとする関係者にご理解とご協力を賜った。厚くお礼を申し上げたい。

(2) 発掘調査の経過と方法

現地の発掘調査実施にあたり、彦根市と民間開発事業者との間で埋蔵文化財発掘調査事業受託契約書（平成30年7月2日付け）を取り交わし、契約締結後に現地調査を開始した。調査は、試掘調査の成果に基づき、遺構面直上まで重機による掘削を行い、その後の調査は人力により行った。グリッド設定だが、今回の調査範囲は、宅地造成工事の道路部分であり著しく狭長であるため、図化作業の効率を勘案して道路形状に沿う方位で4m×4m毎のグリッド設定を行い、グリッドの基準となる複数点に平面直角座標値を落とした。グリッド番号は南東端から北西側に向かってアルファベットを付け、北東端から南西側に向かって数字を付した。遺物は基本的に遺構・土層ごとに取り上げたが、遺構を伴わない遺物の取り上げはグリッドごとに行い、北隅にあるグリッド杭の番号を代表させた。遺構図はグリッドを基準に、1/100の遺構分布図と1/20の遺構平面図を基本とし、状況に応じて1/10の遺物出土状況図等を作成したほか、1/20の調査区および各遺構の土層断面図を手実測により作成した。遺構の名称については、文化庁発行の『発掘調査の手引き—集落遺跡発掘編一』記載の略号を用いている。これと数字との組み合わせで遺構名とするが、遺構の種別に番号を与えるのではなく、遺構の種別に関わらず上層では1から二桁の通し番号で、下層では201からの通し番号としている。これにより、各遺構に固有の番号を与えることになり、調査の途上、あるいは整理の過程で遺構の種類に関わる解釈の変更があった場合にも、略号のみを変更し、番号を変更することなく対応できる。ただし、掘立柱建物や櫛など複数の遺構で構成されるものについては、その種別ごとに1から通し番号を付与した。現地の発掘調査は平成30年8月1日に着手し、平成30年11月30日まで実施した。

(3) 整理調査の経過と方法

整理調査の実施にあたり、彦根市と民間開発事業者との間で埋蔵文化財発掘調査事業受託契約書（令和2年5月8日付け）を取り交わし、契約締結後に整理調査を開始した。

遺構図は、原図作成のちトレースを行い、図版の作成を行った。遺物は、洗浄・注記・接合・鑑別・実測、そして原図作成のちトレースを行い図版の作成を行うとともに、遺物の写真撮影を行った。同時に調査成果の検討・文章作成・全体の編集作業を行い報告書の刊行となった。

整理調査に関しては、令和2年5月8日着手、令和3年3月31日まで実施した。これら一連の発掘調査・整理調査によって得られた資料および成果物については彦根市で保管している。

第2節 地理的・歷史的環境

(1) 地理的環境(図1・4)

日本列島の中央に位置し、東西交通の要の位置にある滋賀県、その滋賀県の中央に広がる琵琶湖の東岸に彦根市は位置する。市域の平野は、芹川、犬上川、宇曾川、愛知川の四河川による堆積で形成されている。山之脇遺跡は、彦根市山之脇町に位置する古墳時代から中世にかけての複合遺跡である。遺跡は鈴鹿山系から琵琶湖に注ぐ芹川と犬上川に挟まれた、標高

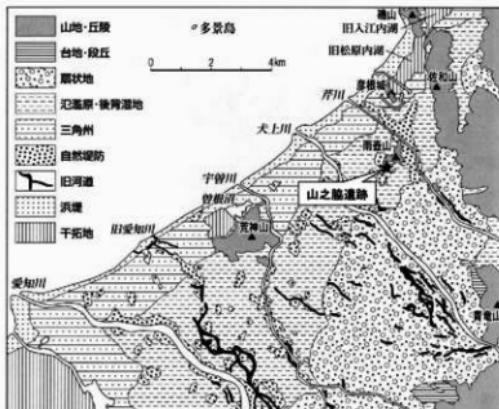


図4 広根市の自然地形（『新修廣根市史』第1巻より）

94～95mの自然堤防と沼澤原・後背湿地が入り組んだ地域に位置する

犬上川は滋賀県東部を流れる流域面積 105.3 km²、流路長 27.3 km を測る一級河川である。源を鈴鹿山中の鞍掛峠と角井峠に発し、湖東平野を潤して彦根市中央部で琵琶湖にそそぐ。標高 130m から 100m にかけて、多賀町櫛崎付近を扇頂とする扇状地を形成しており、滋賀県下最大規模の扇状地を形成しており、降水量の少ないときには、扇頂である標高 130m のあたりから標高 100m のあたりまでの中流域で伏流し、水無川となる。また、標高 100m から 90m にかけて再び水が湧出しているが、必ずしも河道に沿って元来の河川水が湧き出しているのではない。

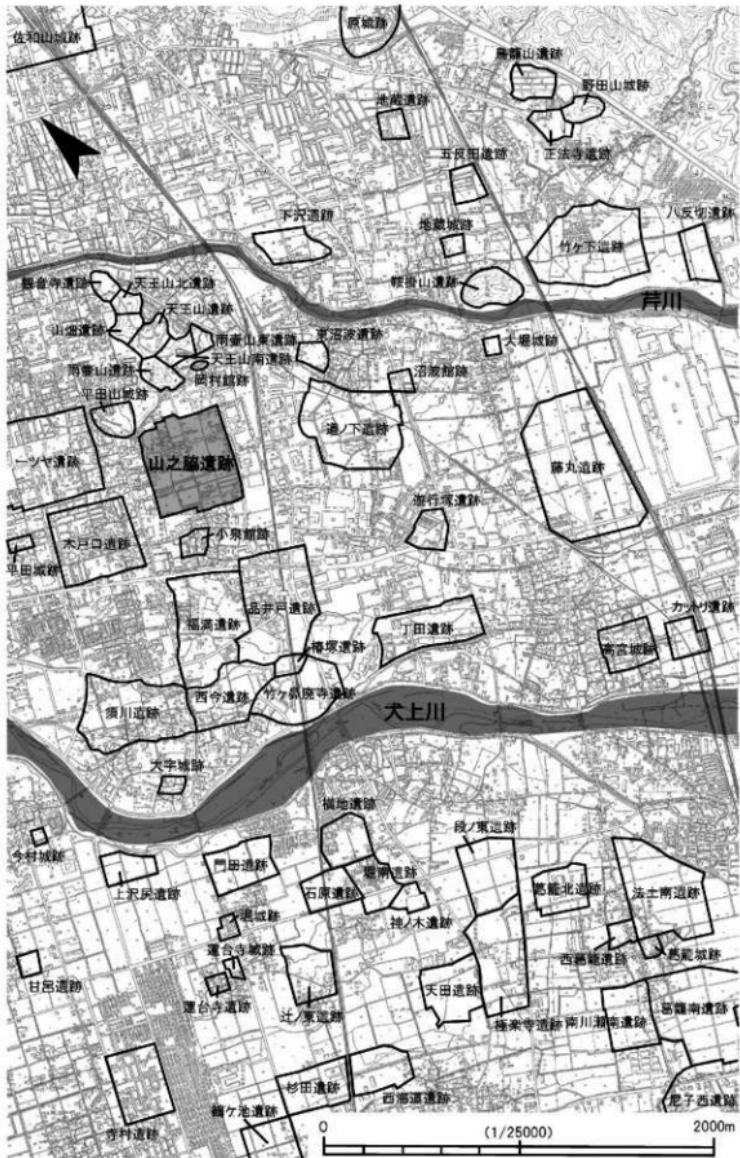


図5 山之脇遺跡と周辺の遺跡分布図



写真1 山之脇遺跡周辺の航空写真（平成21年12月1・2日撮影）

一方、芹川は、滋賀県東部を流れる流域面積 65.1 km²、流路長 17.0 km を測る一級河川である。源を鈴鹿山脈の靈仙山に発し、湖東平野北部・彦根市市街地の南を潤しつつ琵琶湖へ注ぐ。芹川の堆積作用は不活発で、大堀山付近以東の扇状地面は浸食過程に入っている。犬上川と比較して芹川では河道の転移がほとんど見られない。なお、最下流部は、現在琵琶湖に注いでいるが、元々は松原内湖に注がれていた流路が、彦根城下町建設に際して付け替えられたものである。

調査地は、上記の両河川に挟まれた独立丘陵平田山の南麓の山之脇町に位置し、標高約 94 ~ 95m の湧水帯に位置し、豊かな水に恵まれた地域である。遺跡の東部約 2 km には古代東山道が走っており、その東山道と芹川が交差する位置に、烏龍山の比定地のひとつ独立丘陵の烏龍山が位置する。

(2) 歴史的環境 (図 5・写真 1・表 1)

旧石器時代 彦根市域だけでなく、滋賀県下でも、この時代の石器や遺構がまとまって出土した遺跡はなく、わずかに米原市筑摩伝遺跡や立花遺跡でナイフ形石器や搔器が確認されている。また、芹川の上流にあたる多賀町久徳から中川原にかけてナウマン像の臼歯の化石が見つかっており、旧石器人との関わりが推定される。

縄文時代 彦根市域では、屋中寺廃寺遺跡で早期の高山寺式土器、福満遺跡で前期末の大歳山式土器が確認されている。このように早期より遺物の出土は確認されるが、遺構を伴い、遺物量が増加するのは中期末から晩期に入ってからである。犬上川流域では福満遺跡を中心に、土田遺跡（多賀町）・敏満寺遺跡（多賀町）・小川原遺跡（甲良町）・北落遺跡（甲良町）・金屋遺跡（甲良町）などが当該期に当る。福満遺跡では、落ち込みから中期末の北白川 C 式から後期前葉の北白川上層式 2 式までの土器が出土している。敏満寺遺跡（多賀町）では石囲い炉を持つ竪穴建物や土坑が確認されている。小川原遺跡（甲良町）では、後期前葉の北白川上層式二期の配石墓や配石遺構、住居などの遺構が 7,000 m² 以上の広い範囲で見つかっており、犬上川流域における当該期の中心的な遺跡と考えられている。後期後半から晩期前半に入ると金屋遺跡（甲良町）で竪穴建物や柱列が確認され、金屋遺跡の規模が縮小する頃になると、下流の北落遺跡（甲良町）で後期後葉から晩期初頭の小規模な配石遺構などの遺構が確認される。また、福満遺跡の旧河道より晩期後半の土器や石器が確認されている。下流域では、早期末以降、遺物の出土がなかった屋中寺廃寺遺跡でも中期末になって再び土器が出土するようになる。犬上川と宇曾川の中間地帯に位置する鶴ヶ池遺跡では後期後葉の宮滝式土器が確認されている。

松原内湖湖岸沿いに位置する松原内湖遺跡では、中期末から晩期末までの土器や石器、木器などの遺物が大量に出土した。特に、当該遺跡が湖岸に近く地下水位が高いことより、丸木船や飾り弓、ヘラ状木製品などの多くの木製品が出土した。

弥生時代 前期の様相は不明瞭だが、芹川流域の大岡遺跡（多賀町）や犬上川流域の尼子遺

表1 山之脇遺跡周辺の主要遺跡一覧

| 市番号 202- | 遺跡の名前 | 所在地 | 種類 | 時代 | 立地 | 現状 | 備考 |
|---------------------|-----------------|-------------|------------|--------------|-----------|--------------|------------|
| 11 090 | 佐和山城跡 | 彦根市 佐和山町 | 城郭跡 | 中世 | 山頂・山麓・平地 | 山林・水田 | 石碑・面輪・土器 |
| 31 031 | 御殿山城跡 | 彦根市 芹川町 | 散在地 | 中世 | 山頂 | 山林 | |
| 32 032 | 天王山北遺跡 | 彦根市 丹川町 | 散布地 | 古墳～平安 | 山頂 | 山林 | |
| 33 010 | 天王山遺跡 | 彦根市 和田町 | 散布地 | 西唐 | 山頂 | 山林 | 古墳？ |
| 34 033 | 天王山南遺跡 | 彦根市 丹川町 | 散布地 | 中世 | 山麓 | 山林 | |
| 35 034 | 天王山南遺跡 | 彦根市 丹川町 | 散布地 | 中世 | 中腹 | 山麓 | 山林 古墳？ |
| 36 036 | 天原山城跡 | 彦根市 山之脇町 | 散在地 | 西唐 | 山頂 | 山林 | 古墳？ |
| 37 039 | 向寺山城跡 | 彦根市 山之脇町 | 散在地 | 中世 | 山麓 | 山林 | 古墳？ |
| 42 007 | 一ツ山城跡 | 彦根市 平田町 | 散布地 | 古墳～中世 | 平地 | 水田・宅地 | |
| 43 006 | 木戸山城跡 | 彦根市 平田町 | 散布地 | 鏡文～中世 | 平地 | 水田・宅地 | |
| 44 037 山之脇城跡 | 彦根市 山之脇町 | | 散布地 | 古墳～中世 | 平地 | 水田・宅地 | |
| 45 044 | 下沢遺跡 | 彦根市 西沢町 | 散布地 | 古墳 | 平地 | 水田・宅地 | |
| 46 046 | 地藏跡 | 彦根市 地藏町 | 古跡 | 古墳 | 平地 | 水田・宅地 | 円墳 |
| 47 047 | 五反田遺跡 | 彦根市 正法寺町 | 散在地 | 古墳 | 平地 | 水田 | |
| 48 048 | 白峰山城跡 | 彦根市 正法寺町 | 墓跡 | 奈良 | 山麓 | 山林・水田・宅地 | 瓦窯跡 |
| 49 049 | 正法寺遺跡 | 彦根市 正法寺町 | 古跡 | 古墳 | 平地 | 水田 | |
| 51 018 | 御山遺跡 | 彦根市 野瀬町 | 散布地 | 古墳～中世 | 平地 | 水田・宅地 | |
| 52 015 | 御茶園跡 | 彦根市 西今町 | 集落跡 | 鏡文～中世 | 平地 | 水田・宅地 | 笠原連動土坑溝古墳 |
| 53 016 | 西今遺跡 | 彦根市 西今町 | 散布地 | 古墳～中世 | 平地 | 水田・宅地 | 近西今塚古墳 |
| 54 012 | 片丘口遺跡 | 彦根市 小安町 | 重湧跡 | 鏡文～中世 | 平地 | 水田・宅地 | 鷲立寺跡物・石塔 |
| 55 013 | 保坂遺跡 | 彦根市 竹ヶ森町 | 古跡 | 古墳 | 平地 | 水田・宅地 | 古墳か？ |
| 56 014 | 竹ヶ森山遺跡 | 彦根市 竹ヶ森町 | 寺跡・集落跡 | 弥生～奈良 | 平地 | 水田・宅地 | |
| 57 043 | 道ノ下遺跡 | 彦根市 東波波江 | 散布地 | 古墳～中世 | 平地 | 水田・水田・工場地 | |
| 58 139 | 丁田遺跡 | 彦根市 門高町 | 散布地 | 古墳～中世 | 平地 | 水田・宅地 | 埋立土基・御藤大株 |
| 59 042 | 東沼山遺跡 | 彦根市 東沼山町 | 古跡 | 古墳 | 平地 | 水田 | |
| 60 138 | 遊行原遺跡 | 彦根市 高宮町 | 散布地 | 奈良 | 平地 | 水田 | 高宮寺跡？ |
| 61 052 | 竹ヶ森遺跡 | 彦根市 野瀬山町 | 散布地 | 古墳～中世 | 平地 | 水田・宅地 | |
| 62 041 | 渡丸遺跡 | 彦根市 大堀町・高宮町 | 集落跡 | 古墳～中世 | 平地 | 水田・宅地 | |
| 63 053 | 八反切跡遺跡 | 彦根市 丹波山町 | 散布地 | 古墳～中世 | 平地 | 水田 | |
| 64 140 | 高宮遺跡 | 彦根市 高宮町 | 城郭跡 | 中世 | 平地 | 宅地・学校用地 | |
| 65 141 | カトリ遺跡 | 彦根市 高宮町 | 散布地 | 古墳～中世 | 平地 | 水田 | |
| 69 055 | 甘田遺跡 | 彦根市 甘田町 | 古跡 | 古墳 | 平地 | 水田 | 甘田寺跡伝承 |
| 70 019 | 上沢尻遺跡 | 彦根市 野瀬町 | 散布地 | 古墳～中世 | 平地 | 水田 | |
| 71 126 | 門田遺跡 | 彦根市 鶴町 | 散布地 | 古墳～奈良 | 平地 | 水田 | |
| 72 127 | 譲台寺遺跡 | 彦根市 譲台寺町 | 城郭跡 | 中世 | 平地 | 稻作・宅地 | |
| 73 063 | 寺村遺跡 | 彦根市 白毫町 | 散布地 | 古墳～中世 | 平地 | 水田・宅地 | |
| 76 130 | 楓地遺跡 | 彦根市 鶴町 | 集落跡 | 古墳～中世 | 平地 | 水田・宅地 | 円墳 |
| 77 124 | 石原山遺跡 | 彦根市 交趾町 | 散布地 | 古墳～平安 | 平地 | 水田 | (多賀町) |
| 78 125 | 辻ノ東遺跡 | 彦根市 交趾町 | 散布地 | 古墳～奈良 | 平地 | 水田・稻作 | |
| 79 123 | 神ノ木遺跡 | 彦根市 合餉寺町 | 重湧跡 | 鏡文～奈良 | 平地 | 水田・社地 | 円墳 |
| 81 117 | 鶴ヶ池遺跡 | 彦根市 川瀬馬頭町 | 散布地 | 古墳～平安 | 平地 | 水田 | |
| 82 118 | 杉田遺跡 | 彦根市 川瀬馬頭町 | 散布地 | 古墳～平安 | 平地 | 水田・工場用地 | |
| 83 119 | 西南遺跡 | 彦根市 川瀬馬頭町 | 散布地 | 古墳～平安 | 平地 | 水田・稻作 | |
| 84 120 | 天田遺跡 | 彦根市 楠原寺町 | 散布地 | 古墳～平安 | 平地 | 水田・稻作・宅地 | |
| 85 121 | 梅雨寺遺跡 | 彦根市 梅雨寺町 | 集落跡 | 古墳～奈良 | 平地 | 水田・宅地 | |
| 86 122 | 段ノ東遺跡 | 彦根市 森空町 | 集落跡 | 古墳～平安 | 平地 | 水田・宅地 | |
| 87 116 | 鶴壁北遺跡 | 彦根市 西鶴壁町 | 古遺跡・墨落跡 | 古墳～中世 | 平地 | 水田・庭園・松林 | 円墳 |
| 88 111 | 西鶴壁遺跡 | 彦根市 西鶴壁町 | 古跡 | 古墳 | 平地 | 宅地 | 円墳 |
| 140 131 | 湖南遺跡 | 彦根市 鶴壁町 | 集落跡 | 弥生～奈良 | 平地 | 水田・宅地 | |
| 141 109 | 法士山城跡 | 彦根市 鶴壁町 | 城郭跡 | 古墳～中世 | 平地 | 水田・宅地 | |
| 142 115 | 川原新南遺跡 | 彦根市 川原馬頭町 | 集落跡 | 鏡文～中世 | 平地 | 水田・宅地 | |
| 143 108 | 鶴壁寺遺跡 | 彦根市 鶴壁町 | 散布地 | 古墳～中世 | 平地 | 水田・宅地 | |
| 146 187 | 尼子西遺跡 | 彦根市 出町 | 集落跡 | 奈良～平安 | 平地 | 宅地 | |
| 153 008 | 平田城跡 | 彦根市 平田町 | 城郭跡 | 中世 | 平地 | 宅地 | |
| 154 009 | 平田山城跡 | 彦根市 平田町 | 城郭跡 | 中世 | 平地 | 水田 | |
| 155 011 | 小字泥跡 | 彦根市 小字町 | 城郭跡 | 中世 | 平地 | 宅地 | |
| 156 021 | 大字城跡 | 彦根市 宇尾町 | 城郭跡 | 中世 | 平地 | 水田・宅地 | |
| 159 035 | 河内鹿跡 | 彦根市 東近江町 | 城郭跡 | 中世 | 平地 | 水田 | |
| 160 036 | 御田城跡 | 彦根市 四町 | 城郭跡 | 中世 | 平地 | 山林・宅地 | |
| 161 040 | 大崩城跡 | 彦根市 大崩町 | 城郭跡 | 中世 | 平地 | 水田 | |
| 162 045 | 地藏城跡 | 彦根市 地藏町 | 城郭跡 | 中世 | 平地 | 水田 | |
| 163 051 | 野田山城跡 | 彦根市 野田山町 | 城郭跡 | 中世 | 平地 | 山林 | 瓦窯跡 |
| 165 056 | 今村城跡 | 彦根市 今村町 | 城郭跡 | 中世 | 平地 | 水田・宅地 | |
| 174 094 | 熊城跡 | 彦根市 勝原町 | 城郭跡 | 中世 | 山頂 | その他 | |
| 180 107 | 鳴鶴城跡 | 彦根市 基鶴町 | 城郭跡 | 中世 | 平地 | 宅地 | |
| 182 126 | 譲台寺城跡 | 彦根市 譲台寺町 | 城郭跡 | 中世 | 平地 | 水田 | |
| 183 128 | 御城跡 | 彦根市 鶴町 | 城郭跡 | 中世 | 平地 | 水田 | |
| 203 200 | 御傍山城跡 | 彦根市 正法寺町 | 古跡 | 古墳 | 山頂 | 山林 | 御蔵石資料の削除あり |

跡（甲良町）・北落遺跡（甲良町）・金屋遺跡（甲良町）などの扇状地で前期の土器が出土している。これらは、縄文時代後・晩期から継続している立地であるが水田に適さない犬上川扇状地に位置し、これ以降継続するものではない。尼子遺跡（甲良町）では、弥生時代前期の遠賀川系土器と縄文時代晩期末の凸帯文土器がともに出土している。市域では竹ヶ鼻廃寺遺跡や福里遺跡で前期の土器の出土が確認されている。特に、福里遺跡では前期新段階の小穴から、大量の稻穀とともにアワ、ヒエ、キビの種子が発見されており、弥生時代の農耕を検討する上で重要な資料である。

中期以降は、琵琶湖側の沖積低地部に遺跡の分布は移動する。宇曾川流域には、中期の集落遺跡である川瀬馬場遺跡、同じく集落遺跡で中期から後期にまで及ぶ妙楽寺遺跡がある。犬上川流域では、中期の方形周溝墓群などが確認されている福溝遺跡、後期の方形周溝墓などが確認されている堀南遺跡、同じく後期で竪穴建物を伴った福溝遺跡がある。このように、中期以降宇曾川・犬上川流域では、扇状地の扇端より下流の沖積低地部に集落が展開する傾向にある。これは、扇状地の扇端部における湧水の灌溉利用との関係が考えられる。

愛知川流域の稻部遺跡・稻部西遺跡では弥生時代後期後半から古墳時代初頭を中心とする拠点集落が確認されている。

古墳時代 古墳時代では、前期末に荒神山山頂付近に大型の前方後円墳である荒神山古墳が築造される。その規模・立地などから、愛知郡・犬上郡を含む湖東平野北部を代表する首長墓と考えられる。荒神山山中では、中期の古墳は未だ確認されておらず、山麓の字「塚村」に中期古墳の存在の可能性を指摘する意見があるが確認には至っていない。後期に入ると山中全城に群集墳の広がりが確認される。の中でも、荒神山古墳群山王谷支群の1号墳などで、ドーム状の玄室を持つ石室が確認されている。同様の石室構造は入江内湖の南端に位置する磯山の西端部に形成された磯崎古墳群や大津市北郊域の野添・大谷・大谷南・熊ヶ谷・百穴・福王子古墳群などで見られ、渡来系氏族との関連が指摘されている。

市域北部、芹川や犬上川流域では、前期の遺跡としては、藤丸遺跡・品井戸遺跡・福溝遺跡・堀南遺跡・横地遺跡・段ノ東遺跡・木曾遺跡（多賀町）・土田遺跡（多賀町）などが確認されている。そして、中・後期段階になって、正法寺古墳群・葛籠北遺跡・横地遺跡・神ノ木遺跡・段ノ東遺跡・鞍掛山などに古墳などが築造されるようになる。また、犬上川左岸の八坂東遺跡からも円筒埴輪や朝顔形埴輪、蓋形埴輪の出土が確認されている。犬上川流域の扇状地に位置する、北落古墳群（甲良町）や金剛寺野古墳群（愛荘町）などでは、階段状施設を持つ石室を中心としており、これらの特殊な石室構造を持つ集団はいずれも渡来系氏族との関連が強いと考えられる。これらに対して、犬上川左岸に位置する段ノ東遺跡や葛籠北遺跡では横穴式石室を採用しない群集墳が確認されている。これらの群集墳は、扇状地端部の湧水地点に立地していること、葛籠北遺跡では1号墳およびSK9土壇墓において、収穫具である鉄製の鎌が象徴的に副葬されていることなどから、生産性の高い沖積平野において、水田經營に従事した在地有力層の墳墓群と考えられる。なお、段ノ東遺跡では方墳群である

SX3で家形埴輪、SX4で円筒埴輪が出土している。集落関連では、犬上川流域の扇状地に位置する木曾遺跡（多賀町）、長野遺跡（愛荘町）、なます遺跡（愛荘町）などで「大壁造り」と呼ばれる建物遺構が検出されている。これらは、階段状施設のある横穴式石室の分布域と重なっており、渡来系氏族関連の遺跡と推定される。同じく扇状地に位置する下之郷遺跡（甲良町）、北落遺跡（甲良町）、軽野正境遺跡（愛荘町）などで、中期の5世紀後半頃になると竪穴建物で竈が導入される。

市城南部では、愛知川と宇曾川に挟まれた沖積地で集落の形成が顕著となる。下流域の普光寺遺跡では古墳時代初頭から前期、芝原遺跡では前期を中心に確認されており、中流域の稻部遺跡や長野遺跡（愛荘町）でも同時期の集落が確認される。芝原遺跡では国内最古級となる4世紀後葉の鍛冶工房跡が見つかっている。5・6世紀の鍛冶関連遺跡の多くが、拠点的な集落に多く見られることを考えれば、荒神山古墳の造営、また、塚村古墳の存在の可能性から芝原遺跡での鍛冶工房跡の発見は重要である。これらの遺跡は中期になると衰退し、この時期の遺跡数は少ない。後期になると、芝原遺跡で再び集落が形成され、なます遺跡（愛荘町）で6世紀末頃の切妻大壁造建物が検出されていることは特筆され、渡来系氏族との関係が推測される。後期のゲホウ山古墳は、調査面積が限られたものであるため墳形や規模は不明であるが、鶏形埴輪や馬形埴輪、蓋形埴輪、人物埴輪など豊富な種類の形象埴輪が出土しており、その豊富な埴輪の様相より、当該地周辺の首長の墳墓であったと想定される。

飛鳥・奈良時代 7世紀後半になると、新しく伝來した仏教の影響の下に、権力の象徴が古墳から寺院へと変化する。彦根市域でもこれら古代寺院の比定地が6箇所想定されている。犬上川流域の高宮廃寺（遊行塚遺跡）・竹ヶ鼻廃寺遺跡・八坂東遺跡、愛知川流域の屋中寺廃寺遺跡・下岡部廃寺・普光寺廃寺遺跡である。高宮廃寺は、高宮町の小字「遊行塚」にかつてあった塚状の高まり周辺に位置したと伝わり、白鳳時代後期の藤原宮式の軒瓦のセットが確認されており、藤原宮の造営に関わった近江の有力氏族との関係が想定される重要な遺跡である。竹ヶ鼻廃寺遺跡は、竹ヶ鼻町の小字「上寺海道」「下寺海道」「石仏」「薬師堂」「四反地」などに所在し、出土瓦より白鳳時代創建の犬上郡最古の寺院と考えられている。そこで使用されている山田寺式瓦は、湖東地域に分布する山田寺式瓦の中で最も古い形式とされており、その祖形は攝津の四天王寺と考えられ、四天王寺が対外交渉の拠点であった難波津にあることなどから、対外関係に著しい活躍のみられる犬上氏がその造営氏族の可能性が高いと考えられている。また、竹ヶ鼻廃寺遺跡では、かつての調査で南北軸の掘立柱建物群や柵跡、井戸跡などの遺構群を検出しており、これらは古代の犬上郡役所（郡家）の可能性が高いと考えられている。八坂東遺跡は、犬上川下流域左岸、現在の滋賀県立大学周辺一帯に位置する。古代の犬上郡青根郷の中枢部と推定され、かつての調査で白鳳時代の川原寺式瓦が出土している。屋中寺廃寺遺跡は上岡部町字屋中寺ほかに位置する。採集瓦より白鳳時代の寺院と考えられており、石田茂作氏により法隆寺式あるいは法起寺式の伽藍配置が推定されている。この寺跡の東隣接地に、川原寺（弘福寺）の莊園、平流莊の推定地が広が

る。下岡部廃寺は下岡部町の墓地付近に位置したと推定されている。採集瓦より白鳳時代の寺院と考えられるが遺構は確認されておらず伽藍配置などは不明である。ただ、昭和3年の耕地整理以前は当該地には「大村」という小字が残っていた。天平勝宝3年（751）の絵図「近江国朝流村蟹田地図」に「大村寺」と確認され、小字地名との関わりから、下岡部廃寺がかかつての大村寺であった可能性が推定されている。普光寺廃寺は普光寺町の広浜神社境内周辺と考えられており、神社境内には巨大な塔心礎が残っている。出土瓦より白鳳時代の寺院と考えられるが伽藍配置などは不明である。彦根市域における白鳳期の集落遺跡の状況は、未だ明らかになっていないが、奈良・平安時代に入ると、品井戸遺跡・竹ヶ鼻廃寺遺跡・福満遺跡・法士南遺跡・丁田遺跡などで掘立柱建物跡が検出されているため、これらの中に前代の遺構が含まれている可能性がある。奈良時代においては、竹ヶ鼻廃寺遺跡の南東2km付近に、畿内と東国を結ぶ推定東山道が通過しており、交通・流通面において重要な地域であったといえる。この時期、竹ヶ鼻廃寺遺跡や品井戸遺跡では、大型の掘立柱建物や、硯・石帯・銅匙などの官衙的遺構・遺物が確認されており、これらより現在のJR南彦根駅周辺は犬上郡の郡衙比定地となっており、古代犬上郡における中心地であったと考えられている。また、前述の古代寺院への瓦の供給が想定される、瓦陶兼業窯の鳥籠山遺跡（正法寺瓦窯跡）や、製鉄遺跡であるキドラ遺跡などの生産遺跡も確認されている。

宇曾川以南では、奈良時代の遺跡は顕著でなく、愛知川に近い国領遺跡で確認される程度である。しかし、荒神山北側の東大寺領朝流莊の存在は特筆されるであろう。正倉院に残る蟹田地図によると、愛知、犬上両郡にまたがる70町が東大寺に施入され、朝流莊が成立した。また、延久2（1070）年の『近江国弘福寺領庄田注進状』により愛知郡2条7里・8里・3条16里に弘福寺領平流莊が存在したことが記されており、さらに和銅2（709）年の『弘福寺水陸田目録』に「依智郡田宅拾宅町宅段參拾陸步」とみえることから、弘福寺領平流莊は8世紀初頭には成立していたものと考えられている。具体的な所在地としては、荒神山南麓の下岡部廃寺と屋中寺廃寺に挟まれた地と推定されている。また、この時期の宇曾川流域では、少し上流側の長野遺跡・なまず遺跡・沓掛遺跡（愛荘町）を中心に遺跡は展開する。これらの遺跡の近くには古代東山道に比定される近世中山道が通り、愛知郡衙の存在も想定されており、当該期の中心的役割をなした地域と考えられている。平安時代になると国領遺跡で前代に引き続き集落が営まれるが、普光寺廃寺や芝原遺跡でも遺構・遺物が確認されるようになる。特に、芝原遺跡では京都産縁釉陶器皿・畿内産黒色土器碗・灰釉陶器皿の転用硯がまとめて出土しており、一般集落とは異なる様相がみてとれる。

中世 中世では、平安時代から鎌倉時代にかけての集落が国領遺跡・普光寺廃寺遺跡・市遺跡で営まれる。また、湖上交通が活発化し、市域では松原・薩摩・柳川・三津屋・石寺・須越・八坂が営まれる。そのような中にあって、宇曾川流域に立地する妙楽寺遺跡では室町時代を中心とする遺構が検出され、15世紀末から16世紀後半には、条里地割に方位を揃える水路と道路によって整然と区画された屋敷地が検出されている。貿易陶磁や茶道具も多く出土し、



図6 山之脇遺跡の調査位置図

表2 山之脇遺跡の発掘調査一覧

| 調査 次数 | 調査地/調査面積(m ²)/調査原因 | 調査期間 | 調査主体 | 主な時代 | 主な検出遺構・遺物 | 文献 |
|----------|-----------------------------------|--------------------------|------------------------|----------------------------------|---|----|
| 1 | 山之脇町 地先 315 宅地造成工事 | 2016年4月 ～ 2016年8月 | 彦根市教育委員会 | 弥生時代末～ 古墳時代初期 古墳時代後期 中世 | 井戸、掘立柱建物、桶、溝、臼洞道 弥生土器、土師器、須恵器、 焼き締め陶器、木製品、石製品 | 1 |
| 2 | 山之脇町字九反田44-1 外5番 709 宅地造成工事 | 2018年8月 ～ 2018年11月 | 彦根市教育委員会 (令和元年～彦根市) | 弥生時代後期後葉～ 古墳時代前半 平安時代末～中世 | 溝、土坑、小甕、井戸、臼洞道 土師器、須恵器、石器、山形器、 瓦器、石製品 | 本書 |

文献

1 彦根市教育委員会 2018[山之脇遺跡第1次発掘調査報告書]彦根市教育委員会文化財調査報告書第75集

琵琶湖と宇曾川の水運によって繁栄した商業を生業とする都市的空间であったと考えられている。この妙楽寺遺跡と宇曾川を隔てた対岸には古屋敷遺跡が位置する。道路や土塁で区画された屋敷地が確認され、存続時期が妙楽寺遺跡と一致することから、両遺跡は一体のものと捉えられている。しかし、妙楽寺遺跡が水路によって区画されているのに対し、古屋敷遺跡では、道路や土塁で区画されている点や古屋敷遺跡では妙楽寺遺跡に比べて茶器よりも、

日常雑器の占める割合が高いなどの違いも認められる。

中世後半期では、北の京極・浅井氏と南の六角氏の軍事的衝突が活発化し、市域一帯は、ちょうど両勢力がぶつかり合う地理的関係上、佐和山城や肥田城などの城館が活発に營まれ、佐和山城に関してはその地理的・軍事的重要性より、その後も織田勢力、豊臣勢力へと引き継がれていく。

(3) 山之脇遺跡の概要と既往調査（図6、表2）

山之脇遺跡は、彦根市山之脇町に位置する古墳時代から中世にかけての複合遺跡である。遺跡は鈴鹿山系から琵琶湖に注ぐ芹川と犬上川に挟まれた、標高94～95m自然堤防上に位置する。調査地周辺一帯は長年水田や畠などの耕作地としての土地利用が広がっていたが、近年では宅地造成や集合住宅などの開発が進んでいる地域で、開発に伴い過去に1度本発掘調査が実施されている。今回の調査地点も、開発計画以前は水田としての土地利用が行われていた。

山之脇遺跡で実施された本発掘調査について振り返る。山之脇遺跡第1次調査地は、今回 の調査地の北西約200mに位置する。宅地造成工事に伴い実施した記録保存を目的とする本発掘調査である。弥生時代末～古墳時代初頭、古墳時代後期、中世の3時期の遺構・遺物が確認されている。特に、調査区の大半を占める旧河道から大量の遺物が出土している。

また、過去に5世紀後葉の長脚二段透有蓋高杯の新羅系陶質土器が確認されており、当該地周辺における朝鮮半島との交流を推測させる資料である。

第1次調査地の北東隣接地に現在墓地が拡がっており、「明照寺山之脇墓所」とされている。この明照寺とは、現在平田にある浄土真宗本願寺派明照寺のことである。この寺は、戦国期においては多数の門徒を擁し、近江有数の本願寺方拠点として著名であった。自伝によると、明徳4年（1393）祐海によって開基され、もとは後谷（現犬上郡多賀町）にあり、山之脇を経て元禄14年（1701）に現在地に移転したという。現在の墓地が、当時の明照寺の敷地部分であったと推定される。

山之脇の東隣接地岡町では、中世後期、京極氏に仕えた在地領主である岡氏が当村に居館を構え、居住していたとの伝承がある。居館の推定地が岡町の現在のパナソニックの敷地内の可能性がある。

山之脇の南西隣接地小泉町の小字開出は寛政4年（1792）の『淡海木間攬』に集落の存在が記されており、その形成時期が注目される。この開出集落の立地が、北に接する隣村山之脇村の集落に統いていく位置にあることも興味深い。

参考文献

- 岩崎直也 1986 「地方窯の上限と系譜を求めて（II）—近江を中心に—」『滋賀考古学論叢』3
滋賀県立安土城考古博物館 2006 『扇状地の考古学』
彦根市 2007 『新修彦根市史』第1巻通史編 古代・中世
琵琶湖流域研究会 2003 『琵琶湖流域を読む 上—多様な河川世界へのガイドブック—』
文化庁 2010 『発掘調査の手引き—集落遺跡発掘編—』

第2章 発掘調査の成果

第1節 基本土層および検出遺構の概要

(1) 基本土層 (図7～10・写真2)

調査地は、開発予定地全域が耕作地または休耕田としての土地利用がなされていた。基本層位としては、I～IV層に分類できる。I層：近現代耕作土層（灰黄褐色粘質土、黃灰色粘質土）、II層：耕作土床土層（にぶい黄褐色粘質土、にぶい黄橙色粘質土）、III層：盛り土層（にぶい黄褐色粘質土、他）、IV層：基盤層（黄褐色粘質土、灰オリーブ砂礫）である。 $Y=22935$ 付近から東側では、上層から順番にI層・II層・IV層の堆積が確認された。 $Y=22935$ 付近から西側では、IV層が西に向かって下がっていくため、上層から順番にI層・II層・III層・IV層の堆積が確認された。遺構検出面だが、耕作土・床土（I・II層）直下のIII層上面とIV層上面（上層とする）、 $Y=22935$ 付近から西側ではIII層直下のIV層上面（下層とする）でそれぞれ遺構が確認された。上層の遺構面の標高は、調査区全域で約94.1mを測り。ほぼ平坦な状況であった。これは上層の遺構検出面が耕作土直下という状況からもわかるとおり、過去の耕作地開墾に伴い地面をフラットにするため削平を受けた結果であると推察される。下層の遺構面の標高は、下層東端の $Y=22935$ 付近で約94.1m、西端で約93.6mを測り、旧地形が東から西に下がっている状況が読み取れる。なお、盛り土層であるIII層には、古式土器を中心とする遺物が含まれている。

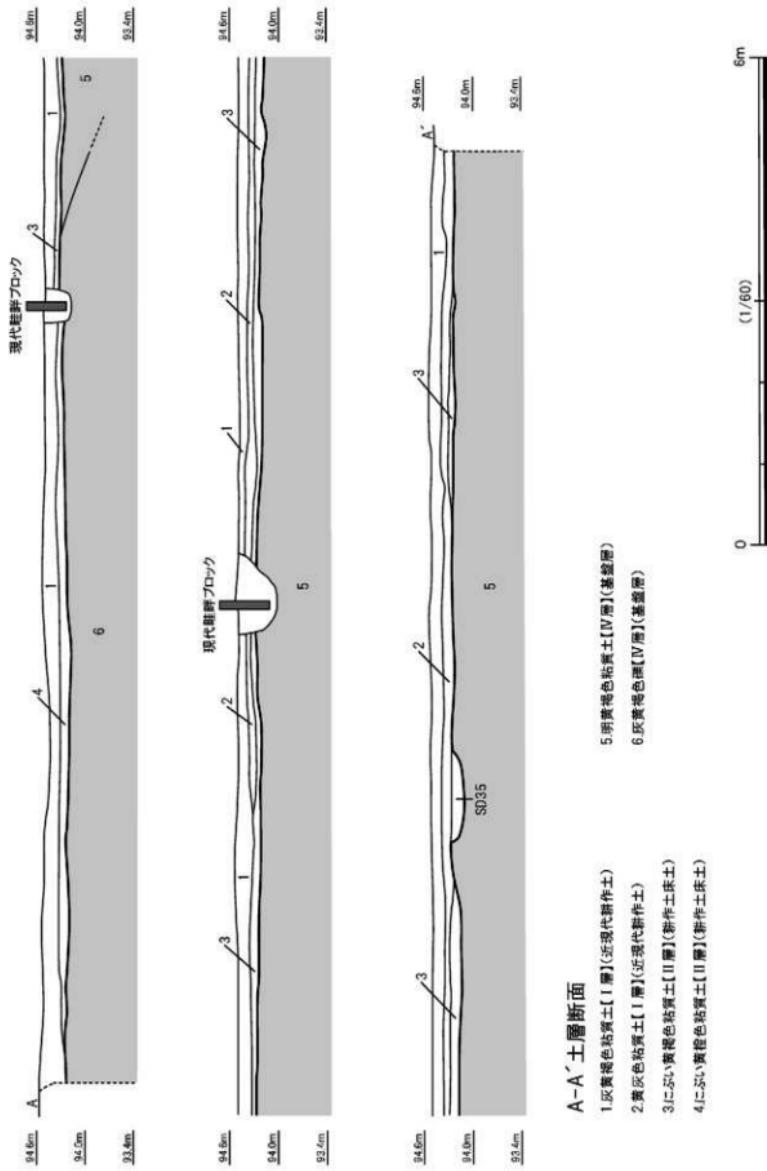


写真2 調査区南西壁(B-B') 土層断面

(2) 検出遺構の概要 (図11・20)

調査区東端部を除いて、ほぼ全域で遺構が検出された。遺構面のひろがりだが、 $Y=22935$ 付近から東側では、I・II層直下に基盤層であるIV層が検出され遺構面は1面のみ、 $Y=22935$ 付近から西側ではI・II層直下に盛り土層であるIII層、III層直下に基盤層であるIV層が検出されたため、遺構面は2面検出された。

上述したように、調査地はもともと東側から西側にかけて緩やかに標高が下がる旧地形を呈していたようである。旧地形の段階で、弥生時代後期後葉から古墳時代前期にかけて人々の営みがあったようであるが、その後、長らく土地利用の痕跡は消える。次に、平安時代末～



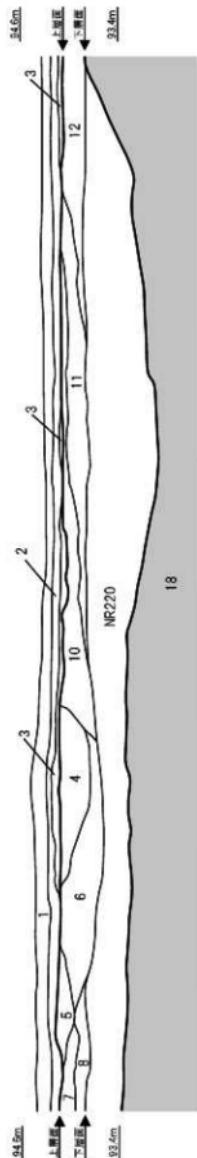
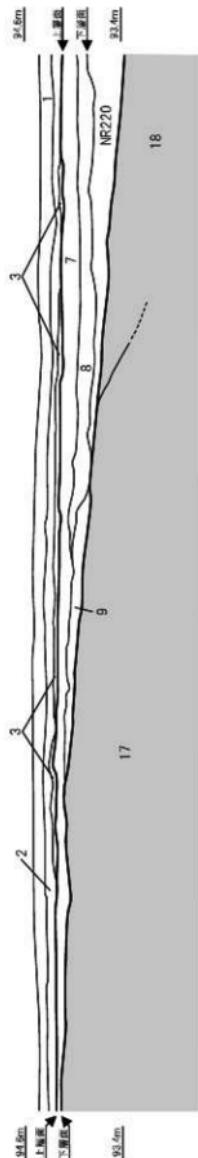
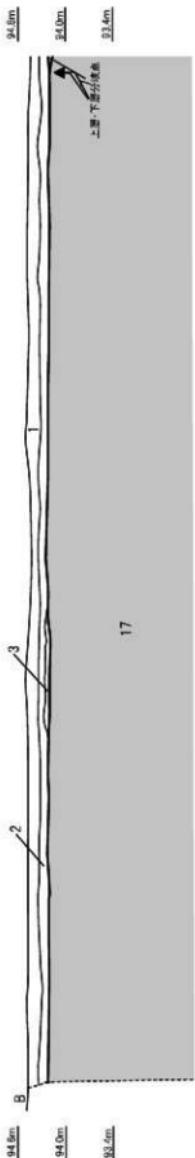


图 8 调查区南西壁 (B-B') 土层断面图 (1)

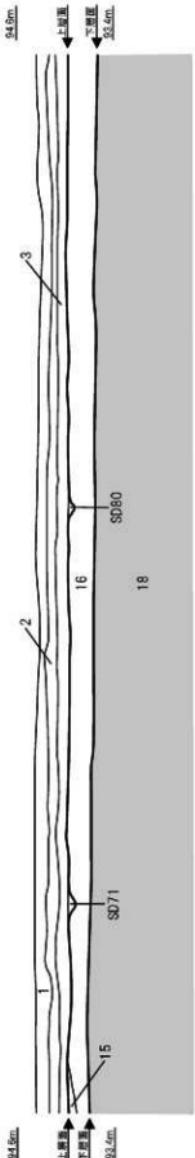
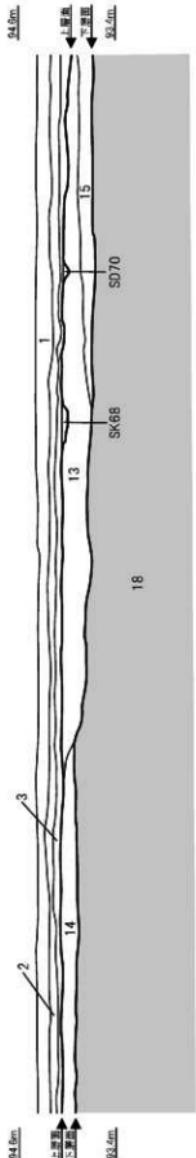
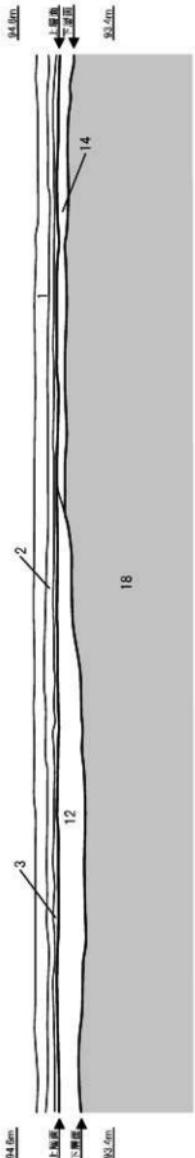
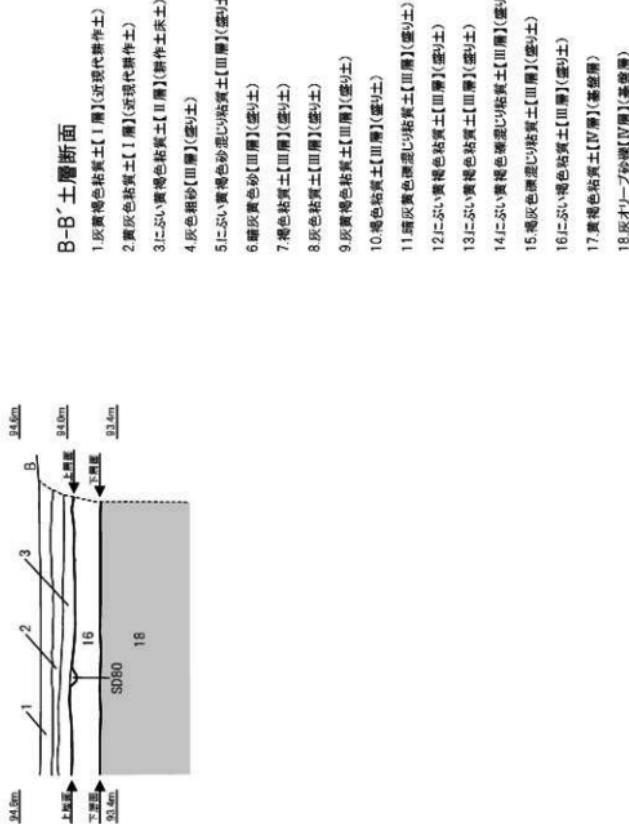


图 9 调查区南西壁 (B-B') 土层断面图 (2)



0 (1/60) 6m

図 10 調査区南西壁 (B-B') 土層断面図 (3)

中世の段階になって、周辺一帯は、大規模な整地が行われたようである。周辺一帯の地面をフラットにするため、標高が高いY=22935付近から東側は切り土が行われ、その切り土で発生した土砂を、Y=22935付近から西側の低地に盛り土を行うことで、フラットな地面を生み出したようである。生み出されたフラットな面で、耕作に伴う素掘り溝や井戸など平安時代末～中世の遺構が確認されている。

上記のような、遺跡形成過程を経ているため、今回の調査地では、主に2時期の遺構が検出されている。すなわち、弥生時代後期後葉から古墳時代前期にかけてと平安時代末～中世の2時期である。

以下、上層と下層にわけて各遺構・遺物の報告を行い、最終的に時期別に整理した遺構図を提示する。

第2節 上層の遺構・遺物

(1) 概要 (図11)

ここでは、近現代耕作土と底土であるI・II層直下で検出された遺構を上層遺構として報告する。すなわち、遺構を形成するベース土は、Y=22935より東側では基盤層であるIV層、西側では盛り土層であるIII層となり、このそれぞれのベース土に掘りこまれた遺構が対象になる。Y=22935から東側では弥生時代後期後葉から古墳時代前期と平安時代末～中世の2時期の遺構が確認されるが、西側では平安時代末～中世の遺構だけが確認される。この状況より、平安時代末～中世の段階で整地された可能性は高いと考えるが断定はできない。なお、調査区東側にひろがる基盤層IV層は、Y=22935付近からY=22960付近までが黄褐色粘質土で遺構が確認されるが、Y=22960付近から東側では灰オリーブ砂礫層に変化し遺構は全く確認されなくなる。この2層の関係だが、断ち割りを行い断面で確認したところ、灰オリーブ砂礫層が黄褐色粘質土層の下に潜りこんでいく状況が確認された。平安時代末～中世の整地に伴う切り土により、調査区東端部では黄褐色粘質土が削平を受けて、その下に堆積していた灰オリーブ砂礫層が露頭したものと思われる。

上層における主な検出遺構は、耕作に伴う素掘り溝と井戸、多数の土坑や小穴などである。なお、上層の遺構番号は、1から順番に2桁の番号を付した。

(2) 溝 (SD33・SD35・SD52～SD54・SD65・SD66・SD69～SD76・SD79～SD83)

SD33

調査区の東側で検出された溝である。攪乱に切られており、検出はわずかである。検出できている長さは約0.84m、幅約0.30m、深さ約0.08mを測り、断面U字状を呈す。埋土は、褐灰色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SD35 (図13)

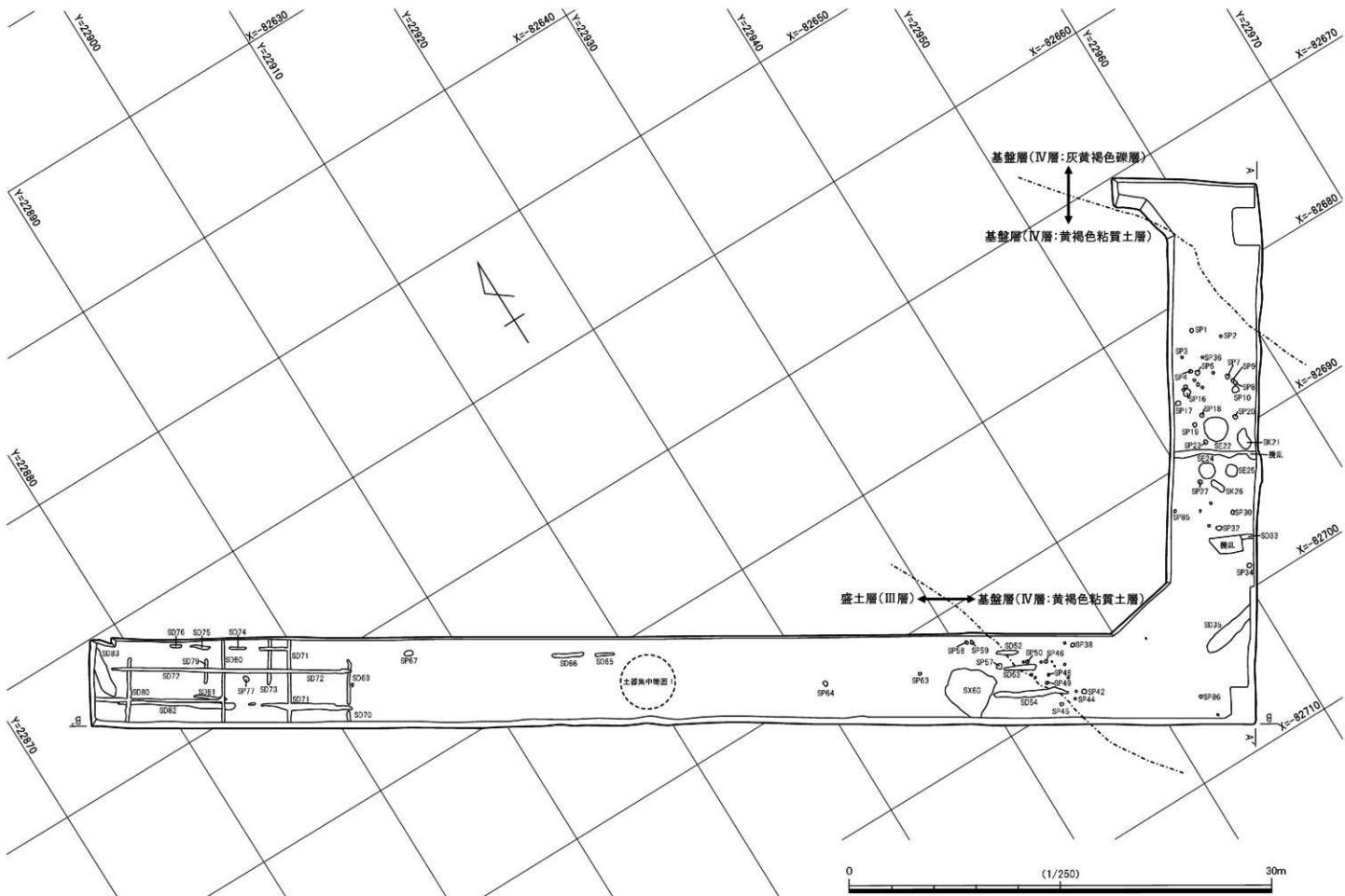


図 11 上層遺構全図

調査区の南東端で確認された溝である。調査区外に伸びているため全長は判然としないが、検出されている長さは約4.50m、幅約0.92m、深さ約0.10mで断面U字状を呈する。埋土は、黒褐色砂礫混じり粘質土の1層である。溝の方位は、ほぼ東西方向に乗っている。

遺物は、出土していない。

SD52～SD54

調査区の南東側で確認された3条の並行する直線溝である。幅0.3～0.4mを測り、断面U字状を呈し、埋土はいずれも褐灰色粘質土の1層である。溝の方位は、犬上群条里地割の方位に乗っている。耕作に伴う素掘り溝と思われる。

遺物は、出土していない。

SD65・SD66（図15）

調査区の中央やや北西よりで確認された直線溝である。幅約0.2mを測り、断面U字状を呈し、埋土はいずれも褐灰色粘質土の1層である。溝の方位は、犬上群条里地割の方位に乗っている。耕作に伴う素掘り溝と思われる。西側に隣接する格子状の素掘り溝と一連のものである。

遺物は、SD65から土師器の皿（14）が出土した。

14は、土師器の皿の口縁部である。表面の摩滅により調整は不明だが、端部は丸くおさまる。中世の土師器皿だが、小片のため時期を絞り込むのは困難である。

SD69～SD76・SD79～SD82（図12・15）

調査区の北西側で確認された格子状の直線溝である。幅は0.2～0.4mを測り、いずれも断面U字状を呈する。溝の方位は、犬上群条里地割の方位に乗っている。耕作に伴う素掘り溝と思われ、一連の耕作溝であるSD65より中世の土師器皿（14）が出土していることから、これら格子状の素掘り溝も同時期と考える。そのため、遺物は、SD71・SD72・SD80・SD82から古式土師器（15～20）が出土しているが、これらは、遺構が切り込んでいるベース土である盛り土層（Ⅲ層）からの混入と思われる。

15は古式土師器の受口状口縁甕である。第2口縁に明瞭な屈曲を持ち、端部を極端につまみ出す。第2口縁外面に1条のヘラ描沈線文が施される。16は古式土師器の高坏の脚部である。17は古式土師器の鉢と思われる。口縁が直線的にひらき、外面にハケ調整が施される。18は古式土師器の高坏である。19は古式土師器の壺または甕の底部である。わずかに上げ底状を呈し、内外面にハケ調整が施される。20は古式土師器の高坏である。

SD83（図12・15）

調査区の北西端で確認された溝である。調査区外に伸びているため全長は判然としないが、検出されている長さは約3.62m、幅約0.88m、深さ約0.17mで断面U字状を呈する。埋土は、黒褐色粘質土の1層である。

遺物は古式土師器（21～24）が出土しているが、これらは、遺構が切り込んでいるベース土である盛り土層（Ⅲ層）からの混入と思われる。

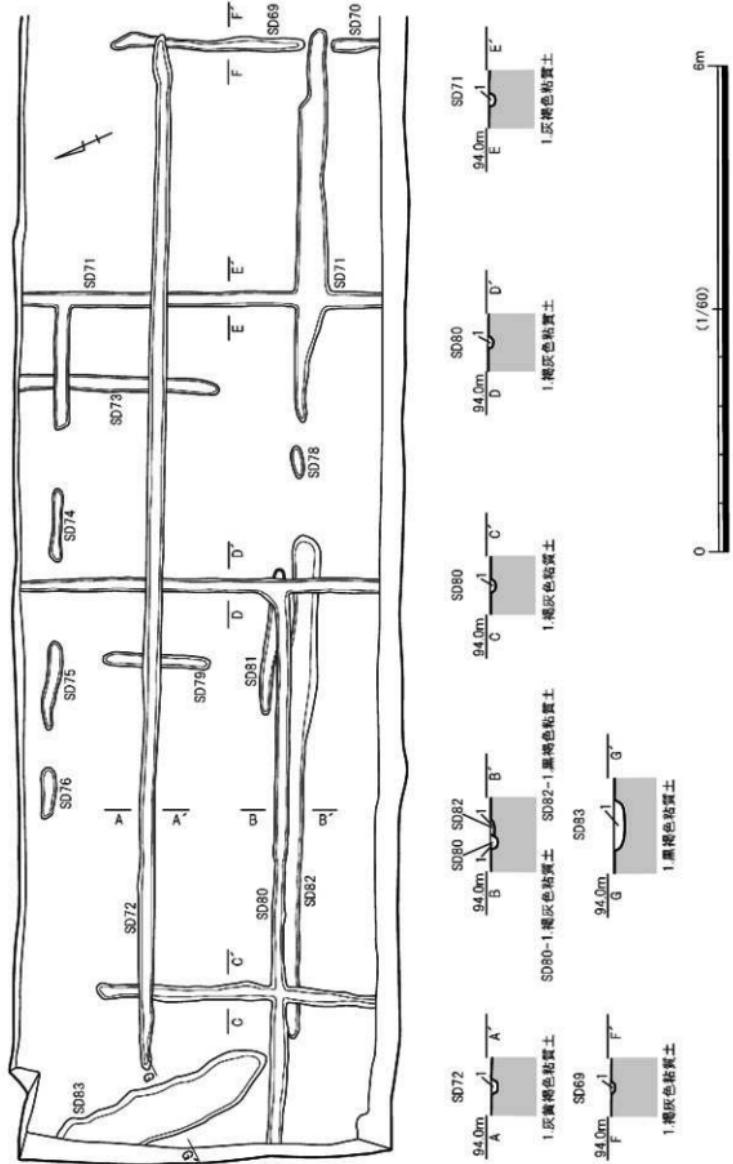


図12 溝 (SD69～SD71・SD73～SD76・SD78～SD83) 平面図・断面図

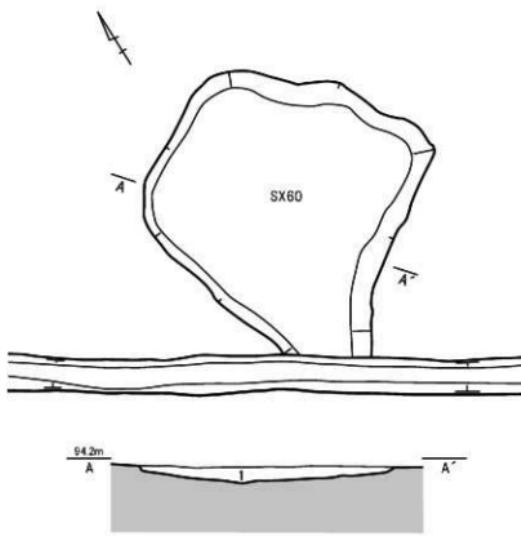
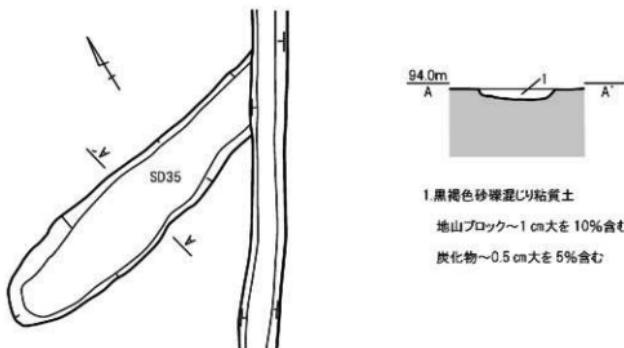


図13 各造構 (SD35・SX60) 平面図・断面図

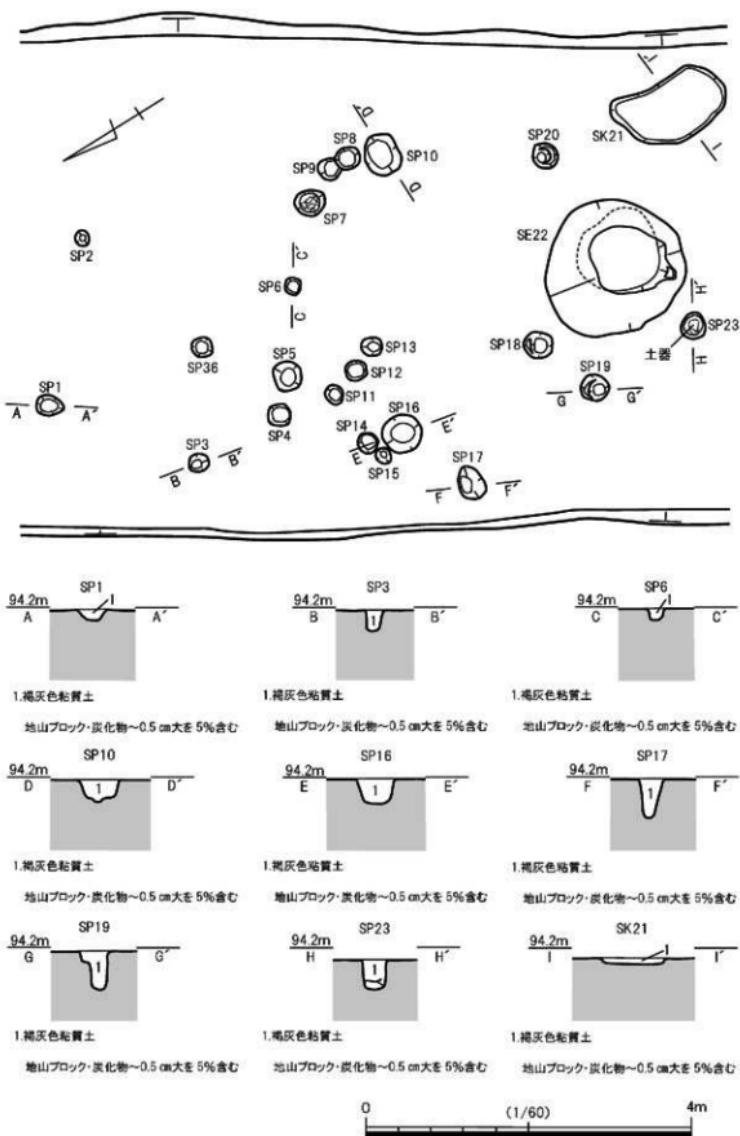


図 14 各構造平面図・断面図

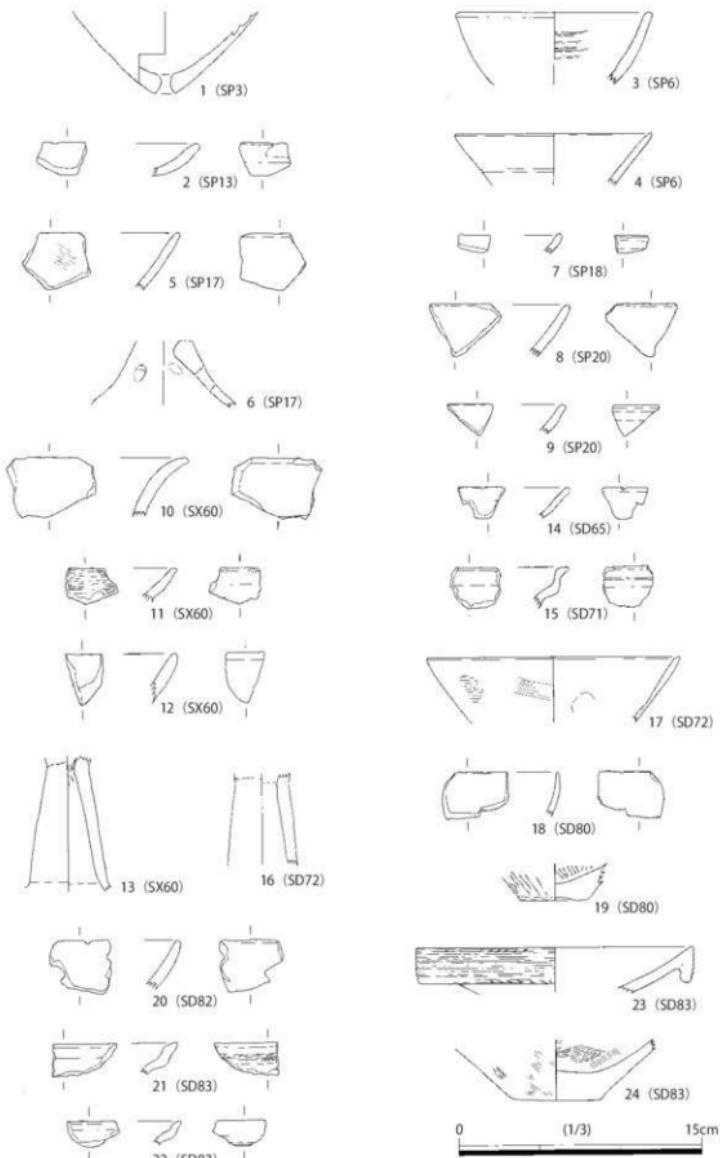


図 15 各遺構出土遺物実測図

21・22は古式土師器の受口状口縁壺である。21は、頸部から外反ぎみに第2口縁が立ち上がり、端部をつまみ出す。第2口縁外面に3条の直線文が施される。22は、頸部から外反ぎみに第2口縁が立ち上がり、端部はわずかにつまみ出される。23は古式土師器の器台である。端面を上下に大きく下方に垂下させ、6条の擬回線の後、上下端部に斜め方向にヘラ刺突を連続で施す。口径は17.0cmを測る。24は古式土師器の壺の底部である。平坦な底部で内外面ハケ調整が施され、底径は5.4cmを測る。

(3) 井戸 (SE22・SE24・SE25)

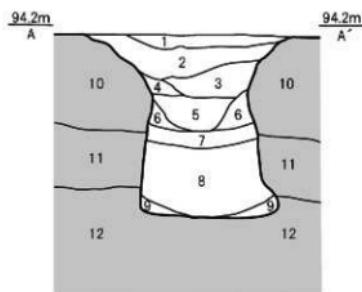
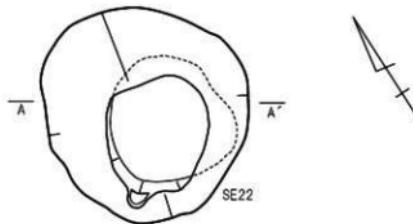
SE22 (図16～19)

調査区の東側で検出された井戸である。直径1.6～1.8mの平面円形の素掘りの井戸で、深さは約1.5mで湧水層である褐色礫層に達している。垂直の堅坑状で、底部は一部オーバーハングしている。埋土は9層確認したが、井戸枠の部材も井戸枠の痕跡も確認できなかった。最底部の9層は、井戸壁面の崩落土と思われる。8層は自然堆積層と考える。7層は、炭化物と灰がベースとなる堆積土であるため、井戸廃絶に伴い何らかが燃やされた可能性があると考え、井戸壁面を詳細に観察したが、壁面に焼きしめられた痕跡は認めることができなかつた。また、出土遺物にも2次的な被熱を受けたものは認められない。そのため、他所で燃えた炭化物・灰が人為的に2次堆積した可能性が高いと考えている。1～6層は、地山のブロックも多量に混じることより人為的な堆積と考える。すなわち、下層である8・9層は自然堆積、上層である1～7層は人為的な堆積と考える。

遺物は、人為的堆積である1～6層を上層として、自然堆積である8層を下層として、9層を底面直上として取り上げた。なお、炭化層の7層には遺物は含まれていなかつた。

上層である1～6層からは、土師器(25～42)、土師質土器(43)、瓦器(44)、山茶椀(45～55)、白磁(56・57)、土製品(58)、鉄滓(59)が出土した。

25～42は土師器の皿である。底部からやや内湾しながら短く立ち上がり端部を丸くおさめるもの(25・27～29・31～36・38～41)が基本だが、口縁部を外反させた後、端部を内側に丸めて玉縁状にしているもの(26・30・37)、口縁端部を内側に逆くの字に折り曲げるものの(42)も見られる。32の端部内面にわずかに煤が認められる。口径は、25は9.1cm、26は11.0cm、27は11.0cm、28は11.0cm、29は12.0cm、30は13.0cm、31は14.0cm、32は14.0cm、33は15.4cm、34は15.0cm、35は15.0cm、36は17.8cmを測る。43は土師質土器の羽釜である。口縁部・口縁端部が内湾ぎみにおさまり、外面に短い鋸がまわる。体部内面はハケ調整、口縁部内面から体部外面はナデ調整が施され、口縁部外面に煤が付着する。口径は23.0cm、鋸部分の径は27.8cmを測る。44は瓦器の椀である。体部はわずかに内湾しながら立ち上がり、口縁部外面の横ナデでわずかに外反する。やや、軟質で炭素の吸着が不十分なのか、器表面のいわゆる「いぶし銀色」が弱い。内面にミガキ調整が確認される。口径は14.6cmを測る。45～49は山茶椀の小椀(小皿)である。わずかに内湾する直線的な体部に、口縁部もまっすぐにおさまる。



- | | | |
|--------------------|---------------------|-------------------|
| 1.褐灰色漂泥じり粘質土 | 5.黄褐色粘質土 | 9.にぶい黄褐色粘質土 |
| 地山ブロック～3cm大を 20%含む | 6.層ブロック～3cm大を 15%含む | 崩落した地山がベース土 |
| 炭化物～0.5cm大を 20%含む | 炭化物～0.5cm大を 10%含む | 炭化物～0.5cm大を 10%含む |
| 2.灰黄褐色漂泥じり粘質土 | 6.灰色粘質土 | 10.黄褐色粘質土(基盤層) |
| 地山ブロック～3cm大を 20%含む | 地山ブロック～1cm大を 15%含む | 11.にぶい黄褐色漂泥層(基盤層) |
| 炭化物～0.5cm大を 30%含む | 炭化物～0.5cm大を 10%含む | 12.褐灰色漂層(基盤層) |
| 3.にぶい黄褐色漂泥じり粘質土 | 7.黒色粘質土(炭化層) | |
| 地山ブロック～3cm大を 40%含む | 地山ブロック～2cm大を 10%含む | |
| 炭化物～0.5cm大を 15%含む | 8.オリーブ黑色粘土 | |
| 4.黄灰色粘質土 | 地山ブロック～2cm大を 10%含む | |
| 地山ブロック～3cm大を 40%含む | 炭化物～0.5cm大を 20%含む | |
| 炭化物～0.5cm大を 15%含む | | |

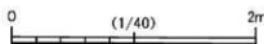


図 16 井戸 (SE22) 平面図・断面図

【上层】

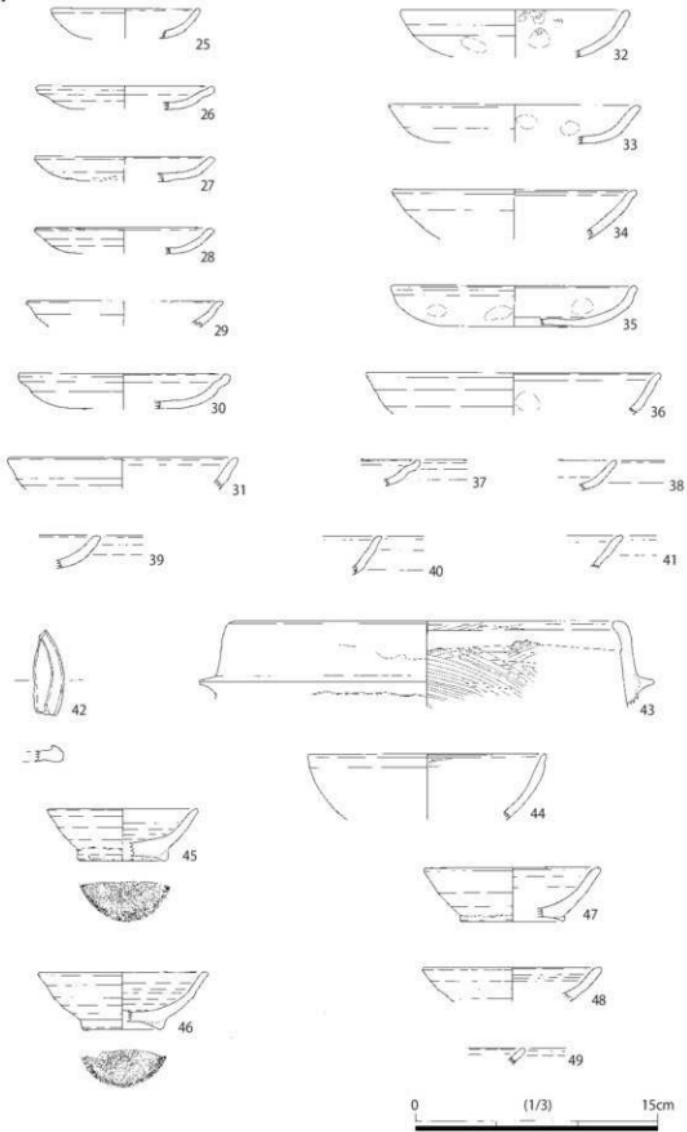
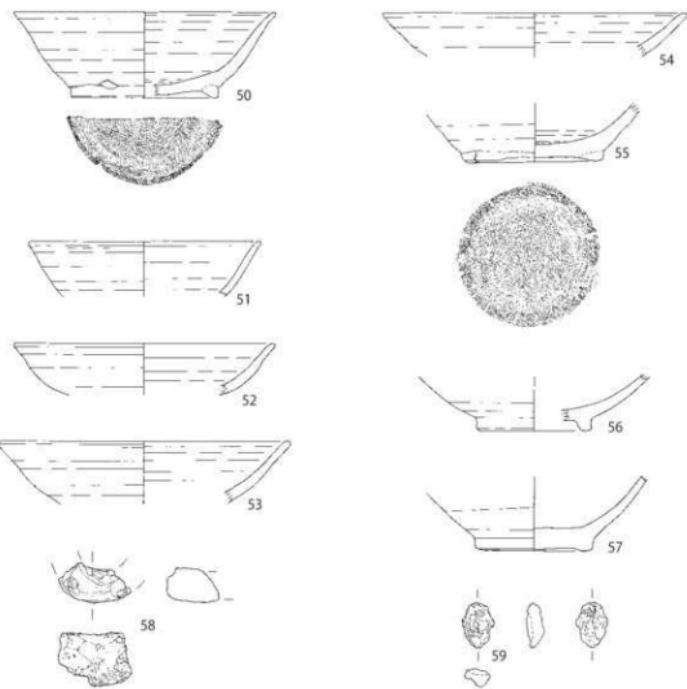
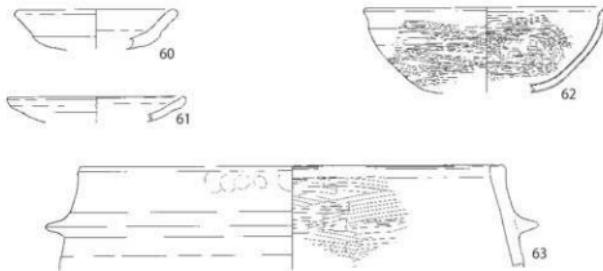


图17 SE22 出土遗物实测图 (1)

【上層】



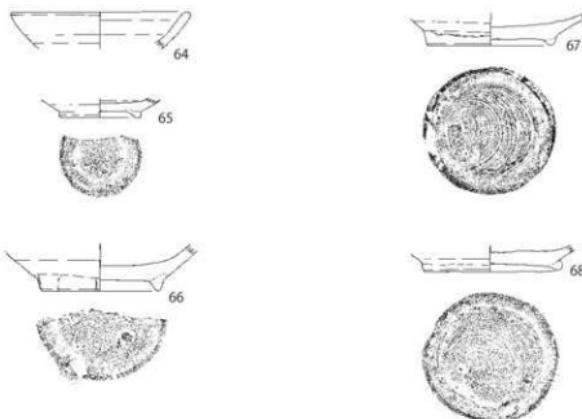
【下層：8層】



0 (1/3) 15cm

図18 SE22 出土遺物実測図 (2)

【下層：8層】



【下層：9層】



図19 SE22 出土遺物実測図 (3)

貼り付け高台で小型である。45・46は底部の糸切り痕が認められ、45の高台端部には粗穀痕が認められる。45は口径9.2cm、底径5.6cm、器高3.2cm、46は口径10.4cm、底径5.1cm、器高3.5cm、47は口径10.8cm、底径6.4cm、器高3.3cm、48は口径11.0cmをそれぞれ測る。50～55は山茶碗の椀である。わずかに内湾する直線的な体部に、口縁部もまっすぐにおさまる。50・55は低い貼り付け高台で、底部には糸切り痕が認められる。50は口径16.0cm、底径9.0cm、器高5.3cm、51は口径14.2cm、52は口径15.9cm、53は口径17.9cm、54は口径18.6cm、55は底径8.6cmをそれぞれ測る。56・57は白磁の椀である。底部の破片で、どちらも内外面に釉が施されており、底径は56・57ともに7.1cmを測る。58は轆の羽口である。縦3.1cm、横4.4cm、厚さ2.1cmを測る。小片のため径の復元は困難である。59は鉄滓と思われるが表面は被熱を受けて発砲しており、あるいは轆の羽口の可能性もある。長辺2.7cm、短辺1.9cm、厚さは

1.1cmを測る。

下層は、8層から土師器（60・61）、瓦器（62）、土師質土器（63）、山茶碗（64～68）、最下層9層からは、山茶碗（69）が出土した。

60・61は土師器の皿である。いずれも、底部からやや内湾しながら短く立ち上がり端部を丸くおさめるものだが、60は口縁部外面に強い横ナデが施される。口径は、60は9.7cm、61は11.0cmをそれぞれ測る。62は瓦器の楕である。体部はわずかに内湾しながら立ち上がり、口縁部外面の横ナデでわずかに外反する。端部内面には沈線が1条めぐっている。やや、軟質で炭素の吸着が不十分なのか、器表面のいわゆる「いぶし銀色」が弱い印象を受ける。内外面とも緻密な横方向のミガキ調整が施されている。口径は、15.0cmを測る。63は土師器の羽釜である。口縁部・口縁端部が内湾ぎみにおさまり、外面に短い鈎がまわる。体部内面はハケ調整、口縁部内面から体部外面はナデ調整が施され、鈎より下方の体部外面に煤が付着する。口径は24.2cm、鈎部分の径は30.0cmを測る。64・65は山茶碗の小楕（小皿）である。64は口縁部で、まっすぐ伸びて端部は丸くおさまり、口径は11.0cmを測る。65は底部で、低い貼り付け高台が施され、底部には糸切り痕が認められる。底径は4.8cmを測る。66～68は山茶楕の楕の底部である。いずれも低い貼り付け高台を有し、底部は糸切り痕が認められる。68の内面には重ね焼きの痕跡が確認できる。底径は、66は7.4cm、67は7.7cm、68は8.3cmを測る。69は山茶楕の楕である。わずかに内湾する直線的な体部に、口縁部もまっすぐにおさまる。低い貼り付け高台で、底部には糸切り痕が認められる。内外面に墨の付着が認められる。口径16.0cm、底径7.6cm、器高5.3cmを測る。

遺構の年代であるが、掘り方がないため構築時期は不明である。検出した埋土はいずれも井戸廃絶後のものであるが、上層と下層で出土遺物の時期差はみとめられない。土師器皿、山茶碗など総体的にみて12世紀後半～13世紀初頭でおさまる遺物群である。したがって、SE22の廃絶時期の上限は12世紀後半～13世紀初頭と考える

SE24・SE25

SE22南西に隣接する素掘りの井戸である。出土遺物より近代以降の井戸である。

(4) 土坑（SK21・SK26）

SK21（図14）

調査区の東側、SE22の南東に隣接する位置で検出された土坑である。平面楕円形で長辺約1.42m、短辺約0.77m、深さ約0.10mを測る。埋土は褐灰色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SK26

調査区の東側、SE24の南に隣接する位置で検出された土坑である。平面楕円形で長辺約1.13m、短辺約0.39m、深さ約0.12mを測る。埋土は褐灰色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

(5) 小穴 (SP1～SP10・SP13・SP16～SP20・SP23・SP27～SP32・SP37・SP38・SP42・SP44～SP46・SP48～SP50・SP57～SP59・SP63・SP64・SP67・SP77・SP85・SP86)
SP1 (図14)

調査区の東側で検出された平面形が楕円形の小穴である。長辺約0.34m、短辺約0.25m、深さ約0.11mを測る。埋土は褐色粘質土の1層である。

遺物は、土師器が出土しているが小片のため図化していない。

SP2 (図14)

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.19m、短辺約0.16m、深さ約0.12mを測る。埋土は褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP3 (図14・15)

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.25m、短辺約0.22m、深さ約0.25mを測る。埋土は褐色粘質土の1層である。

遺物は、古式土師器(1)が出土した。

1は古式土師器の有孔鉢である。円錐形の体部で底部に焼成前の穿孔を持つ。底径は1.2cm、孔径0.6cmを測る。

SP4 (図14)

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.30m、短辺約0.29m、深さ約0.20mを測る。埋土は褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP5 (図14)

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.37m、短辺約0.33m、深さ約0.32mを測る。埋土は褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP6 (図14・15)

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.23m、短辺約0.19m、深さ約0.15mを測る。埋土は褐色粘質土の1層である。

遺物は、古式土師器(3・4)が出土した。

3・4は古式土師器の鉢と思われる。いずれも口縁部が直線的にひらく。3の内面にはハケ調整が施されている。口径は、3が11.6cm、4が11.8cmをそれぞれ測る。

SP7 (図14)

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.37m、短辺約0.33m、深さ約0.31mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP8（図14）

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.31m、短辺約0.28m、深さ約0.10mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP9（図14）

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.31m、短辺約0.26m、深さ約0.15mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP10（図14）

調査区の東側で検出された平面形が梢円形の小穴である。長辺約0.52m、短辺約0.43m、深さ約0.27mを測る。埋土は褐灰色粘質土の1層である。

遺物は、土師器が出土しているが小片のため図化していない。

SP13（図14・15）

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.26m、短辺約0.22m、深さ約0.15mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、土師器（2）が出土した。

2は土師器の皿である。底部からやや内湾しながら短く立ち上がり端部を丸くおさめる。

SP16（図14）

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.49m、短辺約0.45m、深さ約0.30mを測る。埋土は褐灰色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP17（図14・15）

調査区の東側で検出された平面形が梢円形の小穴である。長辺約0.43m、短辺約0.31m、深さ約0.61mを測る。埋土は褐灰色粘質土の1層である。

遺物は、古式土師器（5・6）が出土した。

5は古式土師器の高杯で、摩滅しているが内面にミガキが認められる。6は古式土師器の器台の基部から脚部にかけてである。

SP18（図14・15）

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.35m、短辺約0.31m、深さ約0.33mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、土師器（7）が出土した。

7は土師器の杯の口縁部である。

SP19（図14・15）

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.36m、短辺約0.33m、深さ約0.47mを測る。埋土は褐灰色粘質土の1層である。

遺物は、古式土師器（8）が出土した。

8は古式土師器の高壺または鉢と思われる。

SP20（図14・15）

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.30m、短辺約0.30m、深さ約0.34mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、土師器（9）が出土した。

9は土師器の皿である。底部からやや内湾しながら短く立ち上がり端部を丸くおさめる。

SP23（図14）

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.32m、短辺約0.29m、深さ約0.25mを測る。埋土は褐灰色粘質土の1層である。

遺物は、古式土師器の壺または甕の体部片が出土しているが、固化していない。

SP27

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.33m、短辺約0.33m、深さ約0.13mを測る。埋土は褐灰色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP28

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.19m、短辺約0.19m、深さ約0.08mを測る。埋土は褐灰色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP29

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.18m、短辺約0.16m、深さ約0.11mを測る。埋土は褐灰色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP30

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.25m、短辺約0.23m、深さ約0.22mを測る。埋土は褐灰色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP31

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.23m、短辺約0.21m、深さ約0.05mを測る。埋土は褐灰色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP32

調査区の東側で検出された平面形が梢円形の小穴である。長辺約0.43m、短辺約0.31m、深さ約0.08mを測る。埋土は褐灰色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP37

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.19m、短辺約0.16m、深さ約0.10mを測る。埋土は褐灰色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP38

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.34m、短辺約0.29m、深さ約0.08mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP42

調査区の東側で検出された平面形が楕円形の小穴である。長辺約0.39m、短辺約0.27m、深さ約0.13mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP44

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.15m、短辺約0.14m、深さ約0.07mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP45

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.33m、短辺約0.30m、深さ約0.09mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、土師器が出土しているが小片のため図化していない。

SP46

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.32m、短辺約0.26m、深さ約0.09mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、土師器が出土しているが小片のため図化していない。

SP48

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.23m、短辺約0.21m、深さ約0.06mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、土師器が出土しているが小片のため図化していない。

SP49

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.24m、短辺約0.24m、深さ約0.10mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP50

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.27m、短辺約0.24m、深さ約0.13mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP57

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.39m、短辺約0.38m、深さ約0.16mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、土師器が出土しているが小片のため図化していない。

SP58

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.31m、短辺約0.24m、深さ約0.18mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP59

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.36m、短辺約0.24m、深さ約0.16mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP63

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.24m、短辺約0.23m、深さ約0.19mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、土師器が出土しているが小片のため図化していない。

SP64

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.36m、短辺約0.33m、深さ約0.05mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP67

調査区の東側で検出された平面形が梢円形の小穴である。長辺約0.65m、短辺約0.36m、深さ約0.09mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP77

調査区の東側で検出された平面形が梢円形の小穴である。長辺約0.40m、短辺約0.28m、深さ約0.16mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP85

調査区の東側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.24m、短辺約0.22m、深さ約0.41mを測る。埋土は褐灰色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP86

調査区の東側で検出された平面形が梢円形の小穴である。長辺約0.20m、短辺約0.18m、

深さ約0.16mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

(6) その他 (SX60)

SX60 (図13・15)

調査区中央東よりで検出された平面不整形の落ち込み状の遺構である。長辺約3.10m、短辺約3.00m、深さ約0.21mを測る。

遺物は、古式土師器（10～13）が出土したが、盛り土層（Ⅲ層）を掘りこんだ遺構であり、同層を掘りこんだ遺構は、基本的に平安時代末～中世の遺構と考えられるため、古式土師器は混入と思われる。

10は古式土師器の壺で、大きく外反してひらく口縁部である。11・12は古式土師器のくの字状口縁甕である。11は口縁端部に面をもち、外面にナデ、内面にハケ目が施される。12は口縁端部がまるくおさまり、外面に横ナデが施される。13は古式土師器の高坏の脚部である。

参考文献

- 伊藤裕偉 2005「土製煮炊具（“かたち”と“わざ”～中世の土製煮沸具から～）」『全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」発表要旨集』全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会
- 伊野近富 1995「土師器皿」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 北川 浩 1985「蘆生堂廬跡8・9出土の瓦器について—近江地方における瓦器生産に関連して—」『滋賀考古学論叢』第2集 滋賀考古学論叢刊行会
- 大宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』
- 中居和志 2010「古墳出現前後の近江地域—土器編年を中心に—」『立命館大学考古学論集V』立命館大学考古学論集刊行会
- 森 隆 1986「滋賀県における古代末・中世土器」『中近世土器の基礎研究II 日本中世土器研究会』岡本直久 2005「山茶碗編年の現状について」『全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」発表要旨集』全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会

第3節 下層の遺構・遺物

(1) 概要 (図20)

Y=22935付近より西側に向かって基盤層であるIV層が落ち込み、その上部に盛り土層であるⅢ層が確認される。上層はこのⅢ層上面から掘りこまれた遺構であるが、このⅢ層直下のIV層上面で検出された遺構を下層として報告する。そのため、下層遺構のひろがりは、Y=22935付近から西側のみとなる。また、下層遺構検出に際して、盛り土層（Ⅲ層）の掘削を行つ

たが、この盛り土層（Ⅲ層）には古式土師器を中心に多くの遺物が包含されていたため、本節ではこの盛り土層内の包含遺物に関して報告を行う。

主な検出遺構は、複数の溝・土坑・小穴などである。また、人為的な遺構ではないが、遺物が出土した自然流路、落ち込み状遺構も確認した。遺構のひろがりだが、Y=22935付近より西側に向かって基盤層が落ち込むが、西方6～7mほどの所で自然流路（NR220）が確認された。この自然流路から西側では人為的な遺構は確認されないため、下層の人為的な遺構は、落ち込みと自然流路の間のわずかな範囲であった。

なお、下層の遺構番号は、201から順番に3桁の番号を付した。

（2）盛り土層（Ⅲ層）包含遺物【土器集中範囲1以外】（図21）

前述したようにY=22935付近より西側に向かって整地の際の盛り土層（Ⅲ層）がひろがっている。この盛り土層内には、古式土師器を中心に多くの遺物が含まれていた。密度の差はあるが、遺物は調査区の盛り土層全域で確認された。これは、整地の際、遺跡がひろがる範囲が切り土され、その土が盛り土として利用された結果であろう。

ここでは、特に土器が集中的に出土した土器集中範囲1以外の遺物に関して報告する。

盛り土層内からは、縄文土器（70）、古式土師器（71～81）、また小片のため図化することはできなかつたが須恵器片が出土した。縄文土器と須恵器は、ごく少数でその大半は古式土師器で占められていた。

70は縄文土器の深鉢である。口縁端部内面に、刺突文と沈線がめぐり、その間に縄文が施される。71は古式土師器の壺の口縁部と思われる。2条の刻み目の入った棒状浮文が施される。72は古式土師器の有段口縁壺である。外反してまっすぐのびる第2口縁をもち、内外面に横方向のハケ目が施される。口径は20.0cmを測る。73は古式土師器の直口壺または長頸壺の口縁部と思われる。緩やかに外反してのびる口縁で端部に面をもつ。外面にハケ調整が施され、口径は11.2cmを測る。74は古式土師器の受口状口縁壺である。緩やかな屈曲で端部は丸くおさめ、装飾はない。75は古式土師器のS字状口縁壺である。外面に粗いハケ目がタテ→ヨコの順に施されており、口径は12.0cmを測る。76は古式土師器のくの字状口縁壺である。端部に緩く面を持ち、内外面ハケ調整が施される。口径は17.4cmを測る。77は古式土師器の有稜高壺で、内面にミガキ調整が施されている。78は古式土師器の高壺の脚部で、外面にタテ方向のミガキ調整が施されている。79は古式土師器の台付壺または台付鉢の脚部である。胎土が粗く、内外面にハケ調整が施される。80は古式土師器の単純口縁鉢である。頸部の屈曲は緩く、口縁端部を丸くおさめる。器壁は厚めで、内外面指頭圧痕が明瞭に残る。口径は8.4cm、体部的最大径は9.5cmを測る。81は古式土師器の壺と推定するが詳細な器形は不明である。外面をヘラ描直線文や列点文や羽状文で加飾する。

（3）盛り土層（Ⅲ層）包含遺物【土器集中範囲1】（図11・22・23・24）

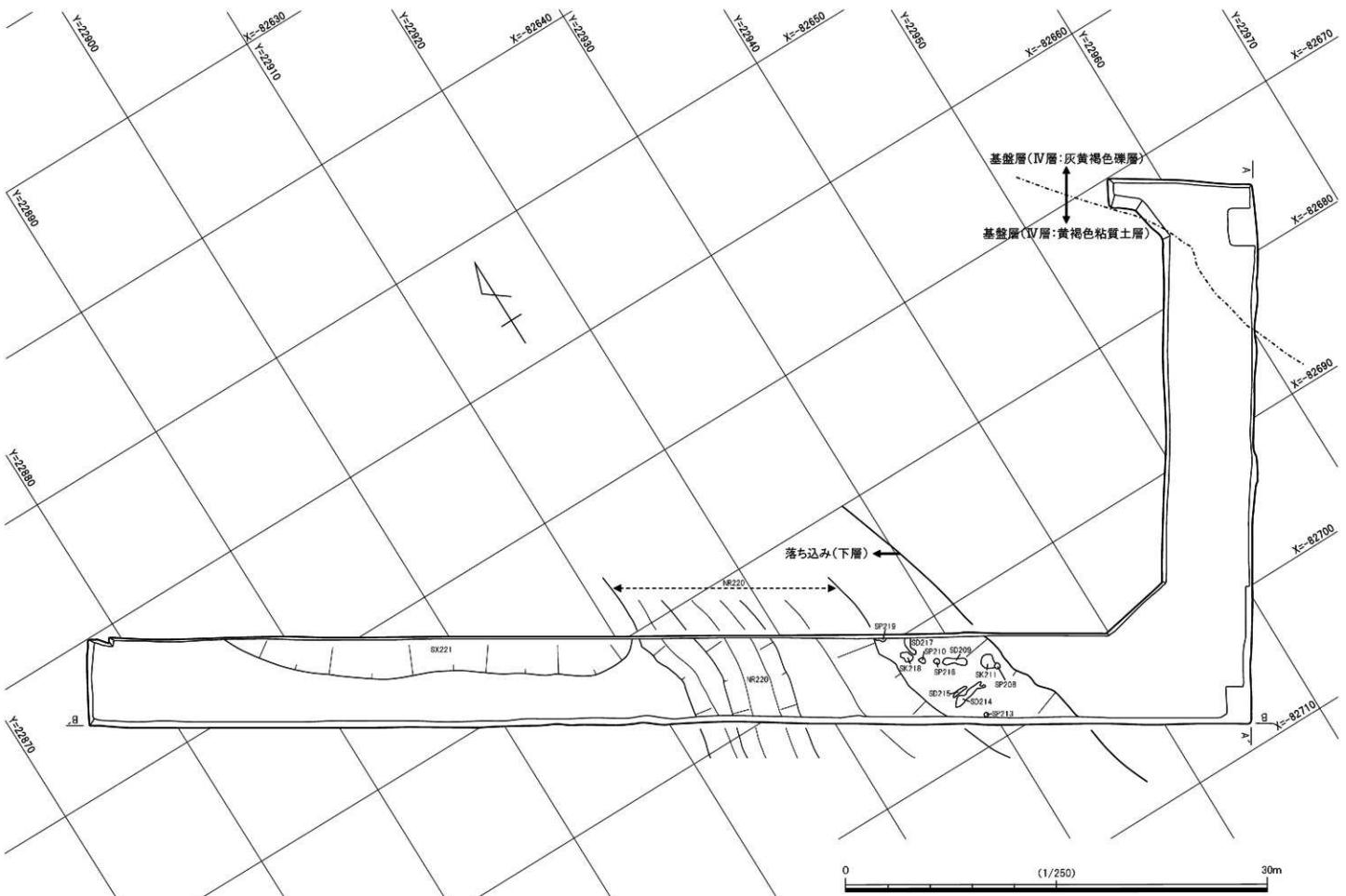


図 20 下層造構全図

盛り土層（Ⅲ層）内で、特に土器が集中して出土した範囲を土器集中範囲1として、ここで報告する。土器集中範囲1で出土した土器は、全て古式土師器（82～128）であった。出土状況については、他の盛り土層内に比べて遺物の密度は高いことは確かであるが、その性格は前述したように、整地の際に他所で切り土された土砂が盛り土として利用され、その土砂に包含されていた2次堆積遺物である。

遺物は、古式土師器（82～128）が出土した。

82～86は古式土師器の広口壺である。82は、外反する口縁に、端部が肥厚しない面をもち、頸部に貼り付け突帯をもつ。内外面ハケ調整が施され、口径は16.0cmを測る。83は外反する口縁に端部を丸くおさめ、頸部に刻み目を付した貼り付け突帯をもつ。内外面ハケ調整が施される。84は、口縁端部に垂下する面をもつ壺で、端面に2条1単位のクシ描き波状文をもち、口径18.4cmを測る。85・86は、外反する口縁に端部がわずかに肥厚する面をもち、端面に3条の刻み目を付した棒状浮文を貼り付ける。86は2本1単位の棒状浮文を貼り付ける。87は古式土師器の有段口縁壺である。頸部から緩やかに立ち上がる口縁部で、端部は丸くおさまり、口縁部外面には擬回線が施される。88は古式土師器の二重口縁壺で、屈曲部に円形の竹管文が施される。89～98は古式土師器の受口状口縁壺で、第2口縁に明瞭な屈曲を持ち、端部をつまみ出す。89は第2口縁外面に1条のヘラ描沈線文が施され、口径は18.0cmを測る。90は第2口縁外面に2条のヘラ描沈線文が施され、口径は18.0cmを測る。91は第2口縁外面に2条のヘラ描沈線文をもつ。頸部より下半の外面に粗いハケ目が施され、口径は20.0cmを測る。92は第2口縁端部を極端につまみ出し、外面に2条のヘラ描沈線文を施す。頸部より下半の外面には粗いハケ調整を行い、口径は18.0cmを測る。93は第2口縁外面に円弧状に2条のクシ描沈線文を施した後に2条の刻み目を付した棒状浮文を貼り付ける。頸部より下半の外面に粗いハケ調整が施され、口径は16.0cmを測る。94は第2口縁外面に1条のクシ描沈線文を施した後に1条の刻み目を付した棒状浮文を貼り付ける。また、第2口縁外面の下端に3条1単位の刻み目を施し、頸部より下半の外面に粗いハケ調整を行い、口径は17.2cmを測る。95は第2口縁端部を極端につまみ出し、外面に1条のクシ描沈線文を施した後に棒状浮文を貼り付ける。口径は19.0cmを測る。96・97はやや小型の受口状口縁壺で同一個体である。第2口縁に明瞭な屈曲を持ち、端部を極端につまみ出す。第2口縁外面に2本1単位の棒状浮文が貼り付く。棒状浮文には3条の刻み目が入る。体部外面には頸部より下半に向かって、斜格子文と直線文が交互に施され、体部下半で刻み目の入った貼り付け突帯がめぐる。口径は11.0cm、体部の最大径は13.7cmを測る。98は緩やかな屈曲をもち、口縁端部は丸くおさまり装飾はない。99～103は古式土師器のくの字状口縁壺である。99は端部に面をもち、体部外面にハケ調整が施される。口径は16.0cmを測る。100・101は端部に面をもち、口縁部外面と体部外面にハケ目が施される。口径は、100は21.0cm、101は17.6cmをそれぞれ測る。102は端部を丸くおさめ、口縁部外面と体部外面にハケ調整が施される。口径は16.0cmを測る。103は口縁端部に肥厚した内傾するにぶい面をもつ布留式壺と思われる。口径は16.8cmを測る。

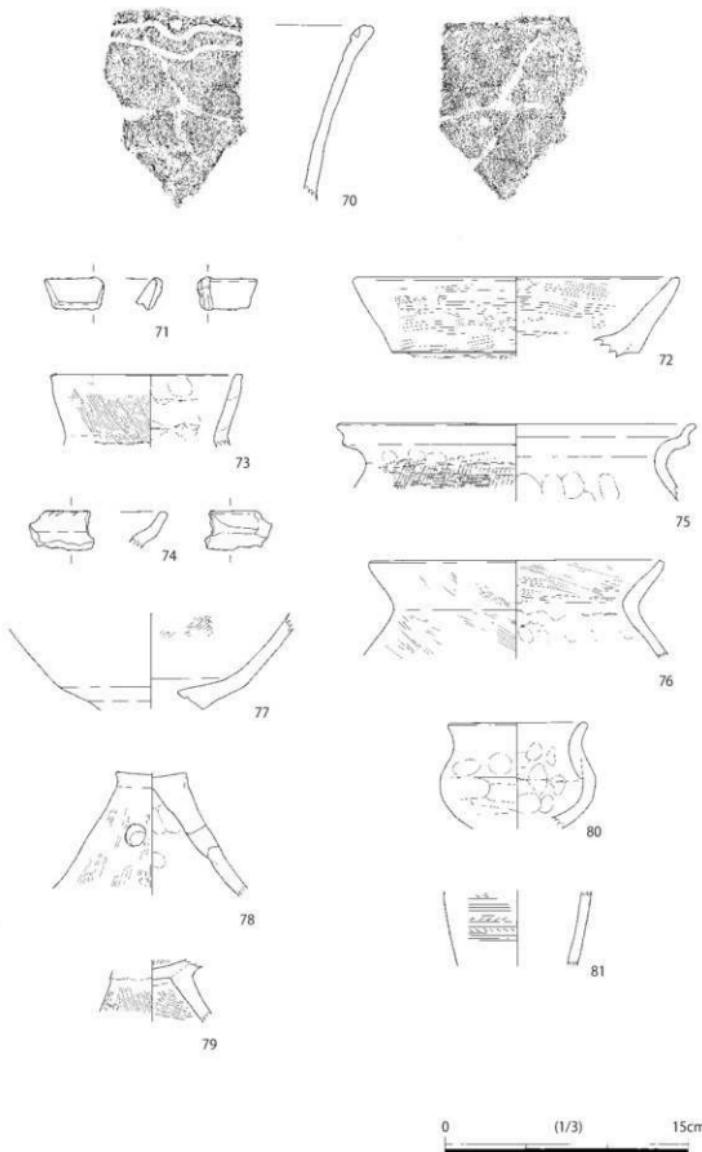


図21 盛り土層(Ⅲ層) 包含遺物実測図

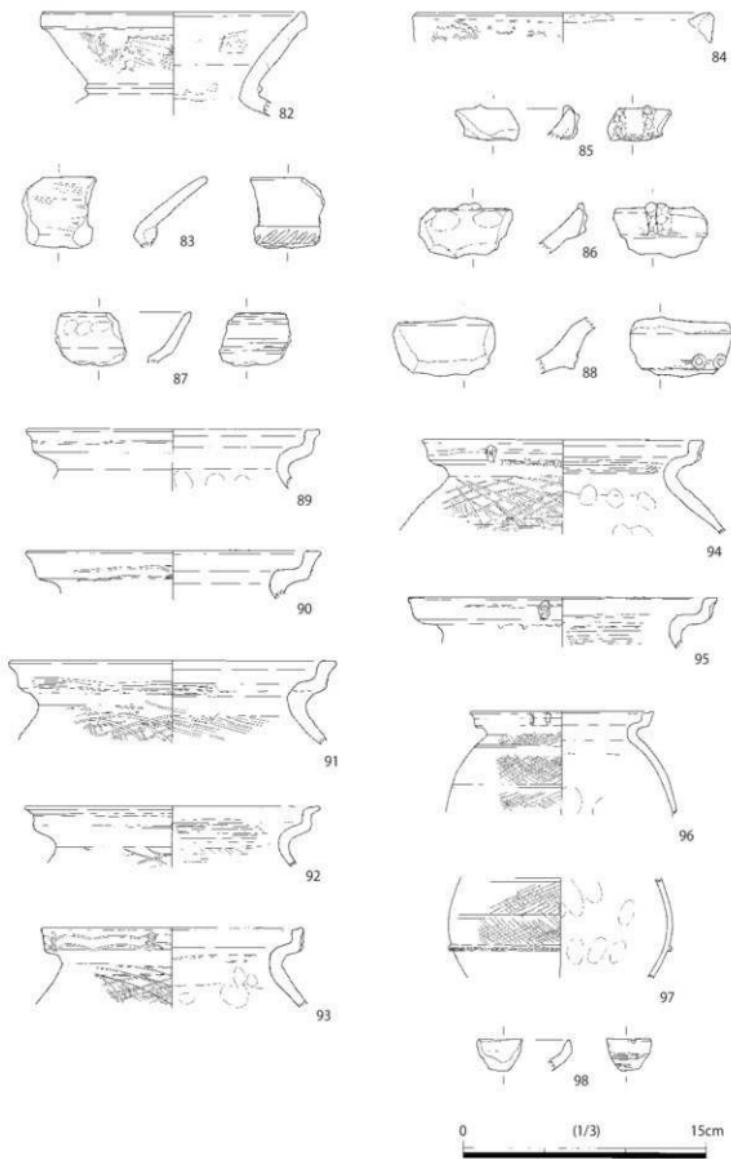


図 22 土器集中範囲 1 出土遺物実測図 (1)

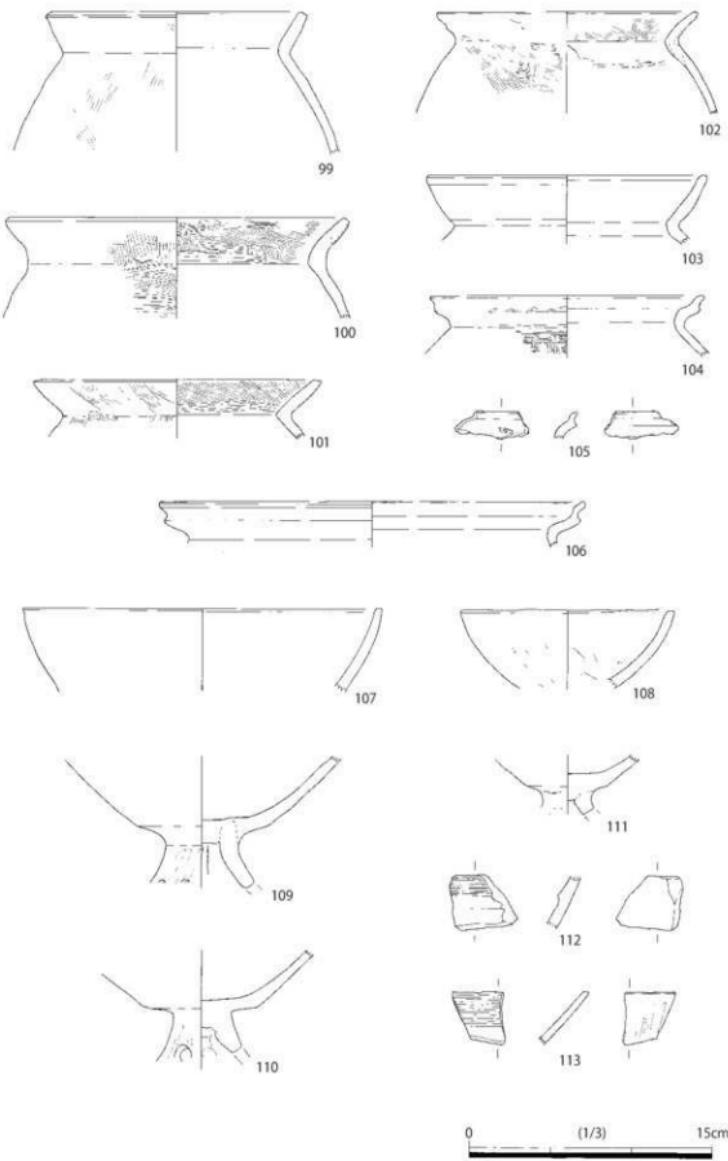


図23 土器集中範囲1出土遺物実測図(2)

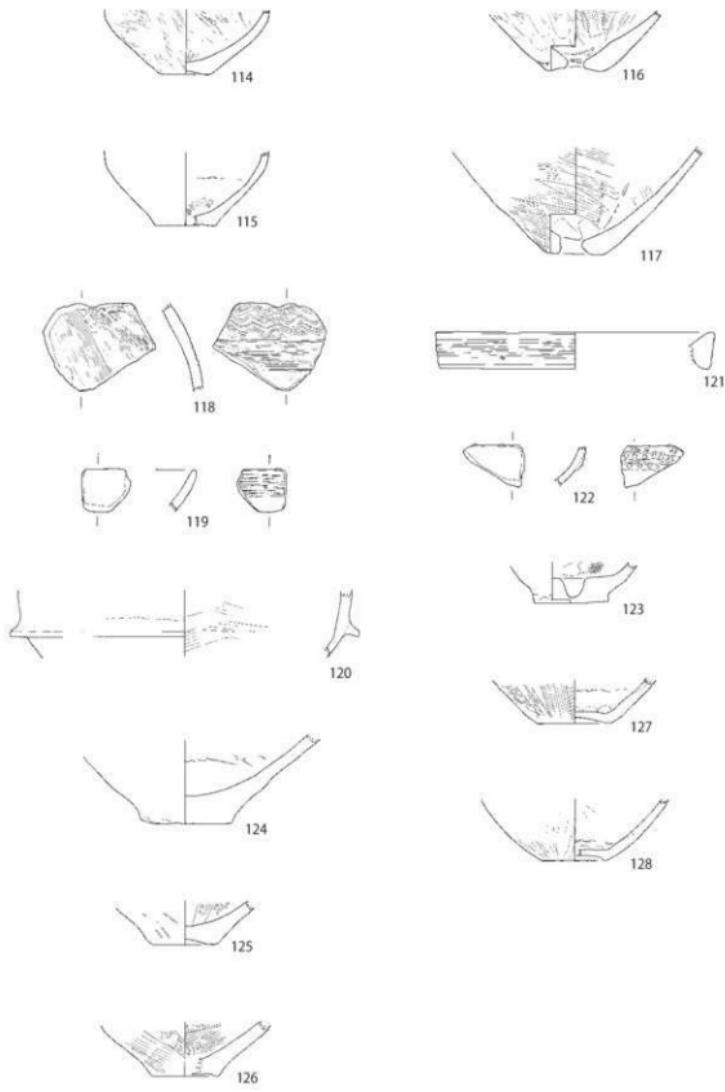


図24 土器集中範囲1出土遺物実測図(3)



104～106は古式土師器のS字状口縁甕である。104は口縁部外面の下端に刻み目が入る。口径は、104は16.8cm、106は26.0cmをそれぞれ測る。107～113は古式土師器の高坏である。107は緩やかに内湾しながら立ち上がり端部に面をもち、口径は22.0cmを測る。108は楕形高坏で端部に面をもつ。外面ケズリ、内面ヘラナデを施し、口径13.0cmを測る。109～111は有稜高坏である。109と110は内外面に煤が付着する。109には透かしが4箇所認められる。112は端部内面に粘土を貼り付けて肥厚させ、クシ状工具で多条沈線を施す。113は端部内面に13条単位のクシ状工具で多条沈線を施す。114・115は古式土師器の鉢である。内湾しながら立ち上がる体部をもつ。114は内外面ハケ目が施され、底径3.0cmを測る。115は内面にハケ目が認められ、口径は3.9cmを測る。116・117は古式土師器の有孔鉢である。円錐形の体部で底部に焼成前の穿孔を持つ。116は底径3.5cm、孔径1.0cm、117は底径3.6cm、孔径1.3cmをそれぞれ測る。118は古式土師器の甕の肩部である。ハケ調整後、波状文と直線文が施されている。119は古式土師器の細頸甕と思われる。外面に8条の直線文が施される。120は器種不明である。土師質で張り付け突帯をもつ。121は古式土師器の器台である。直線的にひらく受部の口縁端部に垂下する面をもち、端面に5条の擬回線がめぐる。口径は17.0を測る。122は古式土師器の手あぶり形土器と思われる。外面に刻み目・沈線をもつ貼り付け突帯がみとめられる。123は古式土師器の器種不明の底部である。底部内面に、指頭による産みがみとめられたため有孔鉢の可能性も考えたが、穿孔が外面まで貫通していない。底径は4.6cmを測る。124～128は古式土師器の甕または甕の底部である。124は甕の底部で、器壁の厚い平底を呈しており、底径5.7cmを測る。125・126は甕の底部と思われる。わずかに上げ底で内外面ハケ目が施される。底径は、125は4.0cm、126は4.2cmを測る。127・128は甕の底部である。底部の器壁が薄く、断面形状が半球状の上げ底を呈し、内面はナデ、外面は接地面ギリギリまでハケ目が施される。底径は、127は4.5cm、128は4.0cmを測る。

(4) 自然流路

NR220 (図25・27・28)

Y=22935付近から西側に基盤層（IV層）が落ち込むが、その基盤層が落ち切った位置に地形に沿うように南北方向の自然流路が検出された。流路に何らかの人為的な痕跡は認められなかった。堆積層は12層であったが、粒度の差はあるがほとんどが砂や小礫で構成されており、ある程度水の流れのあった流路と考える。また遺物の出土状況だが、1層のみからの出土で、他層や流路底部は無遺物層であった。また、出土遺物もある程度の流れがあった流路と考えられるにも関わらず、破断面にはローリングによる摩滅を認めることができない。これらの状況より、自然流路機能時に廃棄された遺物というより、整地の際の盛り土の包含遺物の可能性が高いと考える。整地の段階では、自然流路は概ね埋没しており、流路として機能していなかつたか、極めて小規模なものになっていたと思われる。そのような、落ち込み状になっていた自然流路（跡）に盛り土（III層）した土砂、またはその影響を受けて堆積したのが1

層と考えられる。そう考えると、自然流路の出土遺物の性格も、基本的に盛り土層（Ⅲ層）の包含遺物と同等となる。

遺物は、石器（129）、縄文土器（130）、古式土師器（131～144）が出土した。

129は敲石である。石材は花崗岩で長辺10.9cm、短辺10.0cm、厚さ4.4cm、重量782.5gを測る。130は縄文土器の深鉢である。口縁端部に面をもち、刺突文が施されている。131～134は古式土師器の広口壺である。131は口縁端部に面をもち、口径は26.0cmを測る。132は端部がわずかに肥厚した面をもつ。133は口縁端部に垂下する面をもち、棒状浮文を貼り付ける。134は口縁端部に垂下する面をもつが上部は欠損している。端面に波状文を施した後、刻み目に入った棒状浮文が貼り付く。135は古式土師器の広口壺と思われるが、器台の可能性もある。垂下する口縁端面に、斜格子文・刺突列点文・円形浮文を施す。136は古式土師器の有段口縁甕である。第2口縁は緩やかに外湾し端部は丸くおさまり、外面には9条の擬回線が施される。口径は24.0cmを測る。137は古式土師器の二重口縁壺で、屈曲部に円形浮文が施される。138は古式土師器の直口壺または長頸壺の口縁部と思われる。緩やかに外反してのびる口縁で、端部付近で内湾し上端に面をもち、端部外面に刻み目が施される。内外面にハケ調整が施され、口径は11.0cmを測る。139は古式土師器の細頸壺の体部である。球形の体部をもち、底部は器壁が薄く上げ底である。底径は2.6cm、体部の最大径は12.5cmを測る。140は古式土師器の受口状口縁甕で、第2口縁に明瞭な屈曲を持ち、端部をつまみ出す。外面に1条のクシ描沈線文を施した後に3本1単位で棒状浮文を貼り付ける。頸部より下半の外面に粗いハケ調整が施され、口径は15.0cmを測る。141は古式土師器のくの字状口縁甕である。端部に面をもち、口縁部内面にハケ目が施され、頸部括れ部外面に連続の指頭圧痕がみとめられる。口径は19.2cmを測る。142は古式土師器の高杯である。基部内面に直径0.3cm程度の刺突痕が残る。143は古式土師器の有孔鉢である。円錐形の体部で底部に焼成前の穿孔を持ち、底径3.1cm、孔径0.6cmを測る。144は古式土師器の細頸壺と思われる。外面に5条の直線文が施される。

(5) 落ち込み (SX221)

SX221 (図28)

自然流路NR220の西側に位置する落ち込み状遺構である。人為的な遺構とは認められず⁴、あくまで地形の落ち込みと考える。そのため、遺物は出土しているが、あくまで盛り土層（Ⅲ層）の包含遺物である。

遺物は、古式土師器（145～152）が出土した。

145・146は古式土師器の広口壺である。145は頸部より強く屈曲して直線的ひらく口縁部をもつ。口縁端部に垂下する面をもち、刻み目に入った棒状浮文を貼り付ける。口径は16.8cmを測る。146は口縁端部に垂下する面をもつが下部は欠損している。端面に波状文を施し、口径は19.0cmを測る。147・148は古式土師器のくの字状口縁甕である。端部は丸くおさまり、体部外面にハケ目、内面はケズリ後ナデが施されている。口径は15.9cmを測る。148は口縁

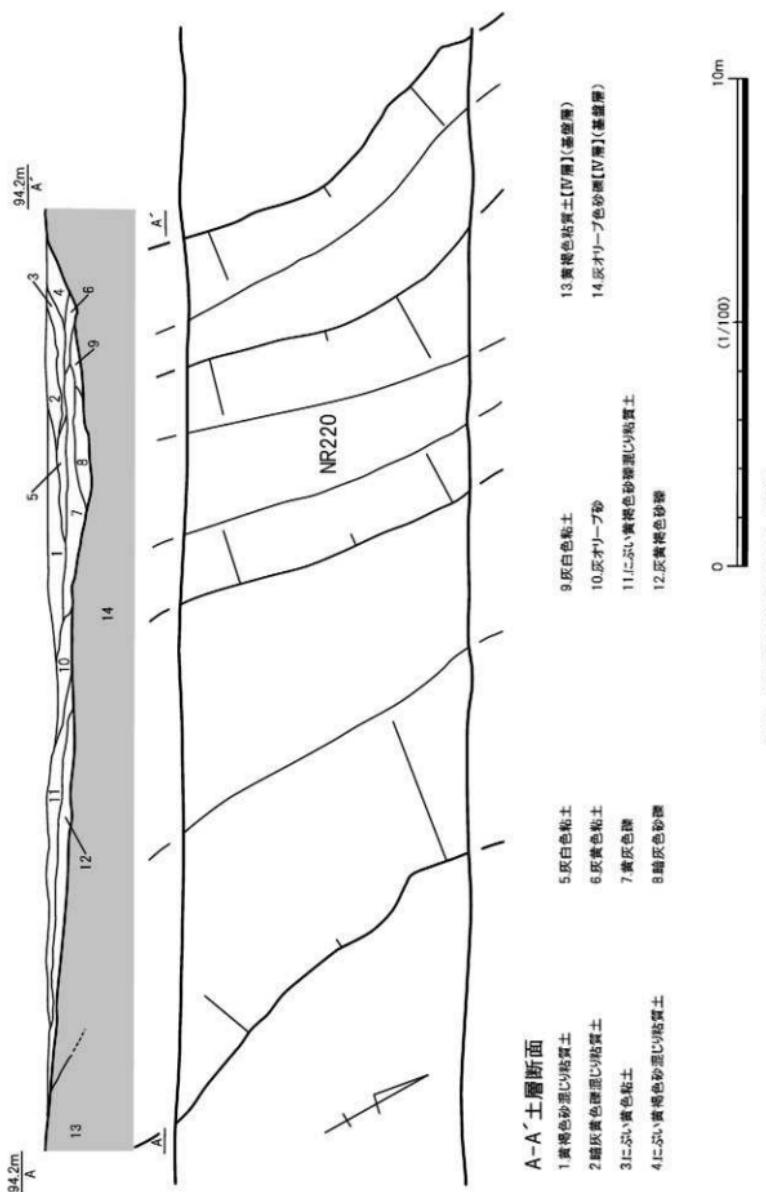


図 25 自然流路 (NR220) 平面図・断面図

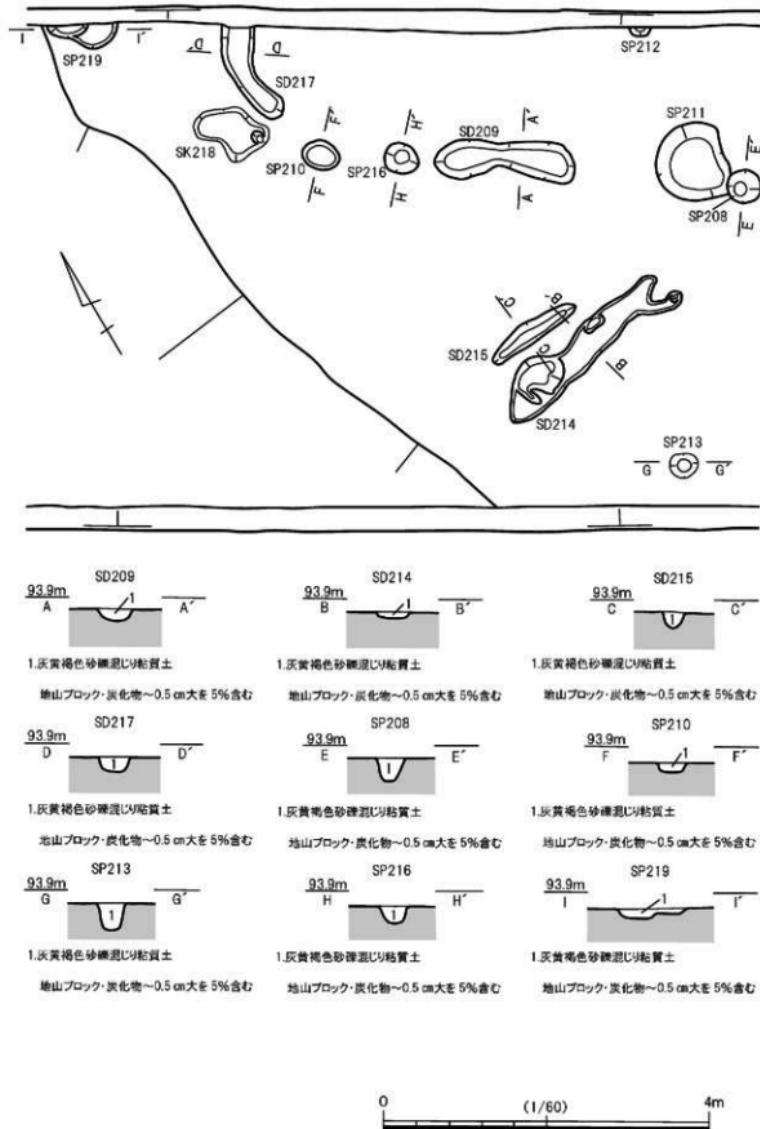


図 26 各造構平面図・断面図

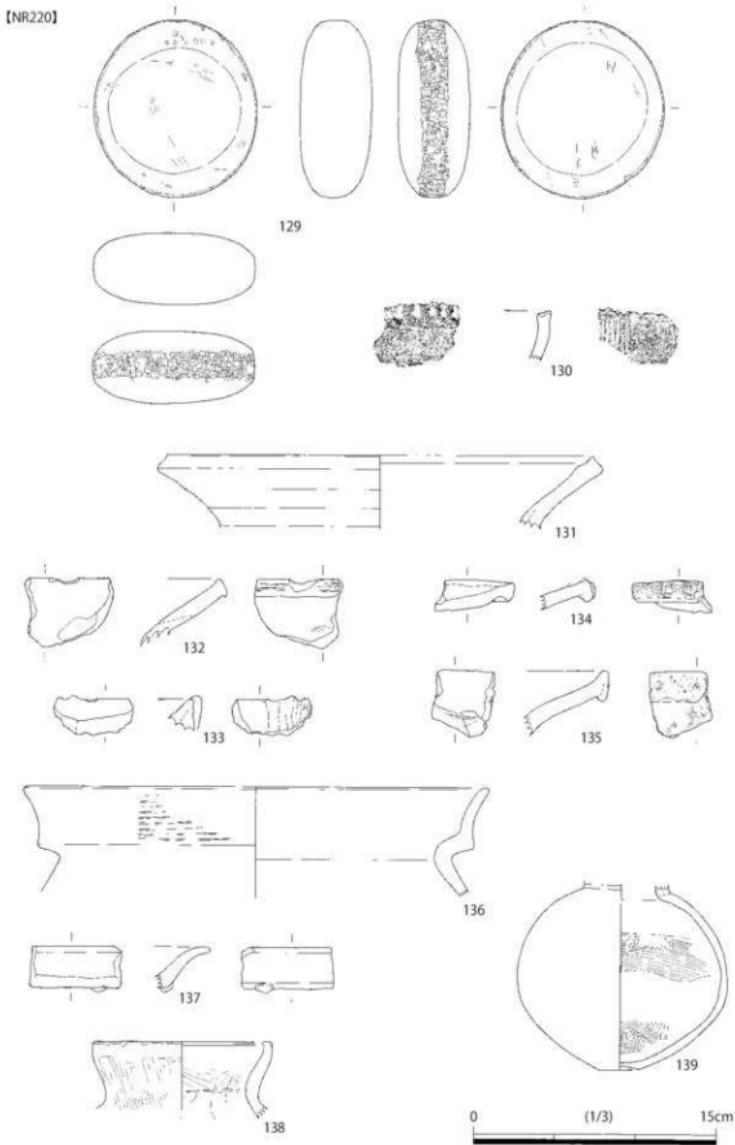
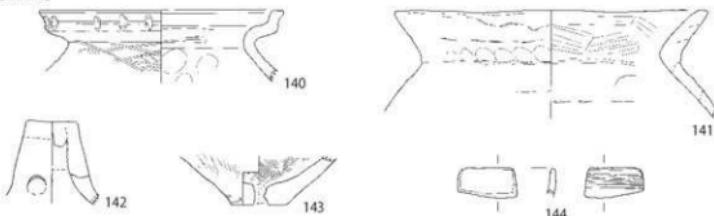
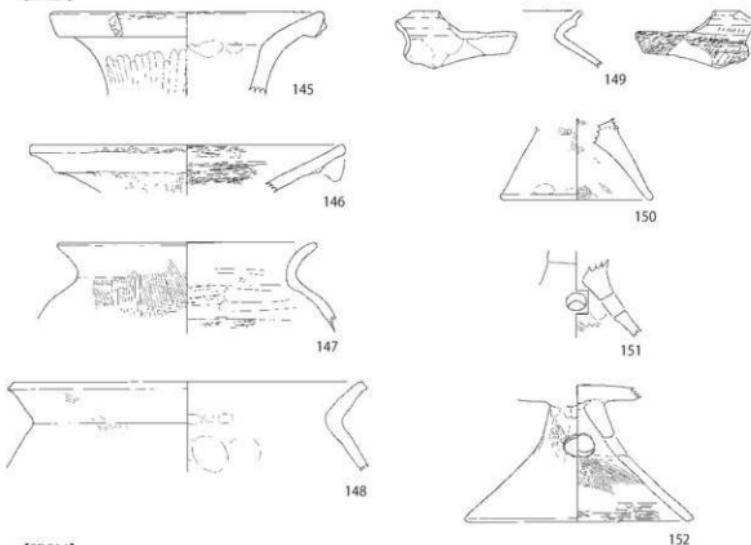


图 27 NR220 出土遗物实测图

[NR220]



[SX221]



[SD214]



[SP219]



図 28 NR220・SX221・SD214・SD219 出土遺物実測図

端部に面をもつ。摩滅しているが体部外面にわずかにハケ調整が確認される。口径は21.2cmを測る。149は古式土師器のS字状口縁甕である。外面に粗いハケ調整がタテ→ヨコの順に施されている。150は古式土師器の台付甕または台付鉢の脚部である。胎土が粗く、内外面にハケ調整が施される。底径は9.2cmを測る。151・152は古式土師器の高坏の脚部である。152は透かしが4箇所みとめられ、外面ミガキ調整、内面ハケ調整が施される。底径は14.0cmを測る。

(6) 溝 (SD209・SD214・SD215・SD217)

SD209 (図26)

Y=22935付近と自然流路NR220の間で検出された溝である。全長約1.75m、幅0.43m、深さ約0.14mを測る。埋土は、灰黄褐色砂礫混じり粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SD214 (図26・28)

Y=22935付近と自然流路NR220の間で検出された溝である。溝の方位は、ほぼ東西方向に乗っており、SD35・SD215と同方向である。全長約2.70m、幅0.42m、深さ約0.15mを測る。埋土は、灰黄褐色砂礫混じり粘質土の1層である。

遺物は、古式土師器（153）が出土した。

153は古式土師器の壺の底部である。器壁の厚い平底を呈しており、底径は5.3cmを測る。

SD215 (図26)

Y=22935付近と自然流路NR220の間で検出された溝である。溝の方位は、ほぼ東西方向に乗っており、SD35・SD214と同方向である。全長約1.22m、幅0.27m、深さ約0.18mを測る。灰黄褐色砂礫混じり粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SD217 (図26)

Y=22935付近と自然流路NR220の間で検出された溝である。調査区外に伸びているため全長は判然としないが、検出されている長さは約1.25m、幅約0.40m、深さ約0.18mを測る。埋土は、灰黄褐色砂礫混じり粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

(7) 土坑 (SK211・SK218)

SK211 (図26)

Y=22935付近と自然流路NR220の間で検出された平面形が円形の土坑である。長辺約0.98m、短辺約0.86m、深さ約0.25mを測る。埋土は、灰黄褐色砂礫混じり粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SK218 (図26)

Y=22935付近と自然流路NR220の間で検出された平面形が不整形の土坑である。長辺約

0.95m、短辺約0.51m、深さ約0.22mを測る。埋土は、灰黄褐色砂礫混じり粘質土の1層である。
遺物は、出土していない。

(8) 小穴 (SP208・SP210・SP213・SP216・SP219)

SP208 (図26)

Y=22935付近と自然流路NR220の間で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.43m、
短辺約0.41m、深さ約0.28mを測る。埋土は、灰黄褐色砂礫混じり粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP210 (図26)

Y=22935付近と自然流路NR220の間で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.47m、
短辺約0.35m、深さ約0.11mを測る。埋土は、灰黄褐色砂礫混じり粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP213 (図26)

Y=22935付近と自然流路NR220の間で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.36m、
短辺約0.31m、深さ約0.32mを測る。埋土は、灰黄褐色砂礫混じり粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP216 (図26)

Y=22935付近と自然流路NR220の間で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.44m、
短辺約0.37m、深さ約0.20mを測る。埋土は、灰黄褐色砂礫混じり粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP219 (図26・28)

Y=22935付近と自然流路NR220の間で検出された小穴である。調査区外にひろがるため平面
形は判然としないが、検出されている範囲だと長辺約0.86m、深さ約0.13mを測る。埋土は、
灰黄褐色砂礫混じり粘質土の1層である。

遺物は、古式土師器(154)が出土した。

154は古式土師器の広口壺または器台である。直線的な受部の口縁端部が上下に肥厚し面を
もち、擬凹線が施される。口径18.4cmを測る。

参考文献

中居和志 2010「古墳出現前後の近江地域—土器編年を中心にして—」『立命館大学考古学論集V』立命
館 大学考古学論集刊行会

第4節 時期別の遺構の整理

ここまで上層・下層の検出遺構・遺物について報告してきた。今回の調査では、概ね、弥生時代後期後葉～古墳時代前期と平安時代末～中世の2時期の遺構群が確認された。ここでは、各時期ごとに整理し、本章のまとめとする

(1) 弥生時代後期後葉～古墳時代前期（図29）

調査区のY=22935付近より西側に関しては、下層遺構が対象となり、東側では、出土遺物と遺構埋土より判断・整理した。当該期の遺構としては、複数の土坑・溝・小穴などを検出したが、遺跡の性格を理解・評価できるような遺構はあまり検出されておらず、遺構の残存状況は決して良好とは言えない。また、時期に關しても、弥生時代後期後葉～古墳時代前期としたが、本来遺構出土遺物で判断すべきところであるが、あまり遺構出土遺物にめぐまれなかつたため、盛り土層（Ⅲ層）の包含遺物なども含めて、出土遺物の總体で判断した。そのため、今回の調査報告では当該期について、やや時期幅を持たせた。今後、周辺の調査が進めば、当該期の遺跡の実態と時期は、さらに絞り込んでいけると考える。

(2) 平安時代末～中世（図30）

調査区一帯が、切り土と盛り土によって整地された後に、ひろがつた遺構群である。前述したように、平安時代末～中世の段階で整地された可能性は高いと考えるが断定はできない。調査区のY=22935付近より西側に関しては、上層遺構が対象となり、東側では、出土遺物と遺構埋土より判断・整理した。当該期の遺構としては、複数の土坑・溝・小穴などと1基の井戸を検出した。調査区東側では、井戸（SE22）とそれに伴う小穴群がひろがり、西側では耕作に伴う素掘り溝群が確認された。しかし、遺構の時期に關しては、井戸（SE22）は、出土遺物より廃絶時期が12世紀後半から13世紀初頭と絞り込めるが、耕作に伴う素掘り溝群に關しては、出土した中世土師器皿が小片のため、詳細な時期を絞り込めないことより、調査区東側の井戸（SE22）と西側の耕作に伴う素掘り溝群は、同時期であるかどうかの判断は、今回の調査では困難である。そのため、当該期に關しても、平安時代末～中世と幅を持たせた。この点に關しても、周辺の調査が進めば、当該期の遺跡の実態と時期は、さらに絞り込んでいけると考える。

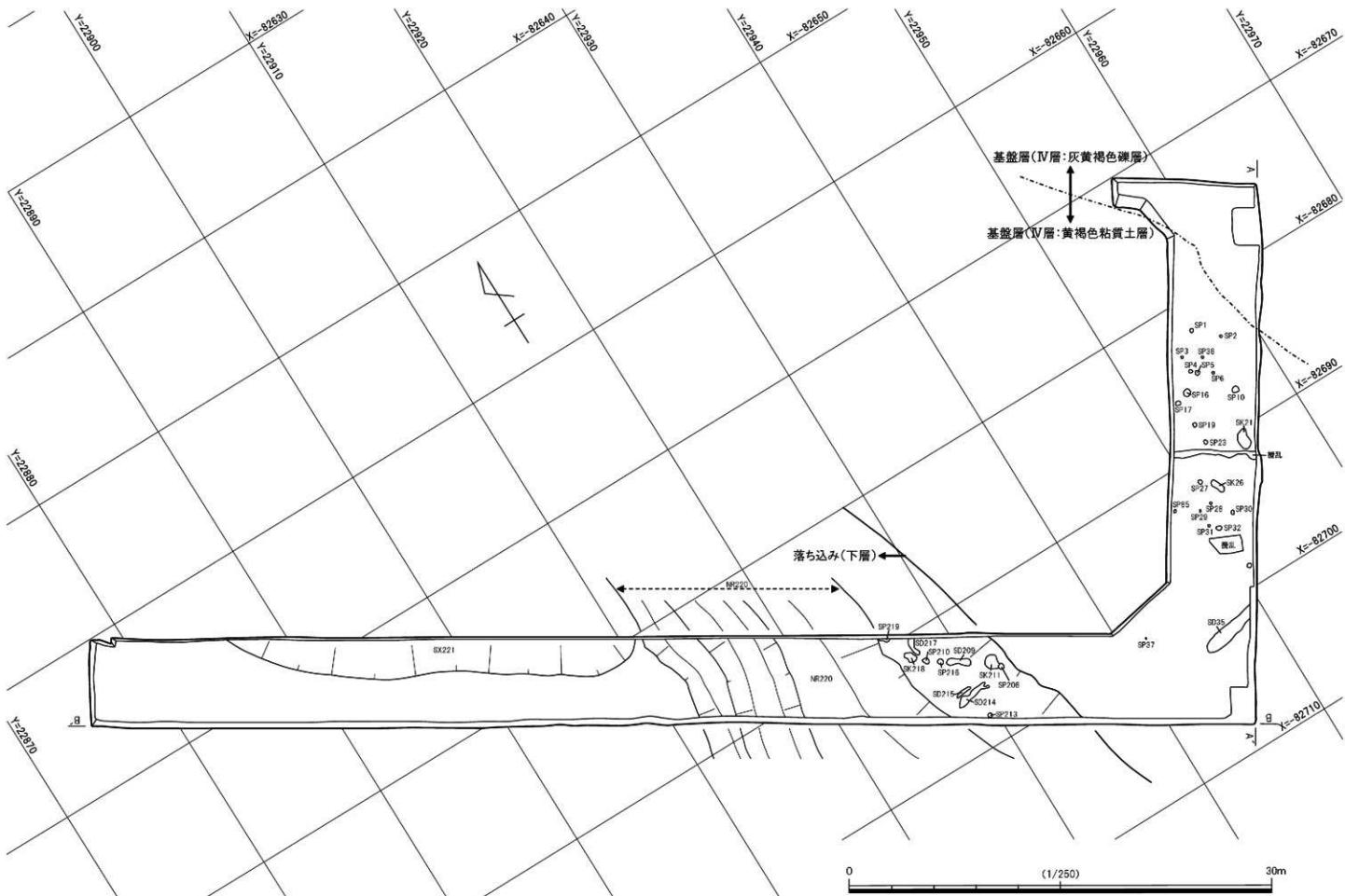


図29 弥生時代後期後葉～古墳時代前期の主な遺構図

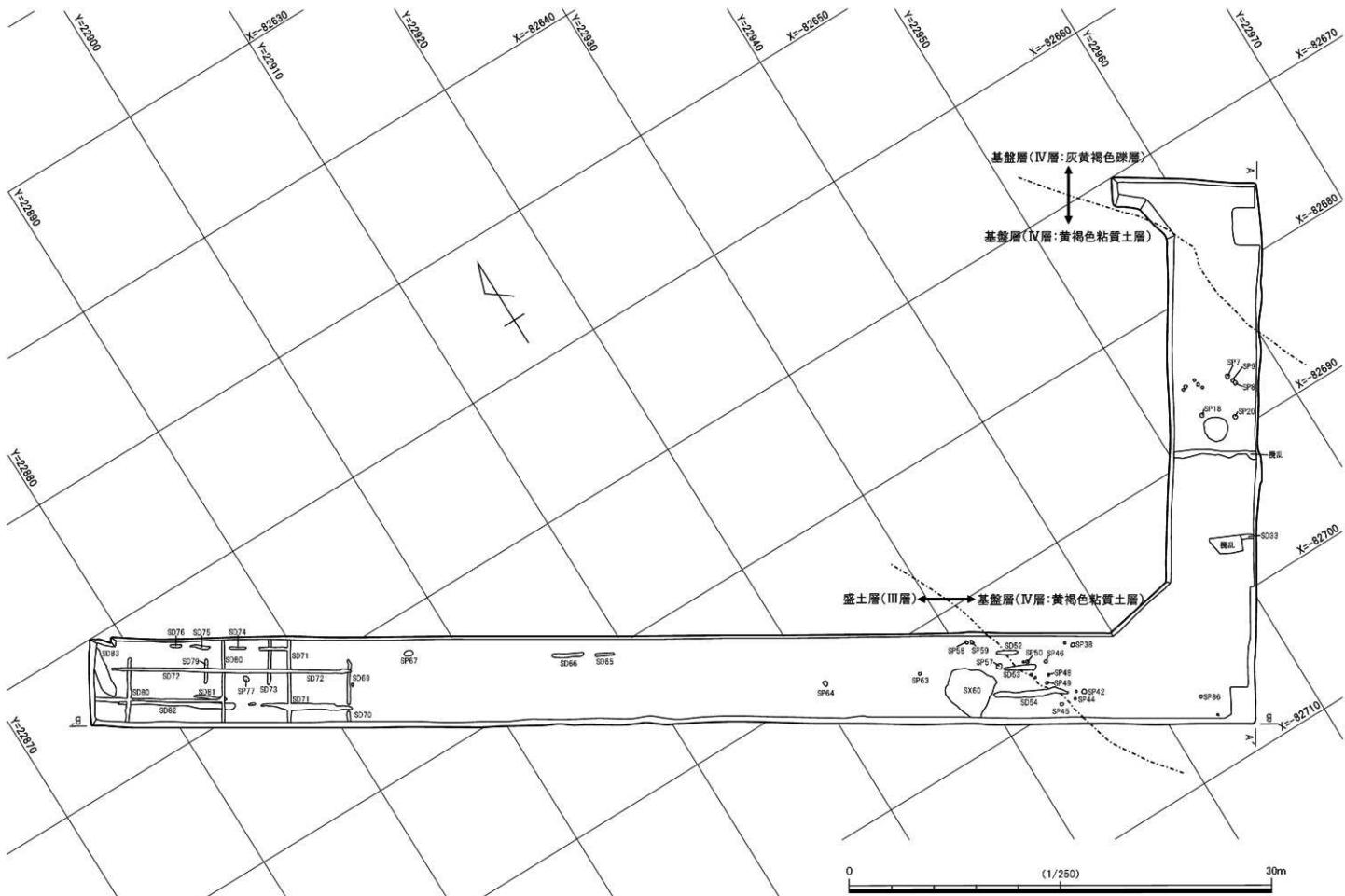


図30 平安時代末～中世の主な遺構図

第3章 総括

今回の調査は、山之脇遺跡における第2次調査であった。約709m²という限られた調査範囲であったが、地域の古代史を解明する上で貴重な調査成果を得ることができた。最後に、改めて今回の調査成果を振り返りつつ、若干の検討を加え、まとめとしたい。

第1節 弥生時代後葉～古墳時代前期の土器の検討

今回の調査では、盛り土層（Ⅲ層）を中心に、弥生時代後葉～古墳時代前期の土器が出土した。各遺物の事実報告に関しては、前述したとおりであるが、ここではこれらの土器について、近江地域や周辺地域の編年と対応させることで、今回の調査地出土土器の編年的位置の大枠について検討したい。なお、本来は一括性の担保された遺構出土遺物に対してこのような分析を行うのが筋ではあるが、今回の調査では、遺構に伴う遺物が極く限られていたため、2次堆積層である盛り土層（Ⅲ層）の遺物を中心に出土遺物全体に対して検討を行う。ただ、湖東地域北部に位置する犬上川流域における当該期の資料は少ないため、当該地域における一定の傾向を把握するという意味でも、資料の提示・整理は無駄ではないと考える。近江地域の編年として、近江北半地域・南半地域ごとに整理された中居和志氏による近江全城の編年（以後「中居編年（北半・南半）」）（中居2010）を援用する。また周辺地域については、東海地域の編年として、赤塚次郎氏の廻間編年（以後「赤塚編年」）（赤塚1990、1997）、北陸地域の編年として堀大介氏の越前・加賀編年（以後「堀編年」）（堀2006）を援用する。

壺では、82・83・131・132が中居編年の広口壺A2類にあたりることより、Ⅱ期以降と考えられる。84～86・134・135・145・146は、口縁端部を拡張し加飾し、東海地域に系譜をもつ中居編年の広口壺B2類にあたり、Ⅱ期～Ⅲ期に位置づけられる。72・87は、北陸地域に系譜をもつ、中居編年有段口縁壺A類にあたり、Ⅲ期～Ⅳ-Ⅰ期に位置づけられる。

甕では、15・21・89～95・140が中居編年の受口状口縁甕Aa1・Aa2類にあたり。口縁外面にヘラ描沈線文が施され、棒状浮文を施すものもあることより、Ⅱ-3期～Ⅲ-2期に該当すると考えられる。96・97は中居編年の受口状口縁甕Aa3類にあたり、小型でいわゆる「斗西タイプ」といわれるもので、Ⅲ-2期に位置づけられる。22は、同じく受口状口縁甕であるが、口縁外面が無文のため、中居編年の受口状口縁甕B2類にあたり、Ⅳ期に位置づけられる。上記の受口状口縁甕は近江南半地域の様相に近似するが、74・98は、第2口縁の屈曲が弱く、口縁端部も上方におさまる形態で近江北半地域の様相に近似する。中居編年B1類にあたり、Ⅱ期に位置づけられる。136は、北陸地域に系譜をもつ、中居編年の有段口縁甕A類にあたり、Ⅲ期に位置づけられる。また、北陸の堀編年では甕A12・13類と考えられ、長泉寺1式・白江1式に該当すると考えられる。75・104～106・149は東海地域に系譜をもつ、中居編年のS字状口縁甕B類にあたり、Ⅲ-2期に該当する。東海の赤塚編年ではS字状口縁甕B類にあたり、肩部の横ハケは頸部に接していることからB類の中でも古相を呈する。これらは赤塚編年の廻

間II式でも最初期に該当すると考えられる。一方、くの字状口縁甕は内外面ハケ調整の在地的様相をもち、いわゆる畿内第5様式系甕の影響も認められない。また、庄内形甕や布留形甕のものと思われる内面をケズリ調整する資料もみられないため、畿内地域との併行関係を探るのは困難である。ただ、1点だけ103の口縁の形状が布留形甕のそれに近似しているが、内外面の調整は摩滅のため不明である。

高坏は、77・109・111・152は、中居編年の有稜高坏B類にあたり、III期・IV期に位置づけられる。112・113は、美濃地域に系譜をもつ口縁内面に多条沈線文を施す高坏で、中居編年の有稜高坏C類、東海地域の赤塚編年の高坏A3類に該当する。113は、多条沈線文を施す文様帶の段構成が消失していることより、中居編年のIV-1期、赤塚編年の廻間II-3・4期に該当し、段構成を有す112は、それ以前の時期となるが口縁部の小片のため、これ以上の絞り込みは困難である。

器台は、23・121は受部端部を拡張させ端面を装飾するため、中居編年の器台Bb1類ないしBb2類にあたり、II期～III期に該当するが、端部の破片のみのためこれ以上の絞り込みは困難である。

以上が各器種ごとの編年との対応である。これらを総括して、出土土器全体の傾向を検討すると、中居編年のII期～IV期にかけての土器群で、特にII-3期～III期を主体とすると言える。すなわち、弥生時代後期後葉～古墳時代前期の時期幅をもつが、その中でも庄内式併行期が主体となる土器群であると考えられる。やや、時期幅があるが、上述したように検討遺物の大半は2次堆積の盛り土層(III層)内の遺物であり、そのほとんどが口縁部のみなどの小片によったため、時期の絞り込みが甘くなり時期幅をもつ結果となった。地域的傾向だが、近江北半・南半どちらの様相も確認された。また、北陸・東海地域に系譜をもつ土器も確認され、その地域的多様性は湖東地域北部という地域的特性と矛盾しない結果となった。しかし、今回提示した資料には、地域的な割合など数値的客觀性は全く担保されていない。この点についても、上述したように、検討遺物の出土状況の問題とともに、資料(団化遺物)選別の際の恣意性を十分に排除できていないためである。このように、今回の土器群に対して、帰属時期についても地域性についても、やや絞り込めない整理となった。しかし、当該期の資料が限られている犬上川流域において、ある程度の時期幅・地域性におさまる資料の提示は、今後の叩き台としても一定の意味をもつと考える。今後、山之脇跡をはじめ、周辺地域での資料の充実を待って、当該期資料の更なる検討を行っていく必要がある。

第2節 井戸(SE22)の検討

SE22からは、平安時代末～中世初頭を中心とする時期の遺物が出土した。ここでは、SE22出土土器の編年的位置について検討するとともに、井戸埋土である炭化層(7層)の性格についても若干の検討を行いたい。土師器皿については、当該期における近江の編年は未だ確立されていないため、京都の伊野近富氏の編年(以後「伊野編年」)(伊野1995)を、土師質

土器の羽釜については国立歴史民俗博物館の編年（以後「歴博編年」）（国立歴史民俗博物館1997）を、山茶碗については岡本直久氏の編年（以後「岡本編年」）（岡本2005）を、瓦器椀については、森島康雄氏の編年（以後「森島編年」）（森島2005）をそれぞれ援用する。

土師器皿は、26・30・37はわずかであるが、いわゆる「ての字状口縁」を呈しており、伊野編年Bcタイプ、42はいわゆる「コースター型口縁」を呈しており、同じく伊野編年のCタイプに位置づけられる。

土師質土器の羽釜は、43・63とともに口縁部の内傾の度合いが未だ大きくないことより歴博編年の中世II期に位置づけられる。

山茶碗は、椀・小椀とともに直線的な口縁に、高台の断面は幅広で丸みを帯びたものが主体となることより、岡本編年で尾張型の4形式後半に位置づけられる。

瓦器椀は、62は器形を中心に当該期に近江に流通する大和型に近いが断言できない。当該期の大和型瓦器椀は森島編年第III段階A型式に該当すると思われるが、それと比較すると、やや軟質で炭素の吸着が不十分なため外観の光沢が不十分である。また、内面・外面のミガキについては、当該期の大和型と比べると非常に密であるが、内外面ともレコード状の圓線ミガキとはなっておらず、しばしば斜交するという特徴を有する。これらの特徴を有する瓦器椀に関して、北川浩氏（北川1985）と森隆氏（森1986）は蒲生郡を中心として流通する在地産瓦器椀（近江型）の存在を提唱されている。62は、北川氏と森氏が指摘する在地産瓦器椀の特徴に近いと感じるが、現段階では、資料数も少ないということもあり、これ以上の言及はできない。今後、周辺地域の類例の増加を待つて再検討を要する課題である。

以上の各編年との対応を総括すると、若干の前後の時期幅はあるものの、SE22の出土遺物は、12世紀後半～13世紀初頭を主体とする遺物群である。

次に、SE22の7層（炭化層）について検討する。7層は炭化物と灰がベースとなる堆積層で、井戸の中位に10cm程の厚さで堆積していた。壁面には被熱痕が認められないため、他所で燃えた炭化物・灰が人為的に2次堆積した可能性が高い。この行為には、どのような意味が込められているのだろうか。新潟県における井戸の祭祀について検討した駒井和夫氏によると、井戸中位あるいは中位下部で炭化物や灰などが堆積する事例は、古墳時代～中世戦国期に認められ、その割合は平安時代～室町時代に特に高いとし、埋井の祭祀にかかる行為のひとつと評価している。また、焼けた礫や鉄滓の埋納も、埋井の祭祀に火とかかわる行為が認められることから、同様の行為と評価している（駒井1992）。小出泰弘氏は、同様の事例として富山県の惣領浦之前遺跡の井戸を紹介し、駒井氏と同様の評価を行っている（小出2004）。今回の調査で検出したSE22の7層（炭化層）は、これら新潟・富山の事例に合致することができ、埋井の祭祀にかかる行為の可能性が高いと言えそうであるが、更なる裏付けには、近江における同様の事例の蓄積が不可欠であると考える。この点は今後の課題であるが、今回の調査地の近隣で、同じ犬上川右岸に位置する福満遺跡の第30次調査で、焼けた礫が埋納された平安時代末の井戸が確認されている。犬上川右岸という同様の地域で、火とかかわる

同様の事例が確認されていることは注目に値する。

第3節 山之脇遺跡第2次調査の成果と今後の課題

最後に、今回の山之脇遺跡第2次調査の調査成果と今後の検討課題を整理する。

今回の調査では、主に2時期の遺構・遺物を確認することができた。弥生時代後期後葉～古墳時代前期と平安時代末期～中世の2時期である。

遺跡の形成過程を復元すると、今回の調査地周辺は、もともと東側から西側にかけて緩やかに標高が下がる旧地形を呈していたようである。旧地形の段階で、弥生時代後期後葉～古墳時代前期にかけて人々の営みがあったようであるが、その後、長らく土地利用の痕跡は確認できない。次に、平安時代末～中世の段階になって、周辺一帯は、大規模な整地が行われたようである。周辺一帯の地面をフラットにするため、旧地形において標高が高いY=22935付近から東側は切り土が行われ、その切り土で発生した土砂を、Y=22935付近から西側の低地に盛り土（Ⅲ層）を行うことで、フラットな地面を生み出したようである。整地の目的は、耕作地の確保と推測されるが、それを裏付けるように、生み出されたフラットな面で、耕作に伴う素掘り溝や井戸など平安時代末～中世の遺構が確認されている。

弥生時代後期後葉～古墳時代前期の遺構としては、複数の土坑・溝・小穴などを検出したが、当該期の遺跡の性格を理解・評価できるような遺構はあまり検出されておらず、遺構の残存状況は決して良好とは言えなかった。切り土と盛り土の関係や、その盛り土層（Ⅲ層）内に多量の古式土師器が含まれている点、自然流路であるNR220から西側では遺構が全く検出されない点などを総合して考えると、当該期の遺構はY=22935付近から東（～北東）側の微高地にひろがっていたと推測される。それを裏付けるように、今回の調査地の北東隣接地で実施された山之脇遺跡第3次調査で同時期の堅穴建物が確認された。これらの状況を勘案すると、自然流路NR220沿いの東部微高地に集落遺跡がひろがっていた可能性が想定されるが、その遺構の広がりや性格の解明は、今後の周辺地域の調査の進展を待たなければならぬ。出土遺物に関して、本章第1節で記述したように、時期比定・地域的傾向とともに、やや絞り込めない結論となった。この点についても今後の課題である。

平安時代末～中世の遺構としては、複数の土坑・小穴・耕作に伴う素掘り溝などと1基の井戸を検出した。特に、大規模な切り土と盛り土による整地、その後の井戸を作り耕作地のひろがりは、当該期の耕地開発と土地利用の実態を解明する上で重要な調査成果を得たと言える。また、SE22の一括遺物の検出は、土師器皿の実態や山茶碗の分布圏など当該期の遺物の検討に重要な成果を得たと考える。ただ、耕作に伴う素掘り溝の時期が絞り込めなかった点が課題として残る。

以上が山之脇遺跡第2次調査における調査成果と課題である。山之脇遺跡を含む当該地周辺は、畿内と東海・北陸地域を結ぶ重要な地域であるにもかかわらず、これまであまり考古学的調査が実施されておらず、資料の空白地域であった。しかし、近年、少しずつ資料が蓄

積されつつあり、今回の調査成果もそのひとつと言える。多くの課題も残った調査成果ではあったが、古式土師器における多様な地域性や東海の山茶碗の出土など、湖東地域北部の地域的特性を十分反映した調査成果も得られ、その資料的価値は高いと考える。今後、より鮮明な地域社会像に迫るためにも、更なる資料の充実に期待したい。

参考文献

- 赤塚次郎 1990 「V考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1997 「廻間I・II式再論」『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 伊藤裕樹 2005 「土製煮炊具（“かたち”と“わざ”～中世の土製煮沸具から～）」『全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」発表要旨集』全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会
- 伊野近富 1989 「12～16世紀の京都の土器」『中近世土器の基礎研究』V 日本中世土器研究会
- 伊野近富 1995 「土師器Ⅲ」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 岡本直久 2005 「山茶碗編年の現状について」『全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」発表要旨集』全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会
- 奥井智子 2004 「近江における中世土器研究—近江の中世土器の基礎資料集成—」『中近世土器の基礎研究』XVII 日本中世土器研究会
- 北川 浩 1985 「蒲生堂庵寺跡8・9出土の瓦器について—近江地方における瓦器生産に関する一考察」『滋賀考古学論叢』第2集 滋賀考古学論叢刊行会
- 小出泰弘 2004 「惣領浦之前遺跡の井戸祭祀」『富山考古学研究』紀要第7号
- 国立歴史民俗博物館編 1997 『国立歴史民俗博物館研究報告第71集 中世食文化の基礎研究』
- 駒井和夫 1992 「井戸をめぐる祭祀—地域事例の検討から—」『考古学雑誌』第77巻第4号 日本考古学会
- 大宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』
- 中居和志 2010 「古墳出現前後の近江地域—土器編年を中心にして—」『立命館大学考古学論集V』立命館大学考古学論集刊行会
- 戸塚洋輔 2018 「第4章 総括 1出土土器の編年的検討と大溝の時期」『稻部遺跡 第14次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告第72集
- 彦根市教育委員会 2008 『福満遺跡X・XI』彦根市埋蔵文化財調査報告第40集
- 伴野幸一 2006 「近江地域」『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター
- 森 隆 1986 「滋賀県における古代末・中世土器」『中近世土器の基礎研究』II 日本中世土器研究会
- 森島康雄 2005 「瓦器一編年と伝播—」『全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」発表要旨集』全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会

表3 出土器物一覽 (1)

| 號號 No. | 出土地點 | 圖種 | 編號 | 部位 | 殘存率 | 量 (cm) | | 外觀 | 內面 | 備註 |
|-----------|------|-----|------|----|-------|------------|------------|-----|------|---------------------|
| | | | | | | 口徑 (原形) | 體高 (原形) | | | |
| 1 | SP3 | 1 單 | 方土燒器 | 鋤 | 殘存 | — | — | 1.2 | 5.0 | 窄口鋤 孔徑 0.6 cm |
| 2 | SP13 | 1 單 | 土燒器 | 三 | 體高~底徑 | 20% 有裂 | — | — | — | 7/4 小口鋤 |
| 3 | SP6 | 1 單 | 方土燒器 | 鋤 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | 11.6 | — | 良 | 7.5 cm 7/4 小口鋤 |
| 4 | SP6 | 1 單 | 方土燒器 | 鋤 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | 11.8 | — | 良 | 7.5 cm 6.6 cm |
| 5 | SP17 | 1 單 | 方土燒器 | 鋤 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | — | — | 良 | 7.5 cm 6.6 cm |
| 6 | SP17 | 1 單 | 方土燒器 | 鋤 | 底鋤 | 3.5% 有裂 | — | — | 良 | 7.5 cm 6.6 cm |
| 7 | SP18 | 1 單 | 土燒器 | 鋤 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | — | — | 良 | 7.5 cm 7/4 小口鋤 |
| 8 | SP19 | 1 單 | 方土燒器 | 鋤 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | — | — | 良 | 7.5 cm 7/4 小口鋤 |
| 9 | SP20 | 1 單 | 土燒器 | 三 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | — | — | 良 | 7.5 cm 7/4 小口鋤 |
| 10 | SP60 | 1 單 | 方土燒器 | 鋤 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | — | — | 良 | 7.5 cm 6.6 cm |
| 11 | SP60 | 1 單 | 方土燒器 | 鋤 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | — | — | 良 | 7.5 cm 7/4 小口鋤 |
| 12 | SP60 | 1 單 | 方土燒器 | 鋤 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | — | — | 良 | 7.5 cm 6.6 cm |
| 13 | SP60 | 1 單 | 土燒器 | 鋤 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | — | — | 良 | 7.5 cm 7/4 小口鋤 |
| 14 | SP65 | 1 單 | 土燒器 | 三 | 口徑~鋤尖 | 5.5% 有裂 | — | — | 良 | 2.5 cm 7/3 瓶嘴 |
| 15 | SP71 | 1 單 | 方土燒器 | 鋤 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | — | — | 良 | 10 cm 6.3 cm 鋤柄 |
| 16 | SP72 | 1 單 | 方土燒器 | 鋤 | 體高 | 10% 有裂 | — | — | 良 | 10 cm 8.3 cm 鋤柄 |
| 17 | SP77 | 1 單 | 方土燒器 | 鋤 | 口徑~鋤尖 | 5.5% 有裂 | 15.4 | — | 良 | 10 cm 8.3 cm 鋤柄 |
| 18 | SP80 | 1 單 | 方土燒器 | 鋤 | 口徑~鋤尖 | 5.5% 有裂 | — | — | 良 | 5 cm 6.6 cm |
| 19 | SP80 | 1 單 | 方土燒器 | 鋤 | 口徑~鋤尖 | 5.5% 有裂 | — | — | 良 | 2.5 cm 6.6 cm |
| 20 | SP83 | 1 單 | 方土燒器 | 鋤 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | — | — | 良 | 7.5 cm 8.4 cm 鋤柄 |
| 21 | SP83 | 1 單 | 方土燒器 | 鋤 | 口徑~鋤尖 | 2.5% 有裂 | — | — | 良 | 2.5 cm 7/6 瓶嘴 |
| 22 | SP83 | 1 單 | 方土燒器 | 鋤 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | — | — | 良 | 10 cm 7/6 瓶嘴 |
| 23 | SP83 | 1 單 | 方土燒器 | 鋤 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | 17.0 | — | 良 | 10 cm 5 cm |
| 24 | SP83 | 1 單 | 方土燒器 | 鋤 | 底鋤 | — | — | 5.4 | 13.7 | 窄口鋤 6.6 cm |
| 25 | SP22 | 上層 | 土燒器 | 三 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | 9.1 | — | 良 | 7.5 cm 6.6 cm |
| 26 | SP22 | 上層 | 土燒器 | 三 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | 11.0 | — | 良 | 10 cm 6.6 cm |
| 27 | SP22 | 上層 | 土燒器 | 三 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | — | — | 良 | 10 cm 6.6 cm |
| 28 | SP22 | 上層 | 土燒器 | 三 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | 11.0 | — | 良 | 10 cm 6.6 cm |
| 29 | SP22 | 上層 | 土燒器 | 三 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | 12.0 | — | 良 | 10 cm 6.6 cm |
| 30 | SP22 | 上層 | 土燒器 | 三 | 口徑~鋤尖 | 15% 有裂 | 13.0 | — | 良 | 10 cm 6.6 cm |
| 31 | SP22 | 上層 | 土燒器 | 三 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | 14.0 | — | 良 | 10 cm 6.6 cm |
| 32 | SP22 | 上層 | 土燒器 | 三 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | — | — | 良 | 10 cm 6.6 cm |
| 33 | SP22 | 上層 | 土燒器 | 三 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | 15.4 | — | 良 | 10 cm 6.6 cm |
| 34 | SP22 | 上層 | 土燒器 | 三 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | 15.0 | — | 良 | 10 cm 6.6 cm |
| 35 | SP22 | 上層 | 土燒器 | 三 | 口徑~鋤尖 | 20% 有裂 | 15.0 | — | 良 | 10 cm 8.4 cm 鋤柄 |
| 36 | SP22 | 上層 | 土燒器 | 三 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | 17.8 | — | 良 | 10 cm 7.4 cm 鋤柄 |
| 37 | SP22 | 上層 | 土燒器 | 三 | 口徑~鋤尖 | 5% 有裂 | — | — | 良 | 10 cm 7/3 小口鋤 |
| 38 | SP22 | 上層 | 土燒器 | 三 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | — | — | 良 | 10 cm 7.5 cm |
| 39 | SP22 | 上層 | 土燒器 | 三 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | — | — | 良 | 10 cm 6.6 cm |
| 40 | SP22 | 上層 | 土燒器 | 三 | 口徑~鋤尖 | 10% 有裂 | — | — | 良 | 10 cm 8.4 cm 鋤柄 |

表4 出土遺物一覧(2)

| 編號 No. | 出土地點 | 種類 | 形状 | 部位 | 経年 | 法量 (cm) | | 大径 (mm) | 小径 (mm) | 高さ (mm) | 施主 | 施式 | 外觀 | 内面 | 色調 | 備考 | |
|-----------|------|----|-----|-----|--------|------------|------------|------------|------------|------------|-------|-------|------|----------|------------|---------------------------|------|
| | | | | | | 口径 (mm) | 底径 (mm) | | | | | | | | | | |
| 41 | 9222 | 上層 | 土師壺 | 圓 | 口縁部 | 5% | 直筒形 | — | — | — | (7.0) | 直 | 子目 | 5Y | 8/1灰白 | 8/1灰白 | |
| 42 | 9222 | 上層 | 土師壺 | 圓 | 口縁部 | 15% | 直筒形 | — | — | — | (1.0) | 直 | 直 | 5Y | 8/4灰白 | 8/4灰白 | |
| 43 | 9222 | 上層 | 土師壺 | 直筒 | 口縫部～中部 | 10% | 直筒形 | 21.0 | 27.8 | — | (5.2) | 直 | 直 | 10Y | 6/3に小・黄斑 | 6/2灰白 | |
| 44 | 9222 | 上層 | 土師壺 | 直筒 | 口縫部～中部 | 10% | 直筒形 | 21.0 | 27.8 | — | (4.0) | 直 | 直 | N | 2/3灰 | 施主：2/3灰(灰白) | |
| 45 | 9222 | 上層 | 山茶壺 | 直筒 | 口縫部～中部 | 40% | 直筒形 | 9.2 | — | 5.6 | 3.2 | 直 | 直 | 10Y | 6/4に小・斑 | N | |
| 46 | 9222 | 上層 | 山茶壺 | 直筒 | 口縫部～中部 | 50% | 直筒形 | (0.4) | — | (5.1) | 3.5 | 直 | 直 | 10Y | 6/1灰白 | 【測定：山茶壺】 施主：7/3灰(オーブ)灰 | |
| 47 | 9222 | 上層 | 山茶壺 | 直筒 | 口縫部～中部 | 30% | 直筒形 | 10.8 | — | 6.4 | 3.3 | 直 | 直 | 10Y | 7/1灰白 | 2.5Y | |
| 48 | 9222 | 上層 | 山茶壺 | 直筒 | 口縫部～中部 | 10% | 直筒形 | 11.0 | — | (2.1) | — | 直 | 直 | 10Y | 7/1灰白 | 2.5Y | |
| 49 | 9222 | 上層 | 山茶壺 | 直筒 | 口縫部～中部 | 5% | 直筒形 | — | — | (1.1) | 直 | 直 | 10Y | 7/1灰白 | 2.5Y | | |
| 50 | 9222 | 上層 | 山茶壺 | 直筒 | 口縫部～中部 | 40% | 直筒形 | 16.0 | — | 9.0 | 5.3 | 直 | 直 | 10Y | 7/1灰白 | 2.5Y | |
| 51 | 9222 | 上層 | 山茶壺 | 直筒 | 口縫部～中部 | 15% | 直筒形 | 14.2 | — | — | (3.4) | 直 | 直 | N | 3/3灰 | 3Y | |
| 52 | 9222 | 上層 | 山茶壺 | 直筒 | 口縫部～中部 | 10% | 直筒形 | 15.9 | — | (3.1) | 直 | 直 | 10Y | 8/1灰白 | 2.5Y | | |
| 53 | 9222 | 上層 | 山茶壺 | 直筒 | 口縫部～中部 | 10% | 直筒形 | 17.9 | — | (3.6) | 直 | 直 | 10Y | 5/1黄灰 | 2.5Y | | |
| 54 | 9222 | 上層 | 山茶壺 | 直筒 | 口縫部～中部 | 10% | 直筒形 | 18.6 | — | (2.6) | 直 | 直 | 10Y | 8/1灰白 | 2.5Y | | |
| 55 | 9222 | 上層 | 山茶壺 | 直筒 | 口縫部～中部 | 10% | 直筒形 | — | — | 6.6 | (3.6) | 直 | 直 | 10Y | 8/1灰白 | 2.5Y | |
| 56 | 9222 | 上層 | 山茶壺 | 直筒 | 口縫部～中部 | 10% | 直筒形 | — | — | 7.1 | (3.4) | 直 | 直 | 10Y | 8/1灰白 | 2.5Y | |
| 57 | 9222 | 上層 | 山茶壺 | 直筒 | 口縫部～中部 | 40% | 直筒形 | — | — | 7.1 | (4.6) | 直 | 直 | 10Y | 8/2灰白 | 2.5Y | |
| 58 | 9222 | 上層 | 土製盒 | 輪打口 | 直筒 | — | — | (3.1) | (4.4) | (2.1) | — | 直 | 直 | 10Y | 6/1灰 | 4/4灰 | |
| 59 | 9222 | 上層 | 器 | 直筒 | 直筒 | — | — | (2.7) | (1.9) | (1.1) | — | 直 | 直 | 10Y | 5/4灰 | 5/4灰(1/2)灰 | |
| 60 | 9221 | 下層 | 土師壺 | 直筒 | 土師壺 | 直筒 | 口縫部～中部 | 20% | 9.7 | — | (7.5) | 直 | 直 | 10Y | 7/2に小・黄斑 | 10Y | |
| 61 | 9222 | 下層 | 土師壺 | 直筒 | 土師壺 | 直筒 | 口縫部～中部 | 10% | 11.0 | — | (1.2) | 直 | 直 | 10Y | 7/3灰(オーブ)灰 | 7/3灰 | |
| 62 | 9222 | 下層 | 土師壺 | 直筒 | 土師壺 | 直筒 | 口縫部～中部 | 15% | — | — | (5.1) | 直 | 直 | 10Y | 7/3灰(オーブ)灰 | 7/3灰 | |
| 63 | 9222 | 下層 | 土師壺 | 直筒 | 土師壺 | 直筒 | 口縫部～中部 | 5% | 15.0 | — | — | 直 | 直 | 10Y | 7/1灰白 | 7/3灰(2/2)灰 | |
| 64 | 9222 | 下層 | 土師壺 | 直筒 | 土師壺 | 直筒 | 口縫部～中部 | 10% | 24.2 | 30.0 | — | (6.3) | 直 | 直 | 10Y | 7/2に小・黄斑 | 2.5Y |
| 65 | 9222 | 下層 | 土師壺 | 直筒 | 土師壺 | 直筒 | 口縫部～中部 | 40% | 11.0 | — | (2.3) | 直 | 直 | 10Y | 5/1灰白 | 5Y | |
| 66 | 9222 | 下層 | 土師壺 | 直筒 | 土師壺 | 直筒 | 口縫部～中部 | 20% | 9.7 | — | (4.5) | (1.2) | 直 | 直 | 10Y | 7/1灰白 | 2.5Y |
| 67 | 9222 | 下層 | 土師壺 | 直筒 | 土師壺 | 直筒 | 口縫部～中部 | 30% | 9.7 | — | (7.4) | (2.0) | 直 | 直 | 10Y | 7/1灰白 | 2.5Y |
| 68 | 9222 | 下層 | 土師壺 | 直筒 | 土師壺 | 直筒 | 口縫部～中部 | 30% | 9.7 | — | (1.6) | 直 | 直 | 10Y | 7/1灰白 | 2.5Y | |
| 69 | 9222 | 下層 | 土師壺 | 直筒 | 土師壺 | 直筒 | 口縫部～中部 | 25% | 16.0 | — | 7.6 | 5.3 | 直 | 直 | 6/1灰 | 6/1灰 | |
| 70 | 盛り土壙 | 下層 | 罐 | 空缺 | 口縫部 | 10% | 直筒形 | — | — | (10.7) | やや粗 | 直 | 直 | 10Y | 6/2に小・黄斑 | 外周に墨の痕跡、墨：N1/2灰 | |
| 71 | 盛り土壙 | 下層 | 罐 | 空缺 | 口縫部 | 5% | 直筒形 | — | — | (1.9) | 直 | 直 | 10Y | 7/3灰 | 7/3灰 | | |
| 72 | 盛り土壙 | 下層 | 罐 | 空缺 | 口縫部 | 10% | 直筒形 | — | — | (4.9) | 直 | 直 | 10Y | 7/4に小・斑 | 7/4に小・斑 | | |
| 73 | 盛り土壙 | 下層 | 罐 | 空缺 | 口縫部 | 5% | 直筒形 | 11.2 | — | (4.5) | 直 | 直 | 10Y | 5/1灰 | 5/1灰 | | |
| 74 | 盛り土壙 | 下層 | 罐 | 空缺 | 口縫部 | 10% | 直筒形 | — | — | (2.5) | 直 | 直 | 10Y | 7/3灰 | 7/3灰 | | |
| 75 | 盛り土壙 | 下層 | 罐 | 空缺 | 口縫部 | 10% | 直筒形 | 12.0 | — | (4.7) | 直 | 直 | 10Y | 6/1に小・斑 | 4/2灰灰 | | |
| 76 | 盛り土壙 | 下層 | 罐 | 空缺 | 口縫部 | 10% | 直筒形 | 17.4 | — | (6.0) | やや粗 | 直 | 直 | 10Y | 5/2灰 | 5/2灰 | |
| 77 | 盛り土壙 | 下層 | 罐 | 空缺 | 人体 | — | — | (5.8) | 直 | 直 | 10Y | 6/3灰 | 6/3灰 | | | | |
| 78 | 盛り土壙 | 下層 | 罐 | 空缺 | 直筒 | 20% | 直筒形 | — | — | (7.5) | 直 | 直 | 10Y | 6/6黄 | 6/6黄 | | |
| 79 | 盛り土壙 | 下層 | 罐 | 空缺 | 直筒 | 5% | 直筒形 | 8.4 | 9.5 | — | (3.9) | やや粗 | 直 | 10Y | 6/1に小・斑 | 5/1灰 | |
| 80 | 盛り土壙 | 下層 | 罐 | 空缺 | 直筒 | 45% | 直筒形 | — | — | (6.5) | 直 | 直 | 10Y | 7/3に小・黄斑 | 5/6黄 | | |

表5 出土遺物一覽 (3)

| 編號 No. | 出土地點 | 圖種 | 部位 | 殘存 情形 | 量 (件) | 量 | | |
|-----------|-------|----|-------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|------|------|------|
| | | | | | | | | | | | | 內面 | | |
| 81 | 盛子土器 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | — | — | — | — | (4.6) | — | — | 7.5% | 7.5% | 7.5% |
| 82 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | 16.0 | — | — | (6.3) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 83 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 5%有質 | — | — | — | (4.3) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 84 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | 18.4 | — | — | (1.8) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 85 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | — | — | — | (1.0) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 86 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | — | — | — | (2.8) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 87 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | — | — | — | (3.3) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 88 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | — | — | — | (3.5) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 89 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | 18.0 | — | — | (3.7) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 90 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | 18.0 | — | — | (3.0) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 91 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | 20.0 | — | — | (5.0) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 92 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | 18.0 | — | — | (3.7) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 93 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | 17.2 | — | — | (4.9) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 94 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | 17.2 | — | — | (5.9) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 95 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | 19.0 | — | — | (3.1) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 96 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | 11.0 | — | — | (6.5) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 97 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | — | — | — | (6.1) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 98 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | — | — | — | (1.9) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 99 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | 16.0 | — | — | (8.7) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 100 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | 21.0 | — | — | (6.2) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 101 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | 17.5 | — | — | (3.7) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 102 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | 16.0 | — | — | (6.2) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 103 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | 16.8 | — | — | (4.2) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 104 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | 16.8 | — | — | (3.9) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 105 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | — | — | — | (1.7) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 106 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | 26.0 | — | — | (2.8) | — | — | 4.2% | 4.2% | 4.2% |
| 107 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | 22.0 | — | — | (5.1) | — | — | 6.4% | 6.4% | 6.4% |
| 108 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | 22.0 | — | — | (4.7) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 109 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | 13.0 | — | — | (8.1) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 110 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | — | — | — | (7.0) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 111 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | — | — | — | (3.6) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 112 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | — | — | — | (3.4) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 113 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | — | — | — | (3.2) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 114 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | — | — | — | (3.0) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 115 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | — | — | — | (4.0) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 116 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | — | — | — | (3.9) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 117 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | — | — | — | (3.7) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 118 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | — | — | — | (6.7) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 119 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | — | — | — | (5.4) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| 120 | 土器中範面 | 口沿 | 古玉土柄器 | 高不詳 | 10%有質 | — | — | — | (2.6) | — | — | 5% | 5% | 5% |
| | | | | | 21.4 | — | — | (4.1) | — | — | 5% | 5% | 5% | 5% |

表6 出土遺物一覽(4)

| 號號 No. | 出土地點 | 種類 | 形狀 | 部位 | 殘存率 | 量 (cm) | | 施灰 | 施灰 | 外觀 | 內觀 | 備註 | |
|-----------|--------|-----|-------|------|--------|------------|------------|-------|-------|-----|------|-----------|-----------|
| | | | | | | 口徑 (mm) | 體長 (mm) | | | | | | |
| 721 | 土器中範面 | 直筒 | 方底土燒器 | 蓋合 | 口緣部 | 17.0 | — | (2.3) | 密 | 圓 | 57R | 6/6 直筒 | |
| 122 | 土器中範面 | 直筒 | 方底土燒器 | 底体 | 5%有裂 | — | — | (2.4) | 密 | 圓 | 107R | 6/4 以小孔施灰 | |
| 123 | 土器中範面 | 直筒 | 方底土燒器 | 底部 | 10%有裂 | — | — | (4.6) | 密 | 圓 | 73R | 8/6 有裂 | |
| 124 | 土器中範面 | 直筒 | 方底土燒器 | 底部 | 15%有裂 | — | — | (5.7) | 密 | 圓 | 50R | 5/6 有裂 | |
| 125 | 土器中範面 | 直筒 | 方底土燒器 | 底部 | 10%有裂 | — | — | (4.0) | 密 | 圓 | 107R | 6/3 以小孔施灰 | |
| 126 | 土器中範面 | 直筒 | 方底土燒器 | 底? | 5%有裂 | — | — | (4.2) | 中空相 | 圓 | 32R | 6/2 有裂 | |
| 127 | 土器中範面 | 直筒 | 方底土燒器 | 底部 | 10%有裂 | — | — | (4.5) | 中空相 | 圓 | 107R | 6/1 以小孔施灰 | |
| 128 | 土器中範面 | 直筒 | 方底土燒器 | 底部 | 10%有裂 | — | — | (4.0) | 密 | 圓 | 107R | 7/4 以小孔施灰 | |
| 129 | SXZ20 | 1 個 | 石錐形 | 鰐石 | — | 10.0 | 10.0 | 4.4 | — | — | 5Y | 7/2 以小孔施灰 | |
| 130 | SXZ20 | 1 個 | 獨立之圓錐 | 鰐石 | 口緣部 | 5%有裂 | — | — | (3.0) | 中空相 | 圓 | 107R | 4/3 以小孔施灰 |
| 131 | SXZ20 | 1 個 | 方底土燒器 | 蓋 | 口緣部 | 10%有裂 | — | — | (4.5) | 密 | 圓 | 23Y | 7/4 有裂 |
| 132 | SXZ20 | 1 個 | 方底土燒器 | 蓋 | 口緣部 | 5%有裂 | — | — | (4.2) | 密 | 圓 | 57R | 6/2 有裂 |
| 133 | SXZ20 | 1 個 | 方底土燒器 | 蓋 | 口緣部 | 10%有裂 | — | — | (2.0) | 密 | 圓 | 57R | 6/6 有裂 |
| 134 | SXZ20 | 1 個 | 方底土燒器 | 蓋 | 口緣部 | 10%有裂 | — | — | (1.8) | 密 | 圓 | 73R | 6/2 有裂 |
| 135 | SXZ20 | 1 個 | 方底土燒器 | 蓋? | 口緣部 | 10%有裂 | — | — | (4.1) | 中空相 | 圓 | 23Y | 7/2 以小孔施灰 |
| 136 | SXZ20 | 1 個 | 方底土燒器 | 蓋 | 口緣部 | 10%有裂 | — | — | (6.7) | 中空相 | 圓 | 57R | 6/4 以小孔施灰 |
| 137 | SXZ20 | 1 個 | 方底土燒器 | 蓋 | 口緣部~底部 | 5%有裂 | — | — | (2.8) | 密 | 圓 | 73R | 6/6 有裂 |
| 138 | SXZ20 | 1 個 | 方底土燒器 | 蓋 | 口緣部~底部 | 60%有裂 | — | — | (4.6) | 中空相 | 圓 | 107R | 6/4 以小孔施灰 |
| 139 | SXZ20 | 1 個 | 方底土燒器 | 蓋 | 口緣部~底部 | 60%有裂 | — | — | (2.5) | 2.6 | 圓 | 57R | 5/6 有裂 |
| 140 | SXZ20 | 1 個 | 方底土燒器 | 蓋 | 口緣部~底部 | 10%有裂 | 15.0 | — | (4.4) | 密 | 圓 | 23Y | 7/2 有裂 |
| 141 | SXZ20 | 1 個 | 方底土燒器 | 蓋 | 口緣部~底部 | 10%有裂 | 19.2 | — | (6.6) | 密 | 圓 | 73R | 6/6 有裂 |
| 142 | SXZ20 | 1 個 | 方底土燒器 | 蓋? | 口緣部~底部 | 10%有裂 | — | — | (5.1) | 密 | 圓 | 73R | 6/3 有裂 |
| 143 | SXZ20 | 1 個 | 方底土燒器 | 蓋 | 口緣部 | 10%有裂 | — | — | (3.1) | 密 | 圓 | 57R | 6/6 有裂 |
| 144 | SXZ20 | 1 個 | 方底土燒器 | 蓋 | 口緣部 | 5%有裂 | — | — | (1.8) | 密 | 圓 | 57R | 5/8 有裂 |
| 145 | SXZ21 | 1 個 | 方底土燒器 | 蓋 | 口緣部 | 10%有裂 | 16.8 | — | (5.2) | 密 | 圓 | 73R | 6/6 有裂 |
| 146 | SXZ21 | 1 個 | 方底土燒器 | 蓋 | 口緣部 | 10%有裂 | 19.0 | — | (3.0) | 密 | 圓 | 73R | 6/6 有裂 |
| 147 | SXZ21 | 1 個 | 方底土燒器 | 蓋 | 口緣部~底部 | 10%有裂 | 15.9 | — | (5.4) | 密 | 圓 | 73R | 7/6 以小孔施灰 |
| 148 | SXZ21 | 1 個 | 方底土燒器 | 蓋 | 口緣部~底部 | 5%有裂 | 21.2 | — | (5.5) | 密 | 圓 | 107R | 5/7 以小孔施灰 |
| 149 | SXZ21 | 1 個 | 方底土燒器 | 蓋 | 口緣部 | 5%有裂 | — | — | (3.5) | 密 | 圓 | 23Y | 5/2 以小孔施灰 |
| 150 | SXZ21 | 1 個 | 方底土燒器 | 蓋 | 口緣部 | 10%有裂 | — | — | (5.0) | 密 | 圓 | 107R | 5/1 有裂 |
| 151 | SXZ21 | 1 個 | 方底土燒器 | 蓋 | 口緣部 | 10%有裂 | — | — | (5.3) | 密 | 圓 | 73R | 7/4 以小孔施灰 |
| 152 | SXZ21 | 1 個 | 方底土燒器 | 蓋 | 口緣部 | 20%有裂 | — | — | (4.0) | 7.2 | 圓 | 57R | 7/6 有裂 |
| 153 | SQZ214 | 1 個 | 方底土燒器 | 蓋 | 口緣部 | 5%有裂 | — | — | (5.3) | 密 | 圓 | 57R | 7/4 以小孔施灰 |
| 154 | SQZ19 | 1 個 | 方底土燒器 | 蓋或底台 | 口緣部 | 10%有裂 | 18.4 | — | (2.2) | 中空相 | 圓 | 73R | 7/4 以小孔施灰 |



調査前風景〔北西より〕



上層
完掘状況全景〔南東より〕



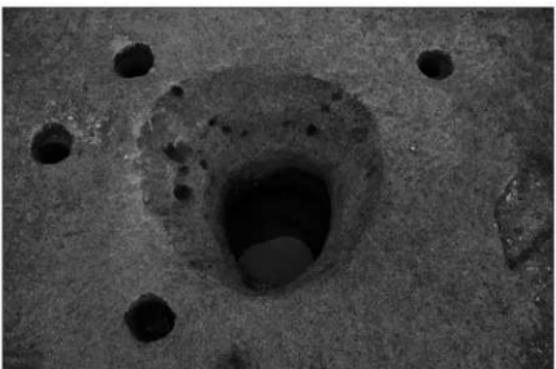
上層
完掘状況全景〔北西より〕



井戸 (SE22)
検出状況〔南西より〕



井戸 (SE22)
土層断面〔南西より〕



井戸 (SE22)
完掘状況〔南西より〕

図版
三



下層
完掘状況全景 [南東より]



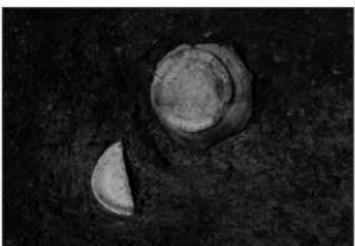
自然流路 (NR220)
検出状況 [南東より]



自然流路 (NR220)
完掘状況 [南東より]



素掘り溝完掘状況〔南東より〕



SE22 遺物(50・55)出土状況〔東より〕



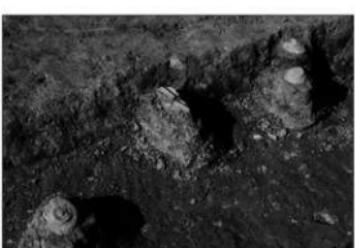
SE22 炭化層(7層)掘削状況〔南西より〕



SX60 完掘状況〔南西より〕



NR220 遺物(139・140)出土状況〔北東より〕



土器集中範囲1 遺物出土状況〔南東より〕

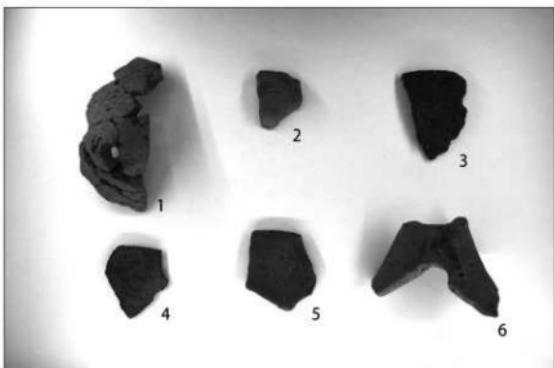


土器集中範囲1 遺物出土状況〔北より〕



SP23 遺物出土状況〔南西より〕

圖版五



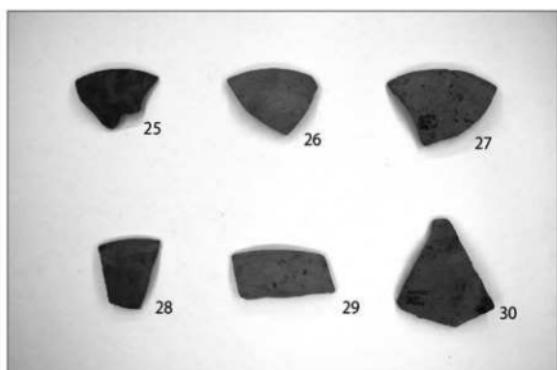
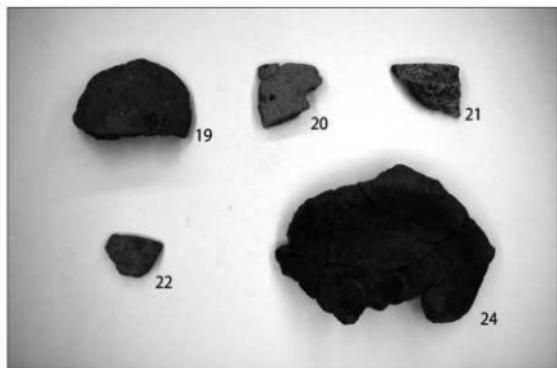
1 : SP3
2 : SP13
3 • 4 : SP6
5 • 6 : SP17



7 : SP18
8 : SP19
9 : SP20
10 ~ 13 : SX60



14 : SD65
15 : SD71
16 • 17 : SD72
18 : SD80

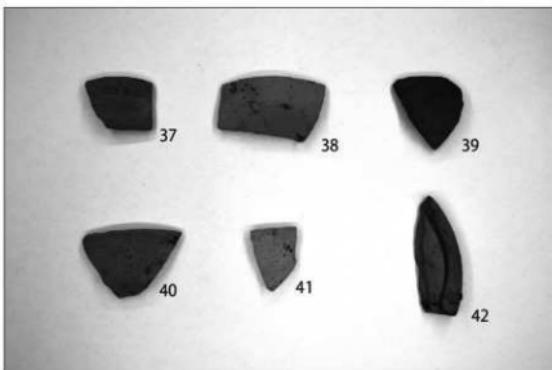


SE22 出土遺物

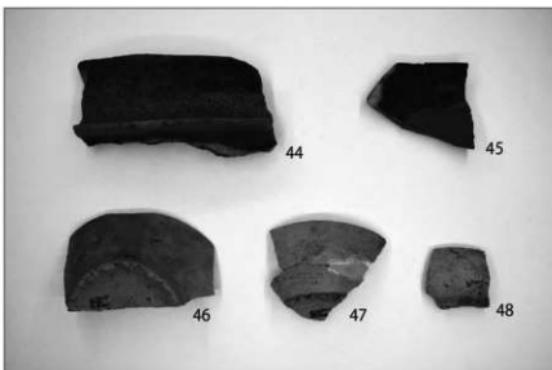


SE22 出土遺物

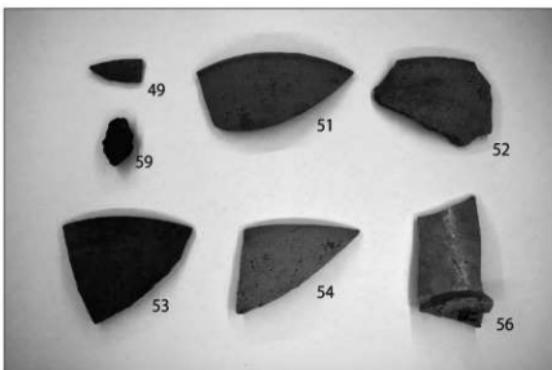
圖版
七



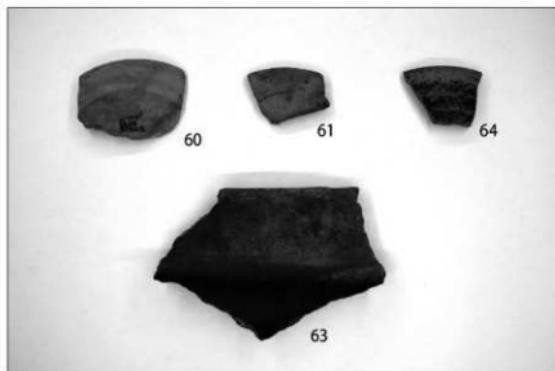
SE22 出土遺物



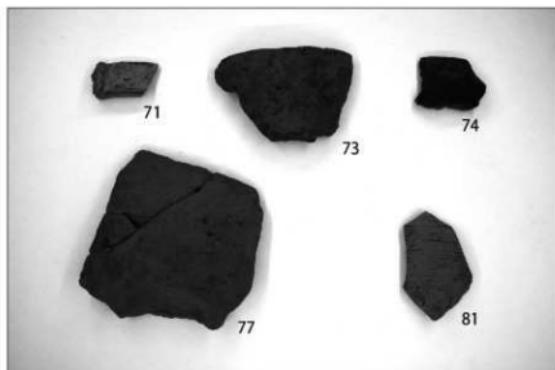
SE22 出土遺物



SE22 出土遺物



SE22 出土遺物

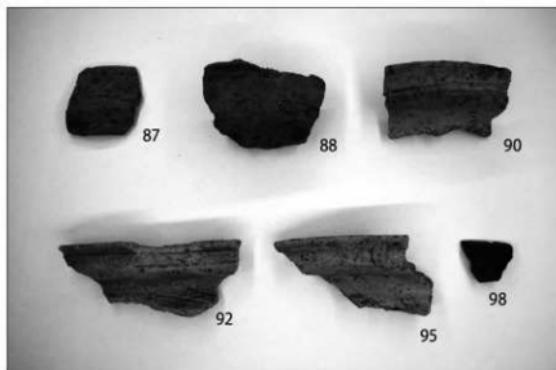


盛り土層（III層）
出土遺物

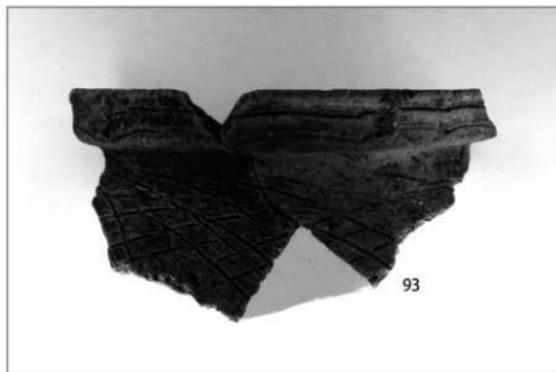


土器集中範囲1
出土遺物

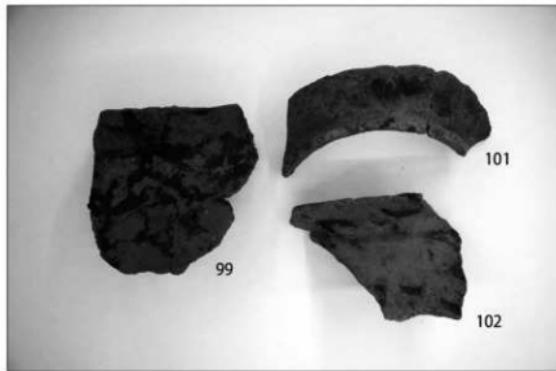
圖版九



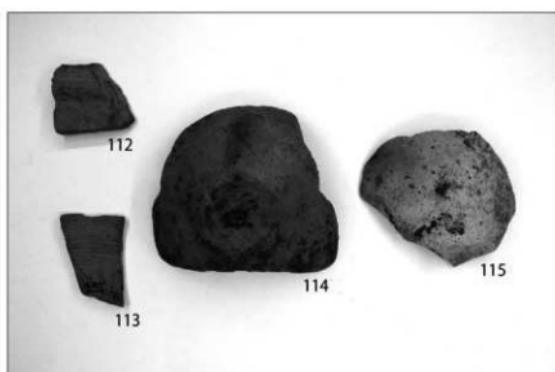
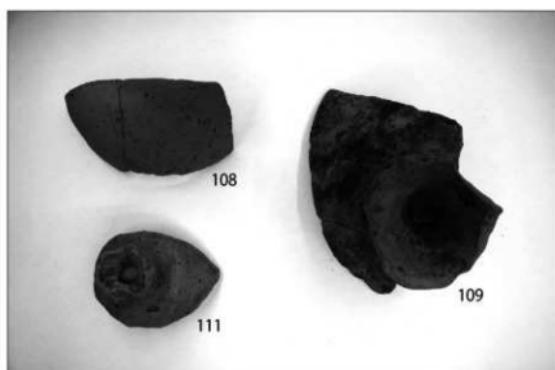
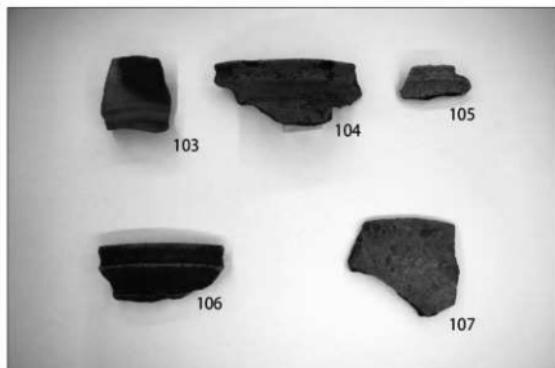
土器集中範圍1
出土遺物

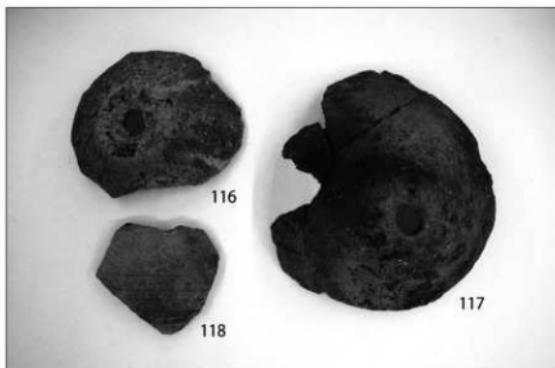


土器集中範圍1
出土遺物

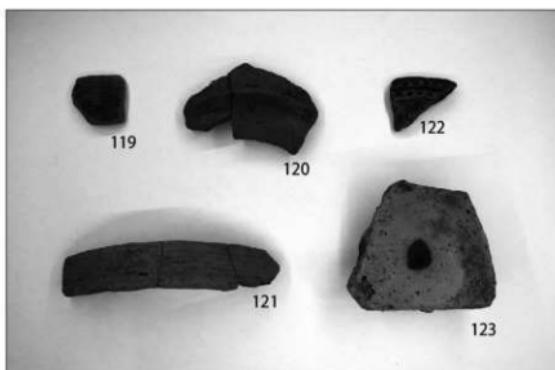


土器集中範圍1
出土遺物

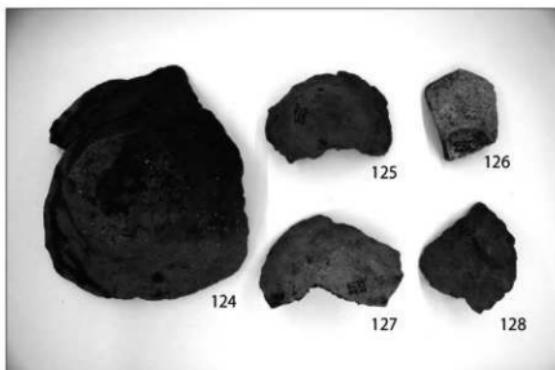




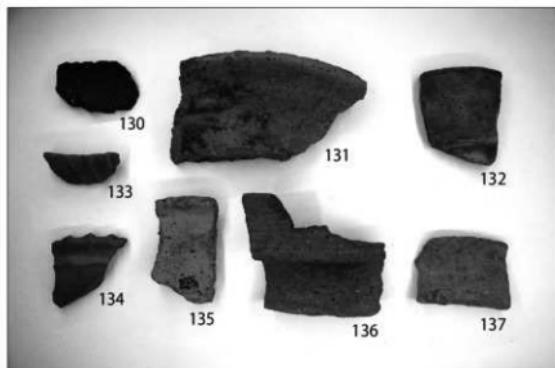
土器集中範圍1
出土遺物



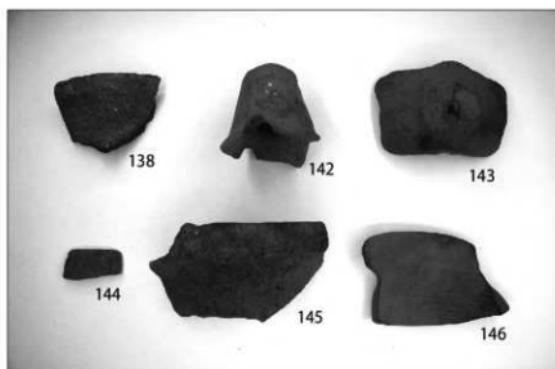
土器集中範圍1
出土遺物



土器集中範圍1
出土遺物



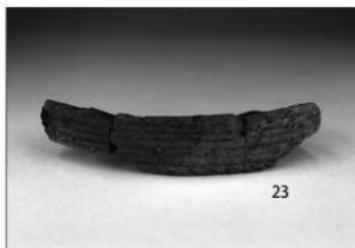
NR220 出土遺物



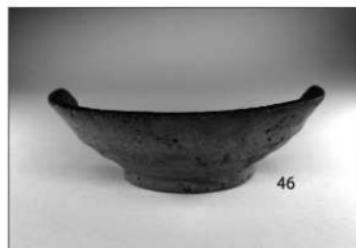
138・142～144 : NR220
145・146 : SX221



SX221 出土遺物



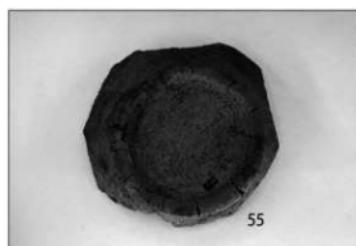
SD83 出土遺物



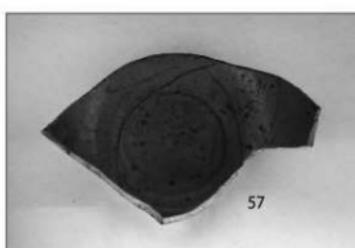
SE22 出土遺物



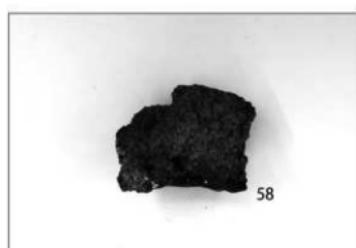
SE22 出土遺物



SE22 出土遺物



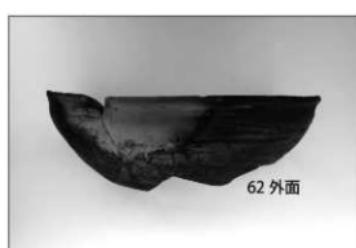
SE22 出土遺物



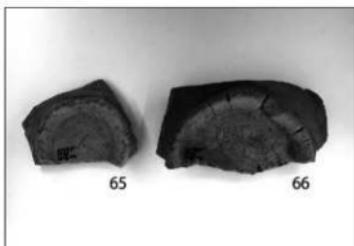
SE22 出土遺物



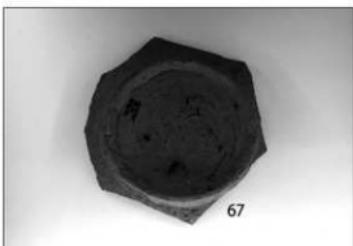
SE22 出土遺物



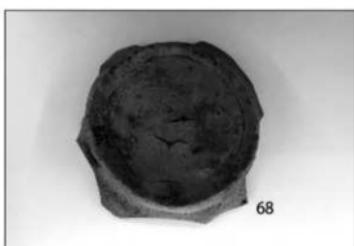
SE22 出土遺物



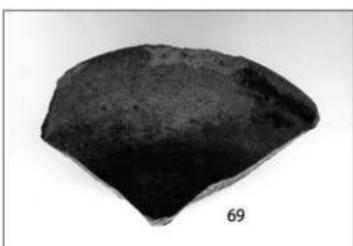
SE22 出土遺物



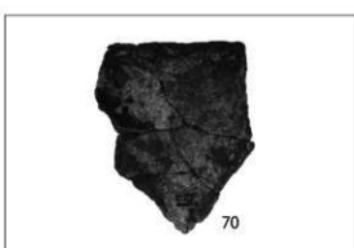
SE22 出土遺物



SE22 出土遺物



SE22 出土遺物



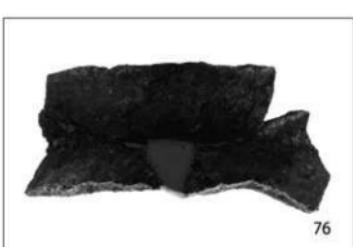
盛り土層（Ⅲ層）出土遺物



盛り土層（Ⅲ層）出土遺物



盛り土層（Ⅲ層）出土遺物



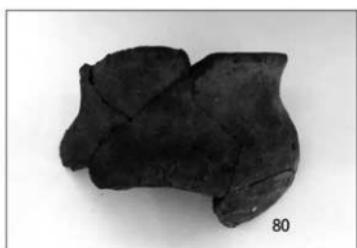
盛り土層（Ⅲ層）出土遺物



盛り土層（Ⅲ層）出土遺物



盛り土層（Ⅲ層）出土遺物



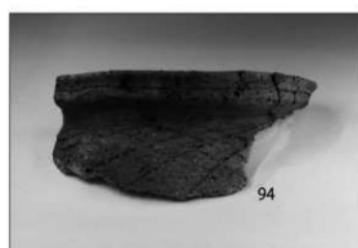
盛り土層（Ⅲ層）出土遺物



土器集中範囲1出土遺物



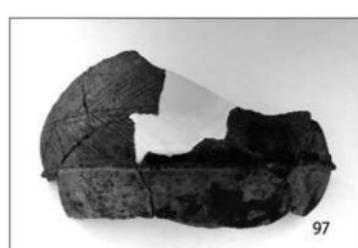
土器集中範囲1出土遺物



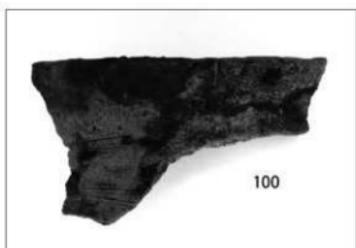
土器集中範囲1出土遺物



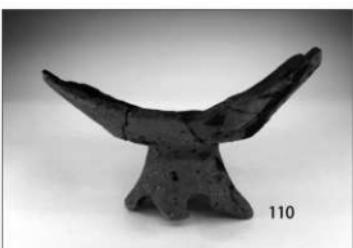
土器集中範囲1出土遺物



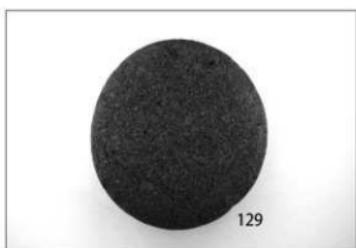
土器集中範囲1出土遺物



土器集中範囲1出土遺物



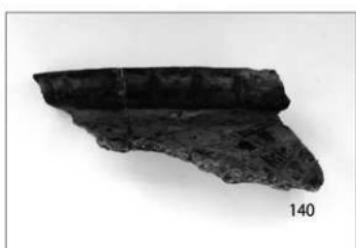
土器集中範囲1出土遺物



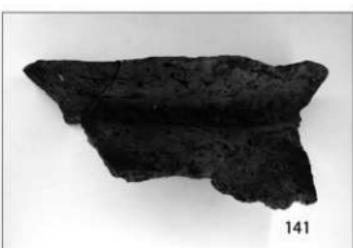
NR220 出土遺物



NR220 出土遺物



NR220 出土遺物



NR220 出土遺物



NR220 出土遺物



SX221 出土遺物

報告書抄録

| ふりがな | やまのわきいせきだい2じはくつちょうさほうこくしょ | | | | | | | |
|--------|---|---------------|-------------------|----------------------|------------------------------|-------------------|---------------------------|--------|
| 書名 | 山之脇遺跡第2次発掘調査報告書 | | | | | | | |
| 副書名 | 宅地造成工事に伴う発掘調査 | | | | | | | |
| 卷次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 彦根市埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 83 | | | | | | | |
| 編著者名 | 林 昭男 | | | | | | | |
| 編集機関 | 彦根市歴史まちづくり部 文化財課 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒522-0001 彦根市尾末町1番38号 Tel.0749-26-5833 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 20210331 | | | | | | | |
| 所取遺跡 | 所在地 | コード | | 世界測地系 | | 調査面積 | 調査期間 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | | | |
| 山之脇遺跡 | ひこねし 彦根市 やまのわきいせき 山之脇町 地先 | 25202 | 037 | 35度 15分 16秒 | 136度 15分 07秒 | 709m ² | 20180801 ～ 20181130 | 宅地造成工事 |
| 所取遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | | |
| 山之脇遺跡 | 集落 | 弥生時代後期～古墳時代前期 | 溝・土坑・小穴・自然流路・落ち込み | 古式土師器 | 犬上川右岸における弥生時代後期後葉～古墳時代前期の土器群 | | | |
| | 集落・田畠 | 平安時代末～中世 | 溝・土坑・小穴・井戸 | 土師器・山茶碗・瓦器・白磁・鋳造関連遺物 | 平安時代末～中世にかけての大規模な整地と耕地開発 | | | |
| 要約 | 犬上川と斧川の中間に位置する山之脇遺跡における第2次調査である。弥生時代後期後葉～古墳時代前期と平安時代末～中世の2時期の遺構・遺物が確認された。弥生時代後期後葉～古墳時代前期の遺構は、旧流路沿いの微高地土にひろがっていたと想定された。古式土師器に関しては、近江北半・南半地域の様相をあわせても、北陸・東海地域に系譜をもつ土器も出土し、その多様性が確認された。平安時代末～中世にかけては、大規模な整地を伴う耕地開発の状況が明らかになった。また、当該期の遺物が井戸(SE22)より出土し、良好な一括遺物を得ることができた。考古学的調査の少ない当該地周辺において、古代の地域社会像を考える上でも重要な成果と言える。 | | | | | | | |

彦根市埋蔵文化財調査報告第83集

山之脇遺跡第2次発掘調査報告書

- 宅地造成工事に伴う発掘調査 -

令和3年(2021)3月発行

編集・発行：彦根市歴史まちづくり部 文化財課

彦根市尾末町1番38号

TEL 0749-26-5833

印刷・製本：有限会社田中印刷所